八幡遺跡
大嶺八幡遺跡

目　　次

第１章　はじめに 169
第２章　八幡遺跡、大嶺八幡遺跡の発掘調査 171
　Ⅰ　遺跡の立地 171
　Ⅱ　発見された遺構と遺物 172
　Ⅲ　考察 196
第３章　田尻町八幡地区、大嶺地区の遺構分布調査 202
　Ⅰ　調査に至る経過 202
　Ⅱ　調査の成果 204
　Ⅲ　遺構の性格について 209
引用参考文献　写真図版

調　査　要　項

遺跡の名称：八幡遺跡（OL）　　大嶺八幡遺跡（OM）
所　在　地：遠田郡田尻町八幡地内
調 査 面 積：八幡遺跡　2500 ㎡　　大嶺八幡遺跡　2400 ㎡
調 査 期 間：平成２年６月11日～７月15日
調 査 主 体：田尻町教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
　　斎藤吉弘　真山悟　阿部博志　須田良平　小村田達也
　　田尻町教育委員会社会教育課
　　泉沢和穂　佐々木四郎　佐々木勝基　安藤龍雄　伊藤圭一　牧野修
分 布 調 査：多賀城跡調査研究所
　　佐々木茂楨　進藤秋輝　丹羽茂　古川雅清　後藤秀一　柳沢和明　村田晃一
　　宮城県教育庁文化財保護課　鈴木真一郎　小村田達也
　　宮城県文化財保護地区指導員　平野一郎
　　田尻町教育委員会　佐々木四郎　佐々木勝基
　　藤原二郎

なお平野一郎氏、藤原二郎氏には、遺構の分布調査に協力していただいた。また佐々木茂楨氏をはじめ多賀城跡調査研究所の方々からは、本文執筆にあたって多大なご教示をいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

八幡遺跡・大嶺八幡遺跡

第１章　はじめに

田尻町や古川市の北部、大崎平野の北方には、奥羽山脈から延びる築館丘陵の東南端にあたる標高40～60mの丘陵が広がっている。

この丘陵は、西から東へ流れる萱刈川などの小河川によって侵食され、大きく見ると西から東に延びる形になっている。また細部を見ると、侵食された丘陵の細い尾根と低地が入り組み、複雑な地形となっている。この丘陵の地質を概観すると、鮮新世に堆積した泥岩、砂岩を基盤とし、その中の低い部分を火砕流堆積物が埋め、それらの上に降下火山灰層が堆積している。

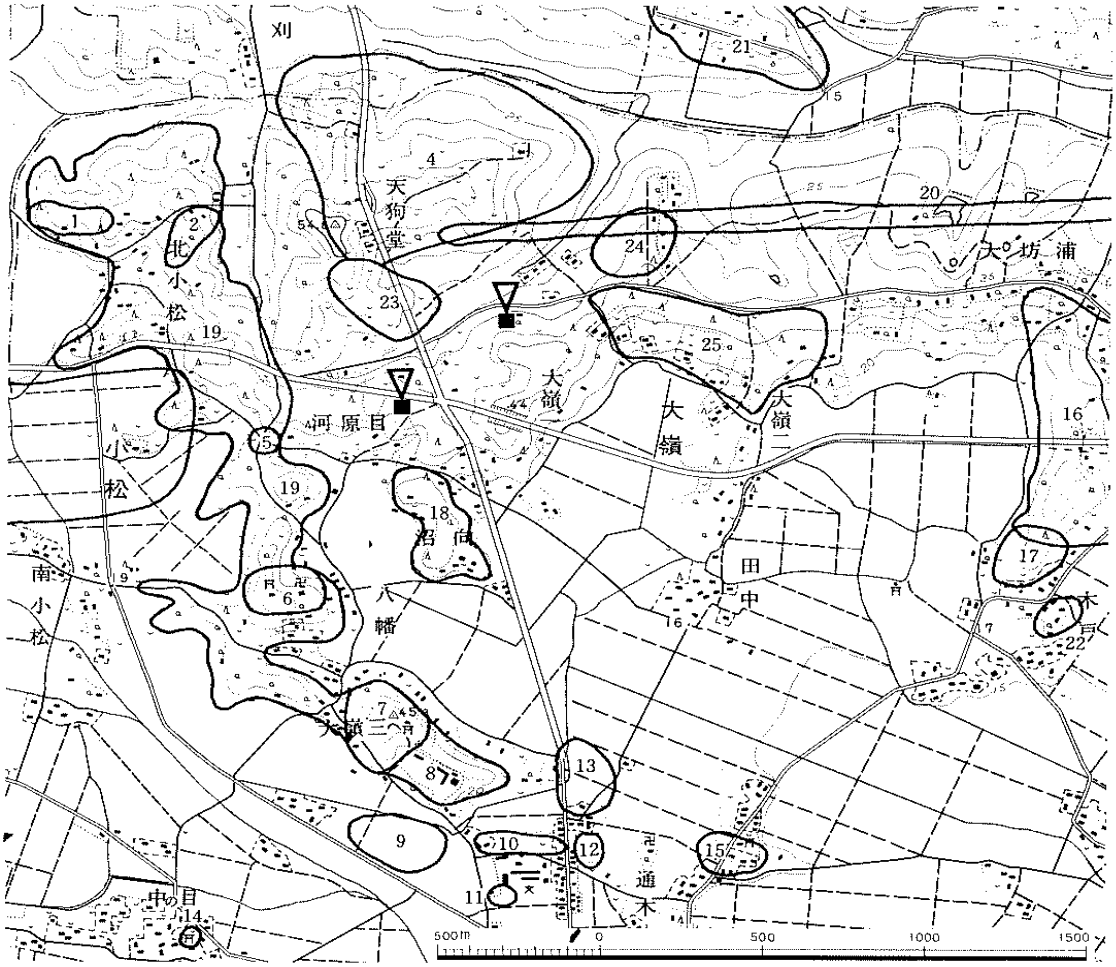
田尻町内のこの丘陵上には、縄文時代と古代（特に奈良時代）を中心に非常に多くの遺跡が発見されている。

旧石器時代の遺跡は、田尻町内では発掘調査されたものはなく、上長根地区などで石器が採集された例がいくつか知られているのみである。しかし同じ丘陵上では座散乱木遺跡（岩出山町）、馬場壇Ａ遺跡（古川市）をはじめ、数多くの旧石器時代の遺跡が発見されている。先述した火砕流堆積物や降下火山灰層は、大きく見ると岩出山町や古川市の北部で見られるものと一連のものであると考えられるので、田尻町内でも今後新しく旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高い。

縄文時代の遺跡は、国史跡の中沢目貝塚をはじめ、晩期の土偶を出土した恵比須田遺跡、動物遺存体や人骨を出土したことで著名な北小松遺跡など、貝塚や集落跡が数多く分布している。弥生時代や古墳時代の大規模な遺跡はまだ見いだされていないが、弥生土器は小塩地区など、古墳時代の土師器は北長根東遺跡など各所で採集されている。なお、古墳時代の後期以降、丘陵上に日向前横穴古墳群などの古墳群や横穴墓が造られている。

奈良時代に入ると遺跡の数は急増する。多賀城の瓦を焼いた木戸瓦窯跡(国史跡)、竪穴住居跡が発掘された天狗堂遺跡（佐藤･手塚1978）などが知られている。その周辺の小松、八幡、大嶺、木戸地区でも至るところでこの時代の瓦や土師器、須恵器などが出土することが知られており、この地域を奈良時代の城柵である新田柵に擬定する説が発表されている(興野1961)。また後述するように今回の一連の調査で、この地域には古代の築地や溝が存在することが明らかになっている。また西方約４ｋｍの丘陵上には、奈良・平安時代の城柵官衙遺跡と考えられている宮沢遺跡がある（斎藤他1980、斎藤･後藤1985）。隣接する新江川遺跡、権現山遺跡では、今年度の古川市教育委員会の調査によって、宮沢遺跡に関連すると考えられる掘立柱建物跡が発見されている（高橋1990）。

平安時代の遺跡としては、天狗堂遺跡が調査されており、竪穴住居跡が検出されている。その他通木山崎遺跡などで平安時代の遺物が採集されているが、この時期の様相はまだ明らかではない。中世以降の遺跡としては、文化財保護課で昨年度調査した大貫館山館跡を始め、木戸館跡、通木館跡などの城館が数多く知られている。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	小松寺跡	寺院跡	奈良	14	忠全寺跡	寺院跡	
2	小松棚跡	城柵？	古代	15	通木城跡	城館	中世
3	北小松・岩田西遺跡	包含地	縄文	16	国史跡木戸瓦窯跡	窯跡	奈良
4	天狗堂遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	17	木戸館跡	城館・包含地	平安・中世
5	白山遺跡	包含地	古代	18	沼向古館跡	城館	中世
6	大崎八幡神社遺跡	城柵？	古代	19	新田柵跡	城柵	古代
7	大嶺薬師山柵跡	城柵？	古代	20	新田柵外墓線	土塁状遺構	古代
8	大嶺山遺跡		古代	21	笹輪遺跡	包含地	古墳・古代
9	団子山西遺跡	包含地	縄文	22	金縛神遺跡	包含地	古代
10	お椀子山遺跡	包含地	縄文・古墳・古代	23	天狗堂南遺跡	包含地	古代
11	田尻小学校西遺跡	包含地	縄文	24	大嶺遺跡	包含地	平安
12	通木山崎遺跡	包含地	平安	25	大嶺館跡	城館	中世・近世
13	通木田中前遺跡	包含地	古代				

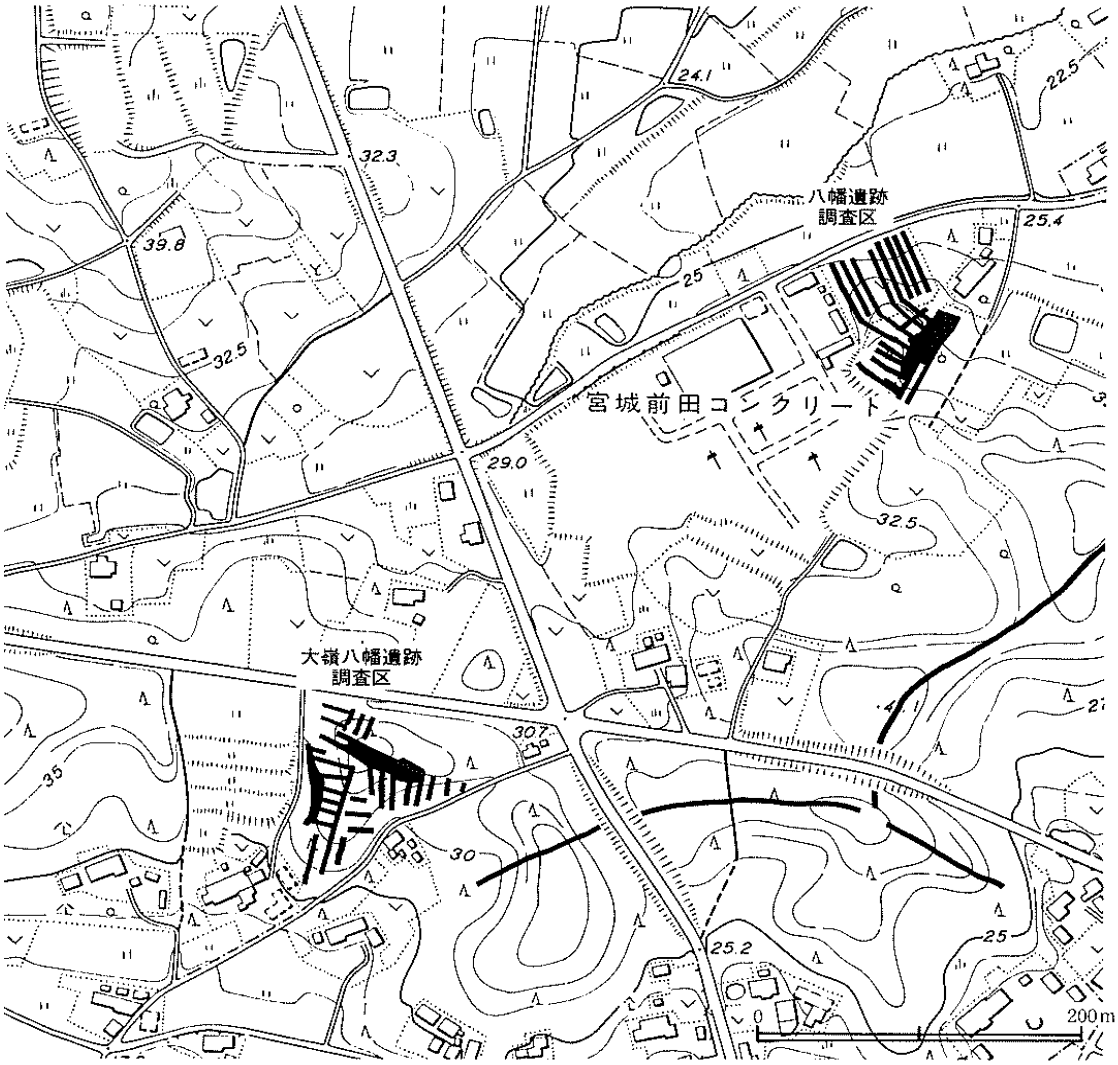
第１図　遺跡の位置と周辺の地形

第２章　八幡遺跡、大嶺八幡遺跡の発掘調査

Ⅰ　遺跡の立地（第２図）

八幡遺跡は、田尻町八幡字袋沢地内に所在する。

八幡、大嶺地区周辺では築館丘陵は侵食が進んでおり、丘陵の細い尾根と低地が入り組んで複雑な地形となっている。遺跡は、その標高40mほどの丘陵尾根の北側、東西方向の谷に向かって開くすり鉢状の小支谷の中にある。この丘陵尾根上には、第３章で述べる古代の城柵に伴うと考えられる築地、溝や土手状の高まりが存在しており、八幡遺跡とは200m足らずの距離である。また谷を隔てた北側の丘陵には、奈良時代から平安時代の住居跡が



第２図　トレンチ配置図

発見された天狗堂遺跡がある。

一方大嶺八幡遺跡は、田尻町八幡字白山地内に存在する。

遺跡は標高40m弱の丘陵尾根上と、隣り合う小支谷の中に位置する。先述の築地、溝などの遺構の北西約100mにあたる。

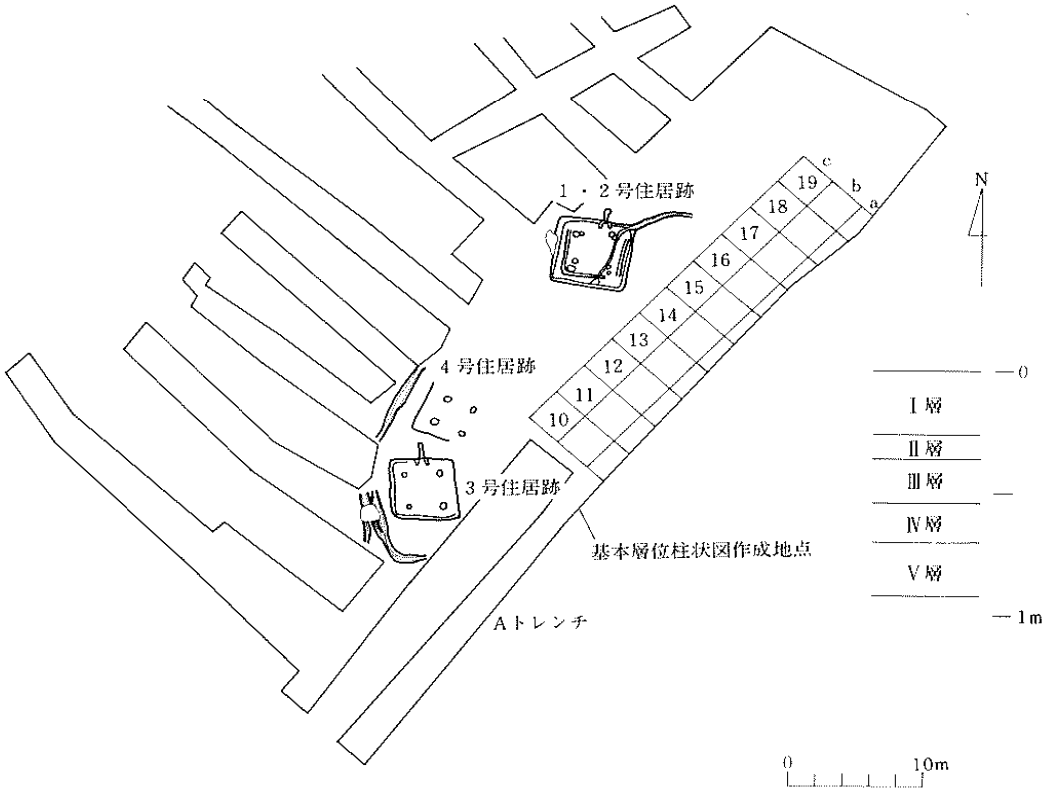
今回はこの二遺跡は別遺跡として調査した。しかし周辺では至るところで土師器や須恵器などを採集できることから、八幡地区一帯、あるいはもっと広い地域が本来的には一つの大きな遺跡であると考えられる。

Ⅱ　発見された遺構と遺物

１．八幡遺跡の調査の方法と基本層位（第３図）

八幡遺跡の調査は、隣接する工場建設に伴うものである。

まず小支谷北側の小さな丘陵尾根上とその北西側傾斜面にトレンチを設定し遺構確認を行ったが、すでに削平を受けており、遺構などは検出されなかった。次に、小支谷部分にトレンチを設定し遺構確認を行った結果、竪穴住居跡を検出した。そこでトレンチを拡張し、



第３図　八幡遺跡遺構配置図，基本層位柱状図

竪穴住居跡を延べ４軒（うち２軒重複）検出し調査した。

なお調査区内の基本層位は次の通りである。

Ⅰ層　暗褐色（10ＹR3/4）土層　表土、耕作土

Ⅱ層　黒色（10ＹR2/1）土層

Ⅲ層　暗褐色（10ＹR3/4）土層　上面に灰白色火山灰が堆積する。遺物を多く包含する。

Ⅳ層　黒色（10ＹR2/1）土層

Ⅴ層　暗褐色（10ＹR3/4）土層　地山の風化帯

Ⅵ層　黄褐色（10ＹR5/6）土層　地山

２．八幡遺跡で発見された遺構と遺物

１号住居跡（第４図）

【位置・確認面】丘陵尾根の南東斜面下、小支谷の底面近くに位置する。Ⅳ～Ⅵ層で確認された。

【重複】２号住居跡と重複し、これよりも新しい。１号住居跡と２号住居跡は方向が全く同一であり、北壁を共有する。このことから１号住居は２号住居の拡張と考えられる。

【平面形・規模】一辺約5.6mの正方形を呈する。

【堆積土】８枚の層からなる。灰白色火山灰層の１層及び黒褐色の２層は住居跡のほぼ全面に堆積する。これに対して地山ブロックを多く含む３～８層は壁際に堆積する。

【壁】斜面側はⅥ層を壁とするが、それ以外の３面はⅣ～Ⅵ層（地山）を壁とする。壁はほとんどは急角度で立ち上がり、部分的にはほぼ垂直に立ち上がる箇所もある。壁の高さは残りの良い所で約80ｃｍである。なお南辺、西辺の周溝中には、壁材痕跡と考えられる黒色土が認められる。

【床】住居の中央部付近は地山を床としている。周縁部は幅40ｃｍ～１ｍほどを帯状に掘っており、その埋土を床としている。

【柱穴】床面で20個のピットが確認された。床面のピットの中で住居平面形の対角線上に位置するＰ1～4は、平面形が方形を基調とし柱痕跡も認められることから、主柱穴と考えられる。なお柱痕跡は円形、長方形がそれぞれ２個である。壁際のＰ10～Ｐ20は壁柱穴と考えられ、北辺と南辺にはそれぞれ対応するように等間隔で３個のピットが認められる。また東辺では、中央部に70ｃｍ間隔で２個のピットが認められる。北東隅の外延溝に近接する両側の壁際には、南東側に２個、北西側に１個のピットが存在する。

【溝】壁沿いに全周する周溝と、床面中央部東寄りに、外延溝に接続，する溝が確認された。

周溝は上面での幅が約20ｃｍ、深さ約10～15ｃｍで、底面はほぼ平坦であり、立ち上がりは

内側はやや傾斜を持つのに対し、壁側はほぼ垂直である。また周溝の内側には掘り方が、住居掘り方を切る形で確認された。

外延溝は住居跡の南辺に始まり、床面中央東寄りを横切り、住居跡の北東隅から約4.8m延びている。削平を受けているので、本来はさらに延びるものと考えられる。住居跡内では上幅約10～20ｃｍで深さは約５ｃｍ、住居跡外では住居に接するところで上幅約60ｃｍ、下幅約20ｃｍ、深さ35ｃｍの規模をもち、断面形は逆台形を呈する。

【カマド】北壁やや東寄りに付設されており、本体は両側壁が10～30ｃｍの高さで残存する。煙道は、カマド底面より約20ｃｍ高い位置から緩やかに下方に傾斜しながら約70ｃｍ延びる。先端には長径約50ｃｍの煙出しピットがある。本体は周溝及び周溝掘り方を埋め、地山土（黄褐色粘土）を貼り付けて構築されている。本体は内側が焼けて硬化している。底面は平坦で焼けているが、側壁のように硬化していない。

【貯蔵穴状ピット】西壁に沿った中央部やや北寄りに位置する(Ｐ8)。長軸95ｃｍ、短軸85ｃｍの楕円形を呈し、深さは17ｃｍで皿状の断面形を呈する。堆積土中には厚さ１～２ｃｍの炭化物層（２層）が認められる。遺物は堆積土３層から土器片が若干出土したのみである。

【遺物】掘り方埋土中、床面のピット、床面上、堆積土中から非ロクロ土師器、須恵器、鉄製品などが出土している（第５～７図）。

［土師器］

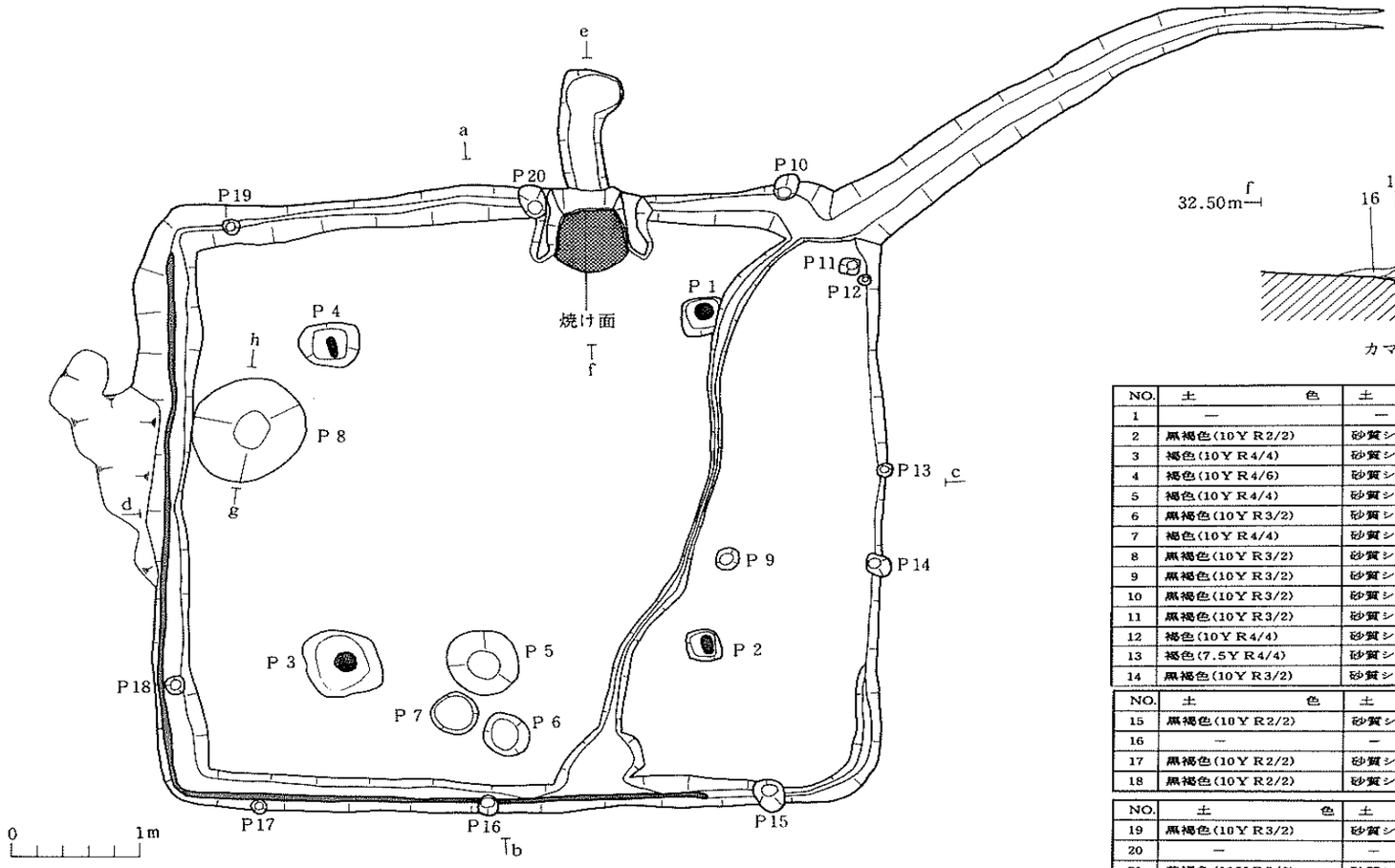
<坏>　１、２とも丸底である。１は口縁部は直線的に開く。外面には沈線が施される。内面は稜や段は形成されない。２は口縁部は内湾しながら開く。外面には段が認められる。内面は稜や段は形成されない。17は住居跡堆積土２、３層からの出土である。体部中央で内側に屈曲する器形である。外面の調整は不明であるが内面はヨコナデであり、他の土師器坏とは様相を異にする。

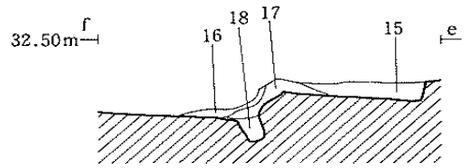
<椀>　３は体部から口縁部は内湾しており、丸底である。螺旋状に粘土紐を積み上げた痕跡が見られる。４は口縁部は直線的に開く。

<甕>　５、６は鉢状のものである。口縁部は強く外反し、肩部には段が見られる。７は底部のみで全体の器形は不明である。８～10は長胴のものである。８は体部上半以上が失われているため全体の器形は不明である。９は口縁部は強く屈曲して直線的に外傾し、胴部はやや膨らむ。肩部には沈線が施される。10も体部上半以上が失われ、全体の器形は不明である。

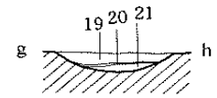
［須恵器］

<坏>　11は底部から体部にかけては強く屈曲するが、内面の底部と体部の境界は不明瞭である。

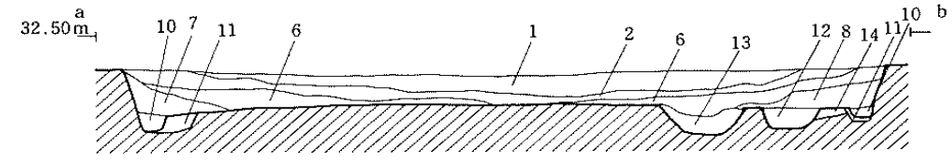


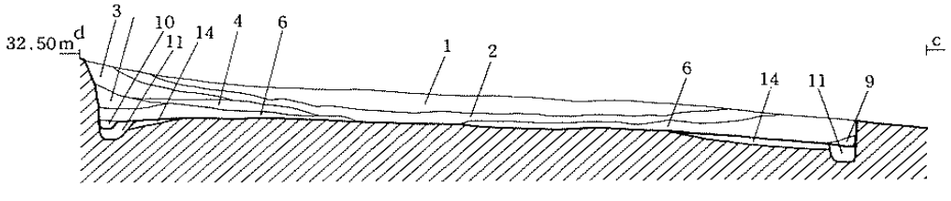


カマドセクション図



P8セクション図





NO.	土色	土性	備考
1	—	—	灰白色火山灰
2	黒褐色(10Y R2/2)	砂質シルト	自然流入土
3	褐色(10Y R4/4)	砂質シルト	自然流入土
4	褐色(10Y R4/6)	砂質シルト	自然流入土
5	褐色(10Y R4/4)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック多く含む
6	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック多く含む
7	褐色(10Y R4/4)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック多く含む
8	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック多く含む
9	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	自然流入土
10	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	周溝堆積土
11	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	周溝掘り方埋土 地山ブロック含む
12	褐色(10Y R4/4)	砂質シルト	P6堆積土
13	褐色(7.5Y R4/4)	砂質シルト	P5堆積土 焼土若干含む
14	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	住居掘り方埋土 地山ブロック多く含む

NO.	土色	土性	備考
15	黒褐色(10Y R2/2)	砂質シルト	自然流入土
16	—	—	カマド崩落土 地山土
17	黒褐色(10Y R2/2)	砂質シルト	カマド内堆積土 焼土・木炭含む
18	黒褐色(10Y R2/2)	砂質シルト	周溝掘り方埋土

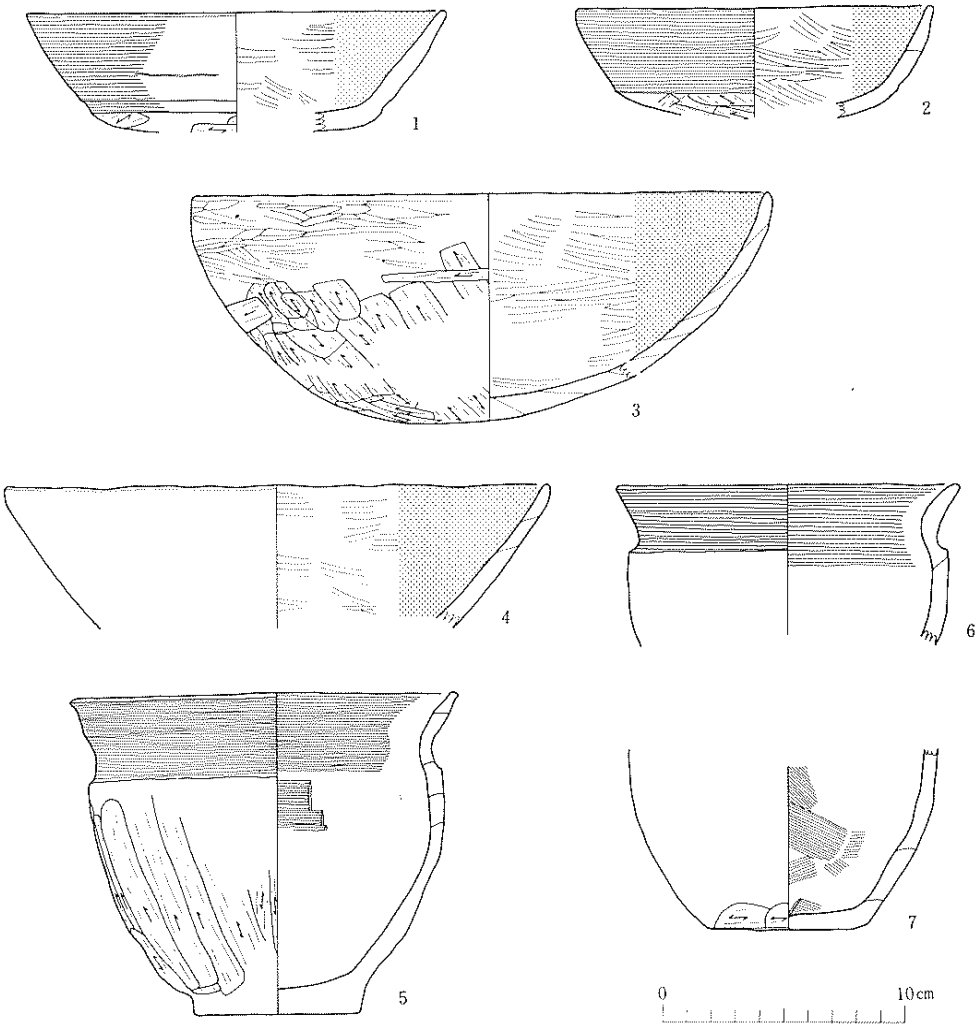
NO.	土色	土性	備考
19	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	住居跡堆積土6層と同一
20	—	—	木炭層
21	黄褐色(10Y R5/6)	砂質シルト	黒褐色土ブロック若干含む

NO.	深さ(cm)	土色	性格	備考
P 1	55	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴	黒褐色土若干含む 柱痕跡あり
P 2	38	黒褐色(10Y R3/2)	主柱穴	地山ブロック多い 柱痕跡あり
P 3	54	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴	黒褐色土若干含む 柱痕跡あり
P 4	不明	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴	黒褐色土若干含む 柱痕跡あり
P 5			住居内ピット	セクション図参照
P 6			住居内ピット	セクション図参照
P 7	12	暗褐色(10Y R3/4)	住居内ピット	一括土器出土
P 8			貯蔵穴状ピット	セクション図参照
P 9	10	不明	住居内ピット	
P10	19	不明	壁柱穴	
P11	不明	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P12	不明	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P13	3	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P14	16	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P15	13	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P16	不明	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P17	3	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	
P18	20	褐色(10Y R4/4)	壁柱穴	
P19	9	不明	壁柱穴	
P20	26	黒色(10Y R2/1)	壁柱穴	

第4図　八幡遺跡1号住居跡

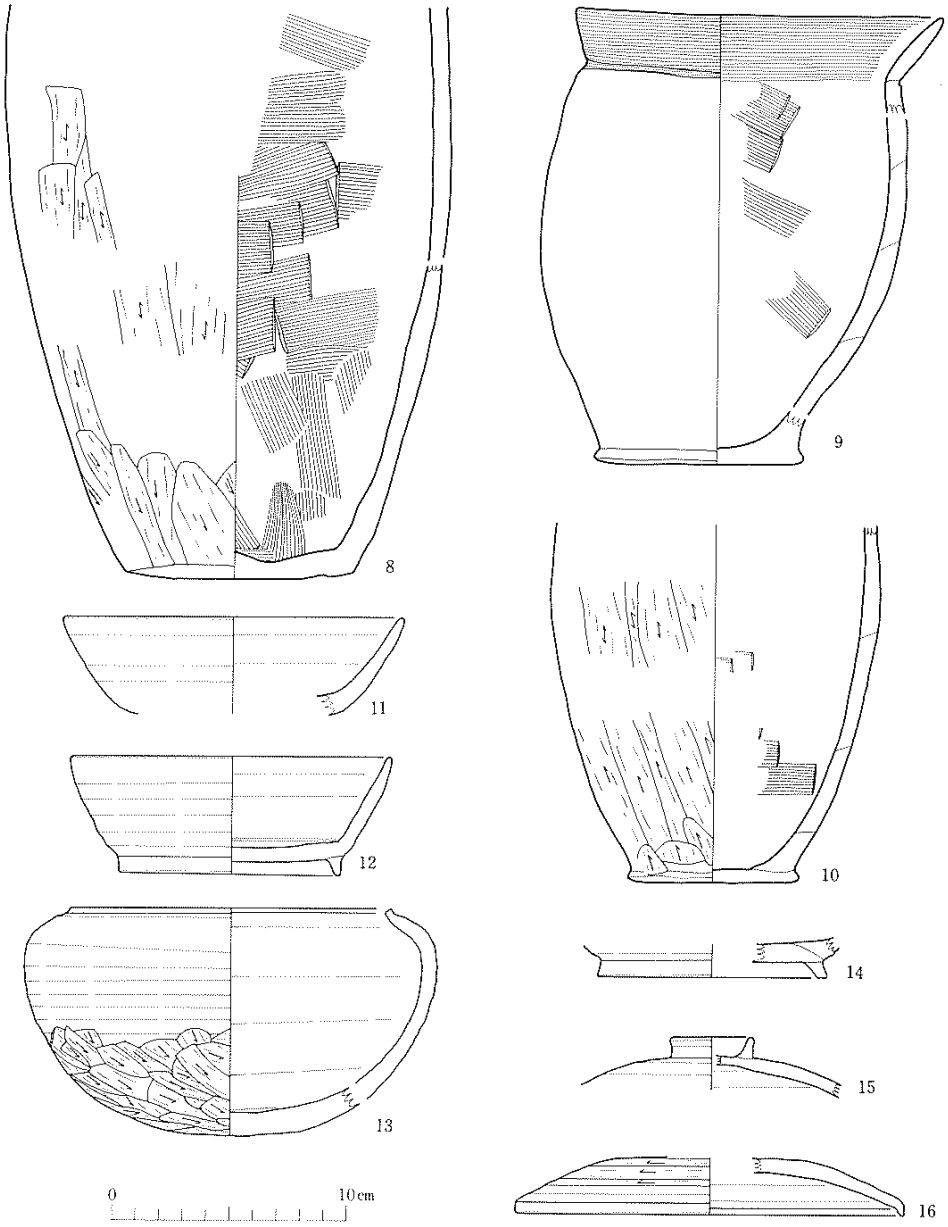
<高台付坏>　12は体部から口縁部にかけてはやや内湾気味に開く。底部から体部にかけては強く屈曲し、内面にはヘラ状工具による沈線状の痕跡が認められる。底部は回転ヘラケズリされている。高台部端は丸く収まる。14は全体の器形は不明である。底部切り離しは静止糸切りである。高台部端部は平坦である。

<鉢>　13は口縁部はわずかに立ち上がり、肩は張り、丸底である。体部下半から底部にかけてはヘラケズリされている。



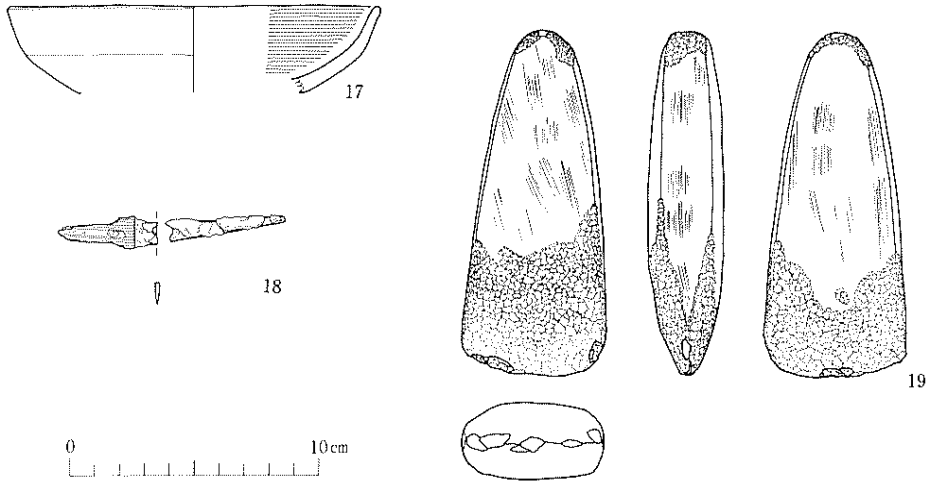
NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	A I a	床	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	17.2	／	(4.8)		1/4
2	土師器坏	A I a	床	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.8	／	(4.5)		1/4
3	土師器椀	A	床	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	24.0	／	9.4	7-3	1/2
4	土師器椀	／	周溝堆積土	マメツ	／	ヘラミ→黒色処理？	22.6	／	(5.8)		1/8以下
5	土師器甕	B	床	口縁ヨコナデ体部ヘラケズリ	木葉痕	ヨコナデ ヘラナデ	16.0	7.0	13.1	7-1	4/5
6	土師器甕	B	床	口縁ヨコナデ体部ヘラケズリ	／	ヨコナデ	14.2	／	(6.6)		1/8以下
7	土師器甕	／	P7堆積土	ヘラケズリ マメツ	木葉痕	ヘラナデ	／	6.7	(7.4)		1/2

第５図　八幡遺跡１号住居跡出土遺物（1）



NO.	器種別	分類	層　位	外　　面	底　　部	内　　面	口径	底径	器高	図版	残存率
8	土師器甕	A	床	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラナデ	／	9.8	(25)		1/3
9	土師器甕	A	カマド内	口縁ヨコナデ 体部火ハネ	木葉痕	ヘラナデ	15.7	8.9	19.3		4/5
10	土師器甕	A	P7堆積土	ヘラケズリ	木葉痕	ヘラナデ	／	7.2	(15)		1/6
11	須恵器坏	A	4～9層	ロクロ調整(目明瞭)	／	ロクロ調整(目明瞭)	14.6	／	(4.2)		1/5
12	須高台坏	－	4～9層	ロクロ調整(目明瞭)	回転ヘラケズリ	ロクロ調整(目明瞭)	13.8	9.5	5.1	7-4	2/3
13	須恵器鉢	－	4～9層	ロクロ調整(目明瞭)	手持ヘラケズリ	ロクロ調整(不明瞭)	13.6	－	9.8	7-2	2/3
14	須高台坏	－	4～9層	ロクロ調整	静止糸切	ロクロ調整	／	9.8	(1.8)		1/8以下
15	須恵器蓋	－	4～9層	ロクロ調整	(リング状つまみ)	ロクロ調整	／	3.4	(2.1)		1/6
16	須恵器蓋	－	床	ロクロ調整→回転ヘラケズリ	／	ロクロ調整	16.6	／	(2.5)		1/6

第6図　八幡遺跡1号住居跡出土遺物(2)



NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
17	土師器坏	B	1～3層	マメツ	／	ヨコナデ	15.0	／	(3.5)		1/8以下

NO.	器種別	層位	全長	全幅	全厚	重量	石材	図版
18	刀子	4～9層	(8.8)	0.9	0.2	／	―	

2号住居跡出土遺物

19	磨製石斧	P5堆積土	13.7	5.8	3.0	366g	凝灰岩

第７図　八幡遺跡１号住居跡，２号住居跡出土遺物

<蓋>　15はリング状のつまみをもつ。天井部はロクロ調整されている。16は低平な器形で、天井部は回転ヘラケズリされている。

［鉄製品］　18は刀子である。ほぼ完形で木質部も残存する。

２号住居跡（第８図）

【位置・確認面】１号住居跡の内側、床面並びに掘り方埋土下で確認された。

【重複】１号住居跡と重複し、これに切られている。

【平面形・規模】３辺の周溝と柱穴のみ確認された（北壁は１号住居跡と共有する）。これによって平面形を推定すると東西約4.4m、南北約4.7mの長方形となる。

【堆積土】確認されなかった。

【壁】確認されなかった。

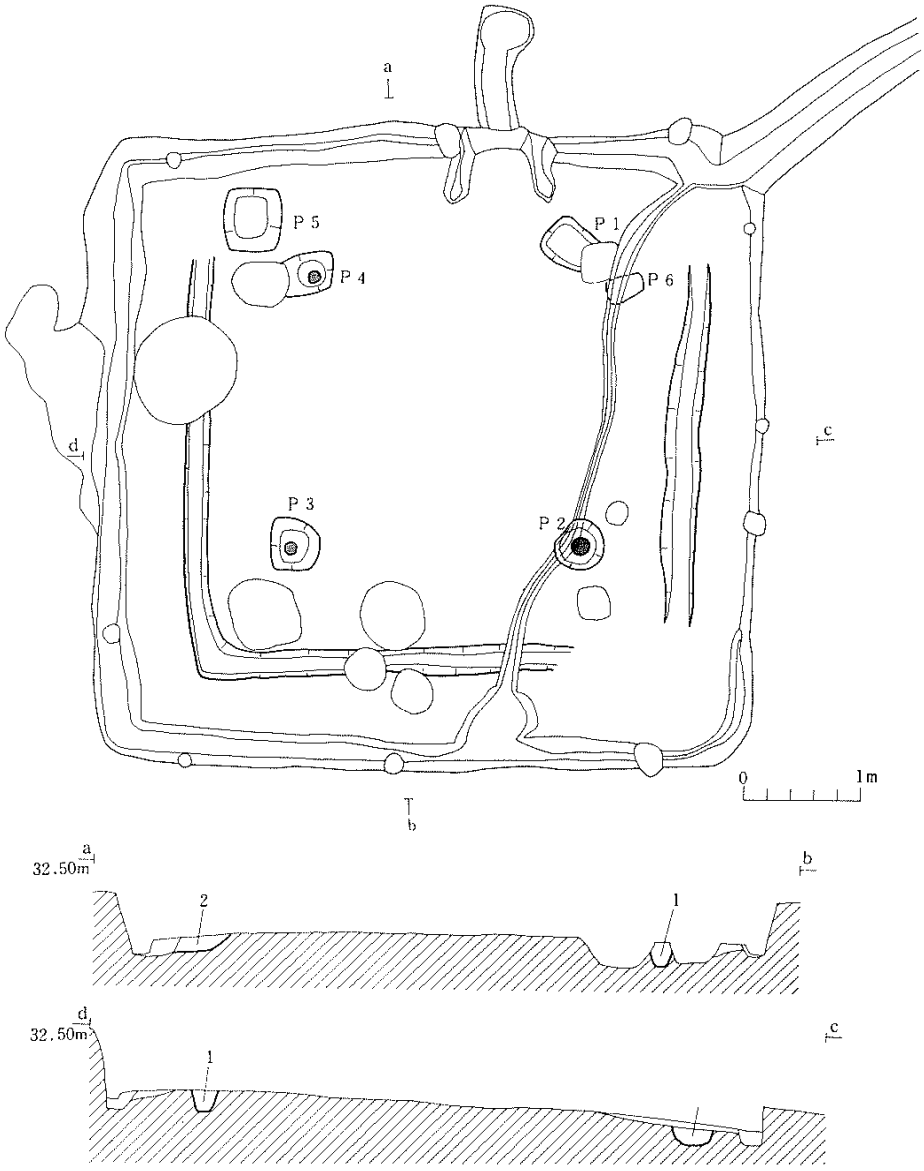
【床】不明である。

【柱穴】床面で６個のピットが確認された。住居平面形の対角線上に位置し、円形の柱痕跡の認められるP2～4は主柱穴と考えられるが、北東隅のP1、6についてはいずれが主柱穴であるかは不明である。南東のP2を除き、平面形はいずれも長方形を基調とする。

【周溝】三辺に認められた。上幅20～30ｃｍ、下幅10～15ｃｍ、深さ10～15ｃｍで、逆台形状の断面を呈する。

【カマド】確認されなかった。

【貯蔵穴状ピット】北西隅に長軸55ｃｍ、短軸50ｃｍの長方形を呈し、深さは20ｃｍほどの貯蔵穴



NO.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	周溝埋積土 地山ブロック多く含む
2	黒褐色(10Y R3/2)	砂質シルト	掘り方ピット埋土 地山ブロック多く含む

NO.	深さ(cm)	土　　色	性　格	備　　考
P 1	32	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴？	黒褐色土若干含む
P 2	49	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴	黒褐色土若干含む
P 3	40	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴	黒褐色土若干含む
P 4	43	黄褐色(10Y R5/6)	主柱穴	黒褐色土若干含む
P 5	17	黒褐色(10Y R3/2)	貯蔵穴状ピット	地山ブロック含む
P 6	不明	不明	主柱穴？	

第８図　八幡遺跡２号住居跡

と考えられるピット（P5）が確認された。堆積土は黒褐色のシルト質土であり、遺物は出土していない。
【遺物】P5堆積土中より磨製石斧が出土している（第７図19）。
３号住居跡（第９図）
【位置・確認面】小支谷の斜面中位に位置する。基本層位Ⅳ層及び地山面で確認された。
【平面形・規模】方形を基調としている。東側の壁や床の一部が失われているが、掘り方から推定すると、規模は東西軸が5.0m、南北軸が5.1mである。
【堆積土】暗褐色～黒色の砂質シルト層で、４枚の層に分けられる。第１層は住居跡の北西寄りの部分に、第２層は住居跡中央、第３層は南寄りから南壁にかけて分布し、第４層は床面上全面に堆積している。
【壁】東壁が失われている。西壁及び北、南壁の西半は地山を、他の部分は基本層位第Ⅳ層を壁としている。立ち上がりは急角度であり、壁高は遺存状況の良い南西コーナーで約70ｃｍである。
【床】東側の一部が失われている。住居の西側と南側の西半にかけては地山を、他は住居掘り方埋土を床としている。平坦でほぼ全面が堅くしまっている。
【柱穴】床面から６個のピットが検出されている。このうちＰ1～Ｐ4は住居の対角線上にあり、深さも50ｃｍ前後と共通しており、主柱穴と考えられる。なおＰ1、Ｐ3、Ｐ4は円形の柱痕跡が確認されており、その径は15ｃｍ前後である。
【周溝】南辺、西辺、及び北辺の西寄りで検出されている。本来は他の部分にも巡っていたものと思われるが削平のため失われている。規模は幅15～20ｃｍ、深さは10～15ｃｍである。
【カマド】北辺中央に付設されたもので、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の規模は幅約30ｃｍ、奥行約80ｃｍで、底面は中央がややくぼんでおり、ほぼ全体が焼けて赤変している。側壁は黄褐色粘土質の地山土を貼り付けて構築されており、内面は強く赤変、硬化している。煙道は長さ約90ｃｍ、幅約20ｃｍで燃焼部底面より15ｃｍほど立ち上がった部分からやや下方に傾斜しながら延び、先端に深さ15ｃｍほどの煙出しピットが掘られている。
【外周溝】住居外の西側～南側斜面上方に排水施設と思われる外周溝が巡る。規模は幅が40ｃｍ～70ｃｍ、深さは30ｃｍ～40ｃｍである。
【遺物】掘り方埋め土中、床面上、堆積土中から、非ロクロ土師器、須恵器、石製品が出土している（第10～11図）。
［土師器］
<坏>　１、２は丸底の、３は平底の坏である。いずれも口縁部は内湾しながら開く。１は外面に沈線が施される。２は外面に段が認められる。３は沈線、段は認められない。い

ずれも内面には稜や段は認められない。

<椀>　４は丸底状の平底を呈する。体部から口縁部にかけては内湾しながら開く。

<甕>　５、６は長胴形の器形である。５は肩部が張り、６はやや体部が膨らみ気味になり肩部には段が形成される。７は口縁部はやや内湾しながら延び、頸部は強く屈曲している。体部以下が失われており、全体の器形は不明である。外面には接合痕が残る。器形や調整の面で他の土器とは異なっている。８は体部が強く張るが、体部下半が失われているために全体の器形は把握できない。肩部には段が形成される。９は体部が強く張り球形を呈する器形である。肩部には段が形成される。

［須恵器］高台付坏が１点出土している（10）が、底部のみの出土で全体の器形は不明である。底部切り離し･再調整は、［静止糸切り→回転ヘラケズリ］である。高台部端部は平坦である。

［石製品］完形の砥石が１点出土している（11）。機能面は３面あり、その他機能面ではないが擦痕が認められる面が１面ある。

４号住居跡（第12図）

【位置・確認面】調査区南寄り東斜面にあり、３号住居跡北寄りに位置する。基本層位Ⅳ層及び地山面で確認された。

【平面形・規模】方形を基調とするが、東辺と北辺が失われており、規模は不明である。

【堆積土】暗褐色～黒褐色の砂質シルトで、３枚の層に細分される。各層ともわずかに残存するのみで分布状況は不明である。

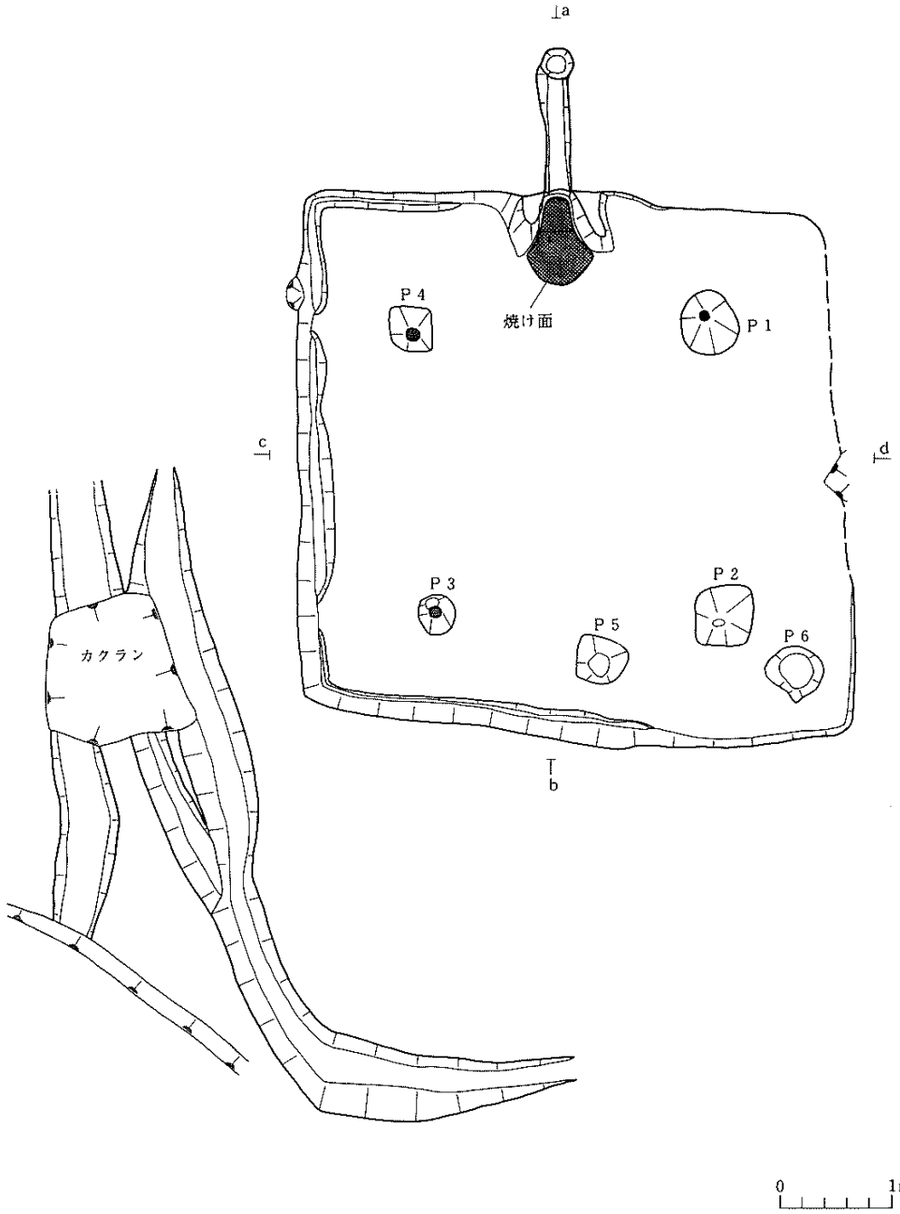
【壁】南辺と西辺が残存しており、南辺東半分は基本層位第Ⅳ層を、他は地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで壁高は最も残存状況の良い南西コーナーで約20ｃｍである。

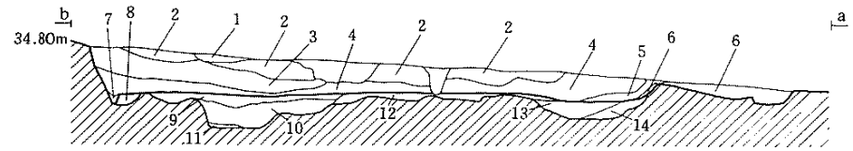
【床】南辺付近と西辺の南寄りの部分が残存する。住居掘り方埋土を床としており、平坦で堅くしまっている。

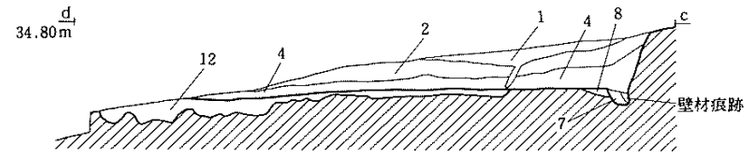
【柱穴】５個のピットが検出されている。このうちＰ1～Ｐ4は配置や柱穴の規模などに規則性が見られることから主柱穴と考えられる。

【外周溝】住居外の西傾斜面上方に排水施設と考えられる外周溝が巡る。規模は幅が 60ｃｍ～80ｃｍ、深さが約 20ｃｍである。方向から考えて３号住居跡の外周溝と接続する可能性があるが、確認できなかった。

【遺物】堆積土中から、非ロクロ土師器の坏が１点出土している(第11図12)。丸底であり、内湾しながら開く器形を呈する。外面には段が形成され、内面には稜や段は形成されない。





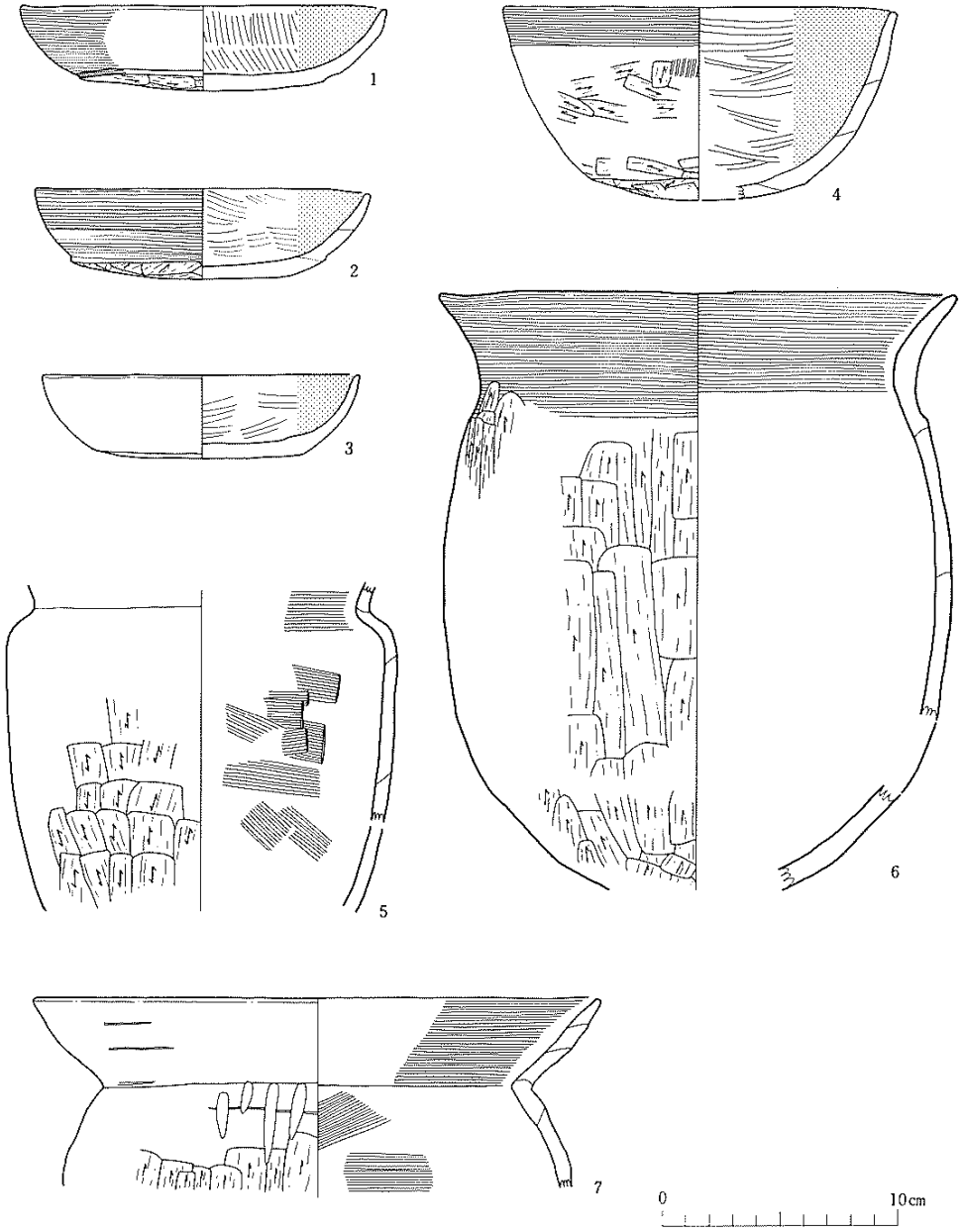


NO.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒色(10Y R2/1)	砂質シルト	自然流入土
2	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	自然流入土
3	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック多く含む
4	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック含む
5	――	――	焼土
6	暗褐色(7.5Y R3/3)	砂質シルト	自然流入土 焼土若干含む
7	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	周溝堆積土
8	暗褐色(10Y R3/4)	シルト	周溝掘り方埋土 地山ブロック含む
9	黄褐色(10Y R5/6)	砂質シルト	住居掘り方埋土 黒褐色土若干含む
10	黒褐色(10Y R2/2)	シルト	住居掘り方埋土 地山ブロック含む
11	黄褐色(10Y R5/6)	砂質シルト	住居掘り方埋土 黒褐色土若干含む
12	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	砂質シルト	住居掘り方埋土 黒褐色土多く含む
13	黒褐色(10Y R2/2)	シルト	住居カマド下ピット埋土 炭化物若干含む
14	黒褐色(10Y R3/2)	シルト	住居掘り方埋土

NO.	深さ(cm)	土色	性格	備考
P 1	28	不明	主柱穴	柱痕跡有り 地山ブロック多く含む
P 2	57	不明	主柱穴	地山ブロック多く含む
P 3	40	不明	主柱穴	柱痕跡有り 地山ブロック多く含む
P 4	45	不明	主柱穴	柱痕跡有り 地山ブロック多く含む
P 5	23	不明	住居内ピット	
P 6	13	不明	住居内ピット	

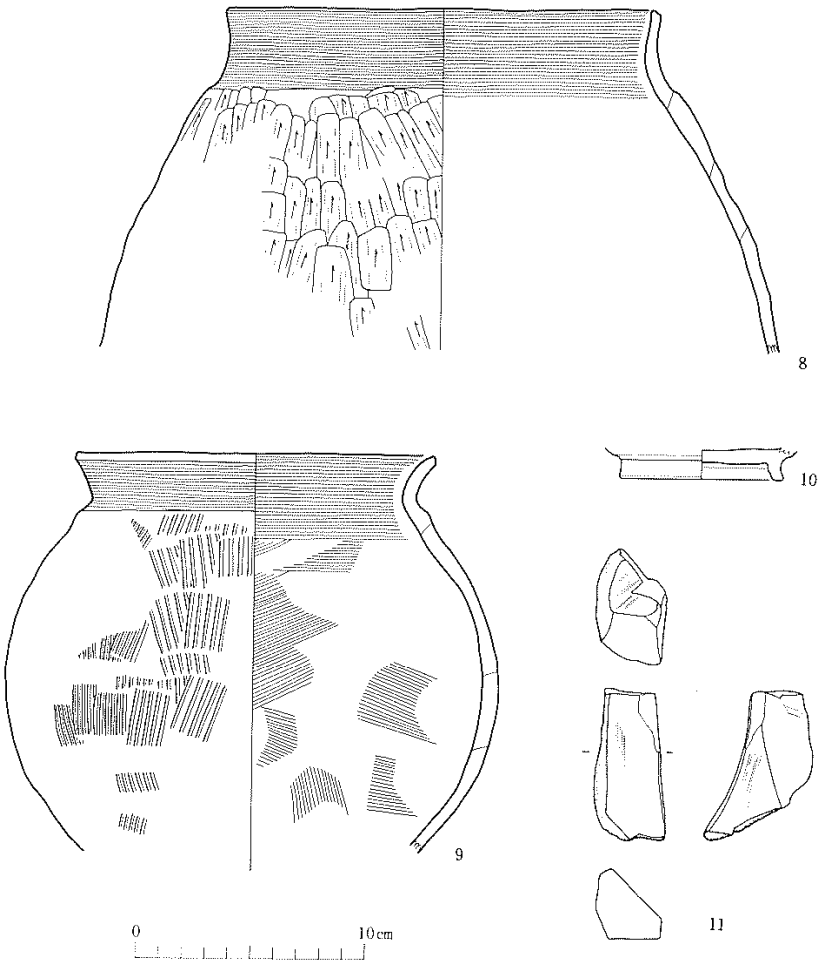
層　名	土　　色	土 性	備　　考
外周溝堆積土	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	自然流入土

第９図　八幡遺跡３号住居跡



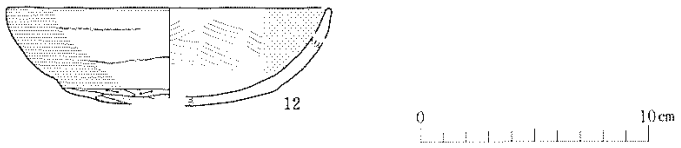
NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	A I a	床	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	15.6	—	3.8	7-9	3/4
2	土師器坏	A I a	床	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.2	—	4.0	7-7	3/4
3	土師器坏	AIII I c	P3堆土	マメツ	マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	13.5	8.6	3.7	7-5	3/4
4	土師器椀	B	床	口縁ヨコナデ以下ヘラケハケメ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	16.7	9.1	8.4	7-6	3/4
5	土師器甕	A	カマド焼土	ヘラケズリ	／	ヘラナデ	／	／	(14)		1/8以下
6	土師器甕	A	煙道堆積土	口縁ヨコナデ体部ヘラケズリ	／	口縁ヨコナデ	21.8	／	(26)		1/6
7	土師器甕	／	床	体部ヘラケズリ→ヘラミガキ？	／	ヨコナデ ナデ	24.2	／	(8.6)		1/8以下

第10図　八幡遺跡３号住居跡出土遺物



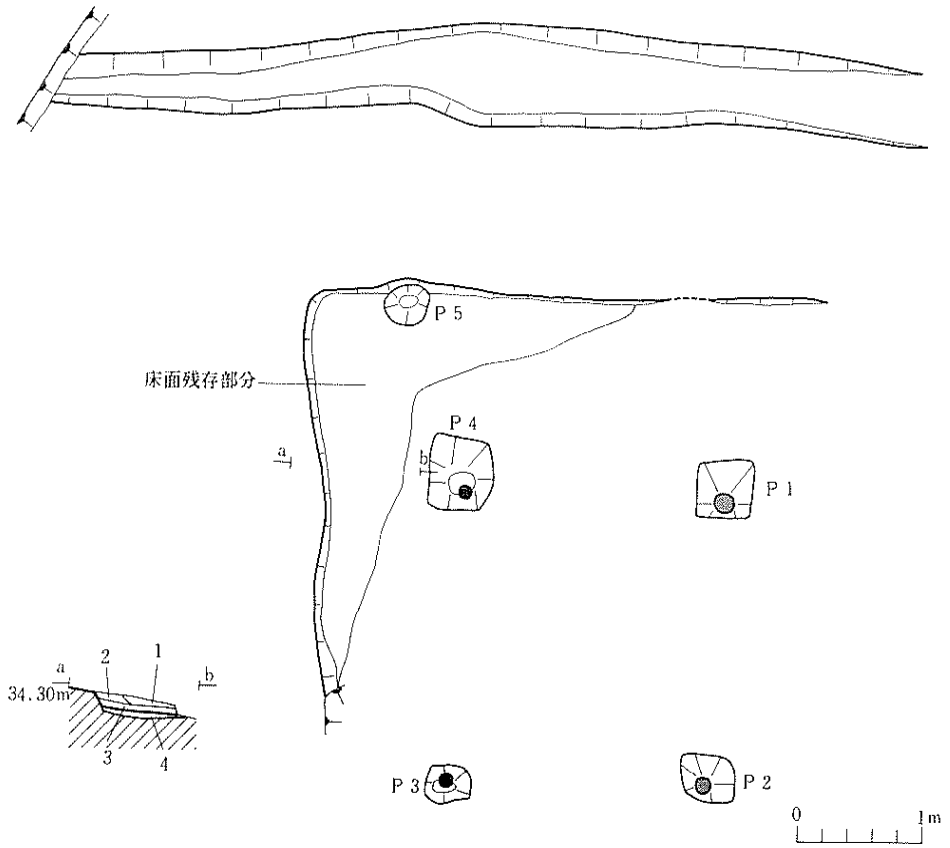
NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
8	土師器甕	／	貼床	口縁ヨコナデ体部ヘラケズリ	／	口縁ヨコナデ	19.0	／	(15)		1/8
9	土師器甕	／	C	口縁ヨコナデ体部ハケメ	／	ヨコナデ ヘラナデ	15.6	／	(18)		1/4
10	須恵台坏	－	1～2層	ロクロ調整	静止糸切→回転ヘラケ	ロクロ調整	／	3.6	(1.4)		1/8以下

NO.	器種別	層位	全長	全幅	全厚	重量	石材	図版	備考
11	砥石	確認面	6.6	－	－	77g	凝灰岩		機能面3面 擦痕の認められる面1面



NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
12	土師器坏	A 1 a	3層	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.2	－	4.4	7－8	2/3

第11図　八幡遺跡3号，4号住居跡出土遺物



NO.	土色	土性	備考
1	黒褐色(7.5Y R3/2)	砂質シルト	自然流入土 灰白色火山灰ブロック含む
2	暗褐色(7.5Y R3/3)	砂質シルト	自然流入土
3	暗褐色(7.5Y R3/3)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック含む
4	暗褐色(7.5Y R3/3)	砂質シルト	掘り方埋土 地山ブロック多く含む

NO.	深さ(cm)	土色	性格	備考
P 1	61	不明	主柱穴	地山ブロック多く含む
P 2	(35)	不明	主柱穴	上半は削平 地山ブロック多く含む
P 3	(48)	不明	主柱穴	上半は削平 地山ブロック多く含む
P 4	78	不明	主柱穴	地山ブロック多く含む
P 5	7	不明	不明	

層名	土色	土性	備考
外周溝堆積土	暗褐色(10Y R3/4)	砂質シルト	自然流入土

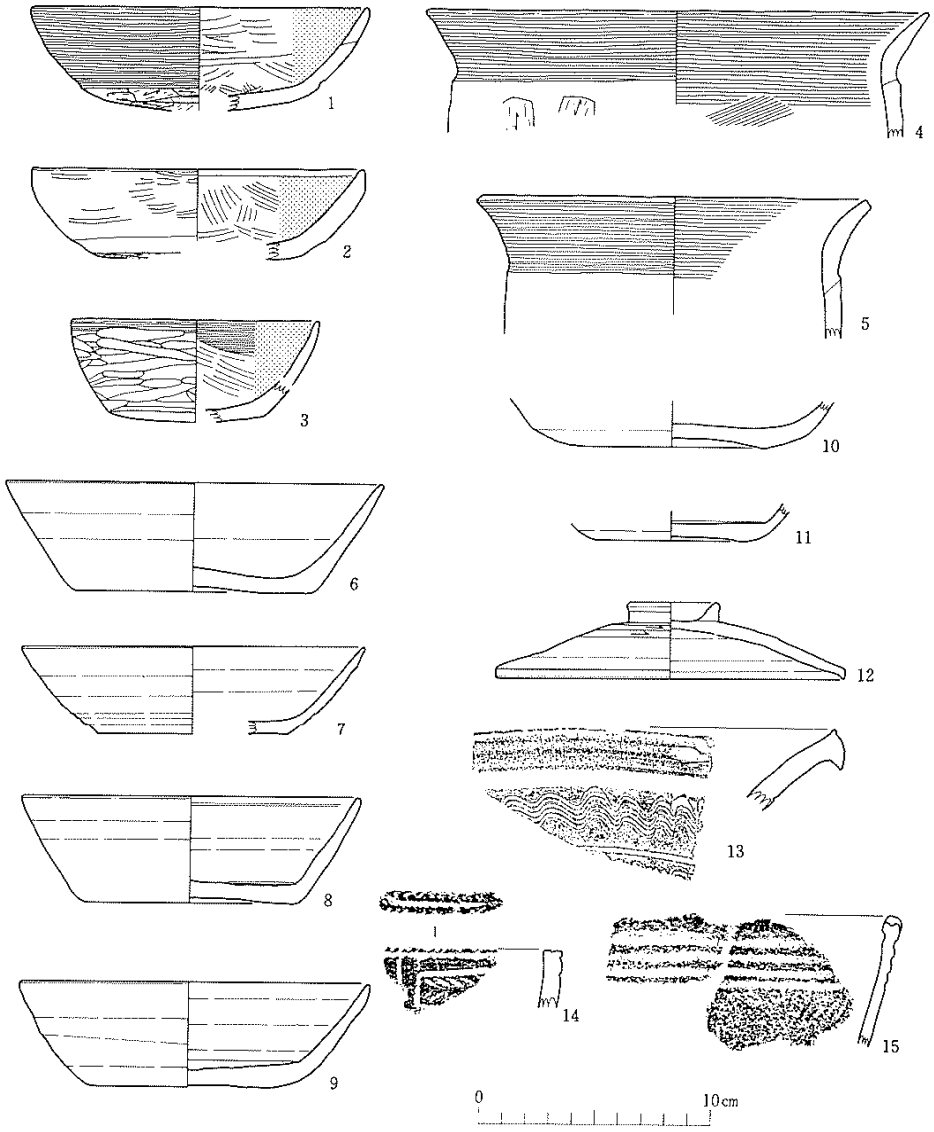
第12図　八幡遺跡４号住居跡

遺構外の遺物（第13図）

基本層位Ⅲ層を中心として遺物が出土している。土師器、須恵器が中心であり、若干の縄文土器なども出土している。

［土師器］

<坏>　１、２は丸底の坏である。１の口縁部は内湾しながら開く。外面に沈線を施しており、内面には稜や段はない。２の口縁部も内湾しながら開く。内面には稜や段は形成されない。内外面に接合痕が残る。３は小形の平底の坏である。



NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	AⅠa	AトレⅠ～Ⅲ層	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.6	－	(4.5)		1/6
2	土師器坏	AⅠb	c-16Ⅲ層	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.4	－	(4.4)		1/5
3	土師器坏	AⅢ2b	b-12Ⅲ層	ヨコナデ→ヘラミガキ	ナデ	ヨコナデ→ヘラミガキ	10.7	5.7	4.4		2/3
4	土師器甕	A	BトレⅠ～Ⅲ層	口縁ヨコナデ体部ヘラケズリ	／	口縁ヨコナデ　ナデ	21.6	／	(5.3)		1/8以下
5	土師器甕	A	AトレⅢ層	口縁ヨコナデ体部マメツ	／	口縁ヨコナデ　マメツ	17.0	／	(6.1)		1/8以下
6	須恵器坏	A	b-13Ⅲ層	ロクロ調整(目不明瞭)	静止糸切→手持ヘラケ	ロクロ調整(目不明瞭)	16.3	11.0	4.7		1/8以下
7	須恵器坏	A	c-13Ⅲ層	ロクロ調整(目一部明瞭)	手持ヘラケ	ロクロ調整(目不明瞭)	14.8	8.2	3.8		1/8以下
8	須恵器坏	A	12列Ⅲ層	ロクロ調整(目不明瞭)	静止糸切→手持ヘラケ	ロクロ調整(目不明瞭)	14.6	8.4	4.6		1/3
9	須恵器坏	A	A・BトレⅢ層	ロクロ調整(目明瞭)	静止糸切→手持ヘラケ	ロクロ調整(目明瞭)	15.1	9.1	4.5		1/2
10	須恵器坏	B1	b-11Ⅲ層	ロクロ調整	ヘラ切→回転ヘラケ	ロクロ調整	／	7.8	(2.0)		1/8以下
11	須恵器坏	B1	b-14Ⅲ層	ロクロ調整	静止糸切→回転ヘラケ	ロクロ調整	／	6.6	(1.6)		1/8以下
12	須恵器蓋	－	b-11Ⅲ層	ロクロ調整→回転ヘラケズリ	(リング状つまみ)	ロクロ調整	15.0	4.0	3.3		1/4
13	須恵器甕	－	b-11Ⅲ層	ロクロ調整 波状文	／	ロクロ調整	／	／	／		1/8以下

第13図　八幡遺跡遺構外出土遺物

<甕>　４、５とも体部以下が失われており、全体の器形は不明であるが長胴形を呈すると考えられる。いずれも口縁部は強く屈曲し外面肩部に段が形成される。

［須恵器］

<坏>　６～９は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、底部から体部にかけては強く屈曲する。７は外面の底部と体部の境界が明瞭であるが、６、８、９は不明瞭である。内面の底部と体部の境界は、６、７は緩やかで不明瞭、８は明瞭でヘラ状工具による沈線状のものが認められる。９も比較的明瞭である。10は底部のみであるが、底部から体部は大きく内湾しながら立ち上がる。外面の底部と体部の境界は回転ヘラケズリによって明瞭に作り出されている。内面の底部と体部の境界は緩やかで不明瞭である。11も底部のみの出土である。外面の底部との境界は不明瞭だが、内面の底部と体部の境界は明瞭で、ヘラ状工具による沈線状のものが見られる。

<蓋>　12はリング状のつまみを持つ。器形は低平で、口縁部にかけて直線的に開く。口縁部端部は折れ曲がる。

<甕>　13は甕の口縁部である。頸部に沈線と波状文で文様を描く。

［縄文土器］

14は深鉢の口縁部である。貝殻端部を押圧して、矩形と思われる文様を描く。口縁端部にも貝殻端部を押圧している。縄文早期と考えられる。15も深鉢である。口縁部に２個一対の突起を有し、口縁端部に沈線を施す。口縁部外面には４条の沈線を巡らし、体部はＬＲ縄文が施文されている。口縁内面にも沈線を施す。縄文晩期と考えられる。

３．大嶺八幡遺跡の調査の方法（第14図）

大嶺八幡遺跡の調査は、住宅地造成に伴うものである。

まず丘陵頂部、斜面、小支谷の一部にトレンチを設定し、遺構確認調査を行った。その結果、丘陵頂部で竪穴住居跡１軒、焼土遺構１基を検出したため、トレンチを拡張し、これを調査した。また小支谷の斜面がやや緩やかになる部分に、竪穴住居跡２軒を確認したが、保存のため位置を記録した上で埋め戻した。

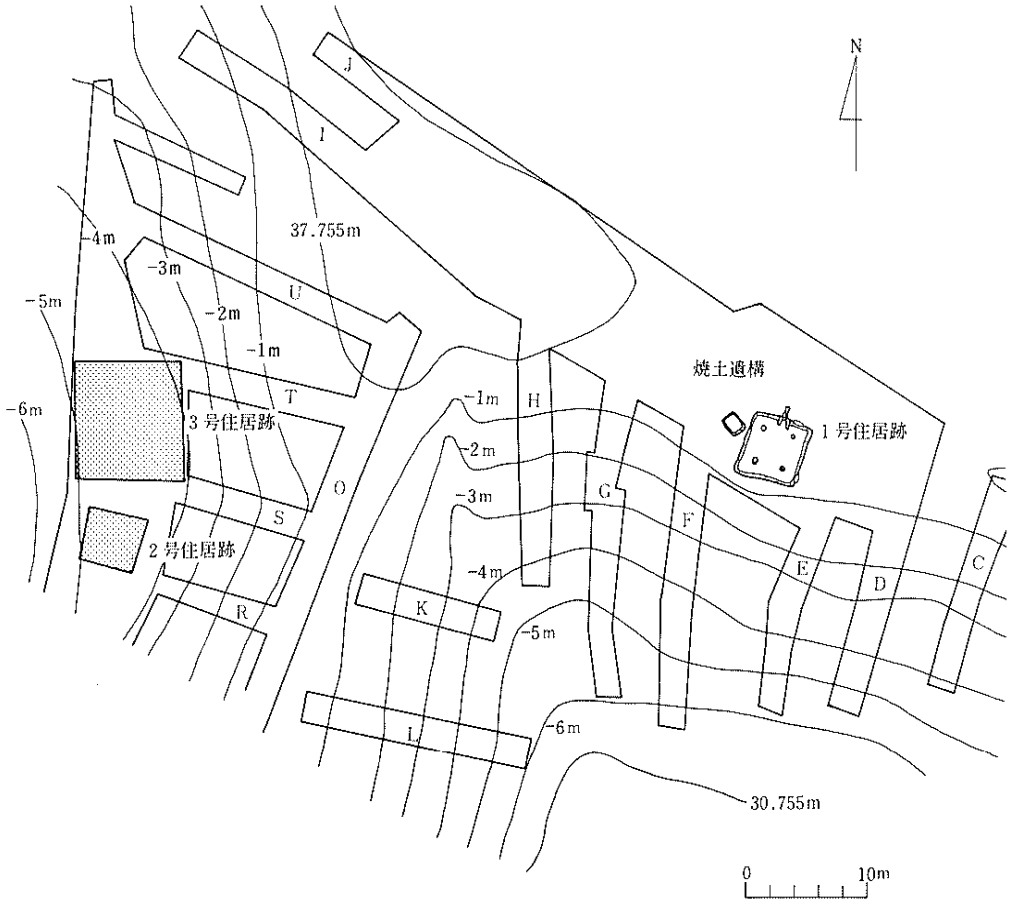
４．大嶺八幡遺跡で発見された遺構と遺物

１号住居跡（第15図）

【位置・確認面】丘陵の頂部、地山面で確認された。

【平面形・規模】平面形は方形を基調とする。規模は長軸で約5.2m、短軸で約5.0mである。

【堆積土】基本的には３枚の層に分けられる。１層は黒色土、２層は灰白色火山灰で住居跡中央に堆積し、３層は地山ブロックを含む褐色土で、壁際から床面上に堆積している。



第14図　大嶺八幡遺構配置図
（アルファベットはトレンチ名）

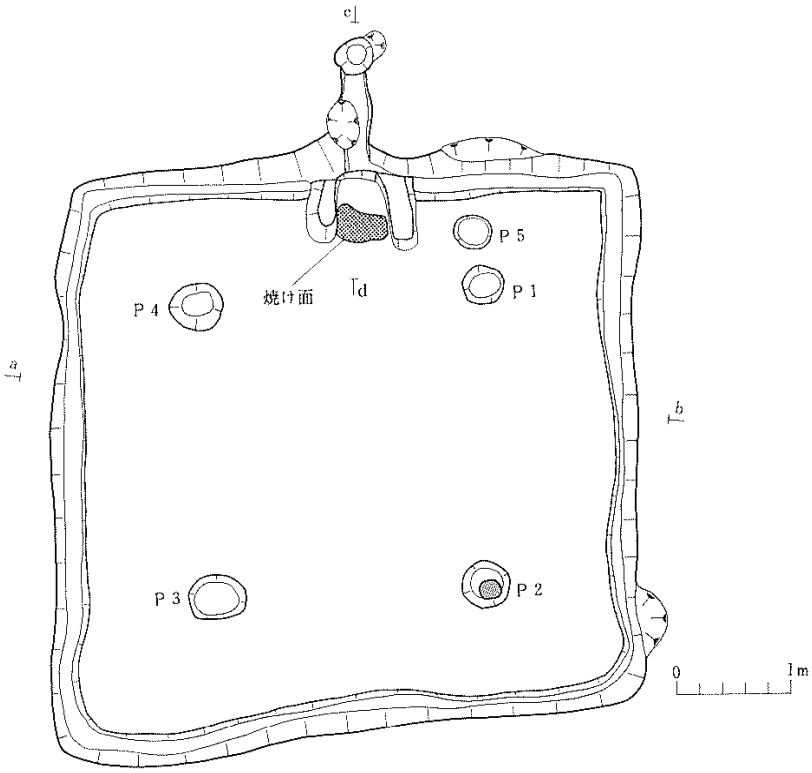
【壁】地山を壁としている。立ち上がりは急角度で、壁高は残存状況の良い北壁で約60ｃｍである。

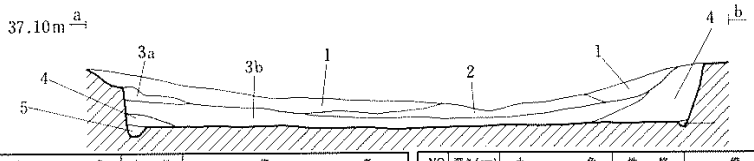
【床面】地山を床としている。平坦で全体に堅くしまっている。

【柱穴】床面から５個のピットが検出されている。このうちＰ1～Ｐ4が住居平面形の対角線上にあり、かつ形態、規模がほぼ一致することから主柱穴と考えられる。Ｐ2では、柱痕跡が検出されている。

【周溝】壁沿いに巡り全周する。幅約15ｃｍ、深さ約10ｃｍである。

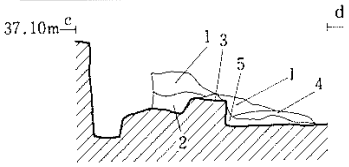
【カマド】北辺中央に付設されている。本体は両側壁が10ｃｍ～20ｃｍの高さで残存する。地山土（黄褐色粘土）を貼り付けて構築されており、内側が焼けて硬化している。底面は平坦で焼けているが側壁のように硬化していない。煙道はカマド底面より20ｃｍ高い位置から





NO.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒色(10Y R2/1)	シルト	自然流入土
2	—	—	灰白色火山灰
3a	褐色(10Y R4/4)	シルト	自然流入土
3b	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	自然流入土 焼土、炭化物若干含む
3c	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	自然流入土 地山ブロック多く含む
4	褐色(10Y R4/4)	シルト	自然流入土
5	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	周溝堆積土

NO.	深さ(cm)	土　　色	性　格	備　　考
P 1	51	不明	主柱穴	地山ブロック多く含む
P 2	39	不明	主柱穴	柱痕跡有り 地山ブロック多く含む
P 3	52	不明	主柱穴	地山ブロック多く含む
P 4	50	不明	主柱穴	地山ブロック多く含む
P 5	6	不明	住居内ピット	

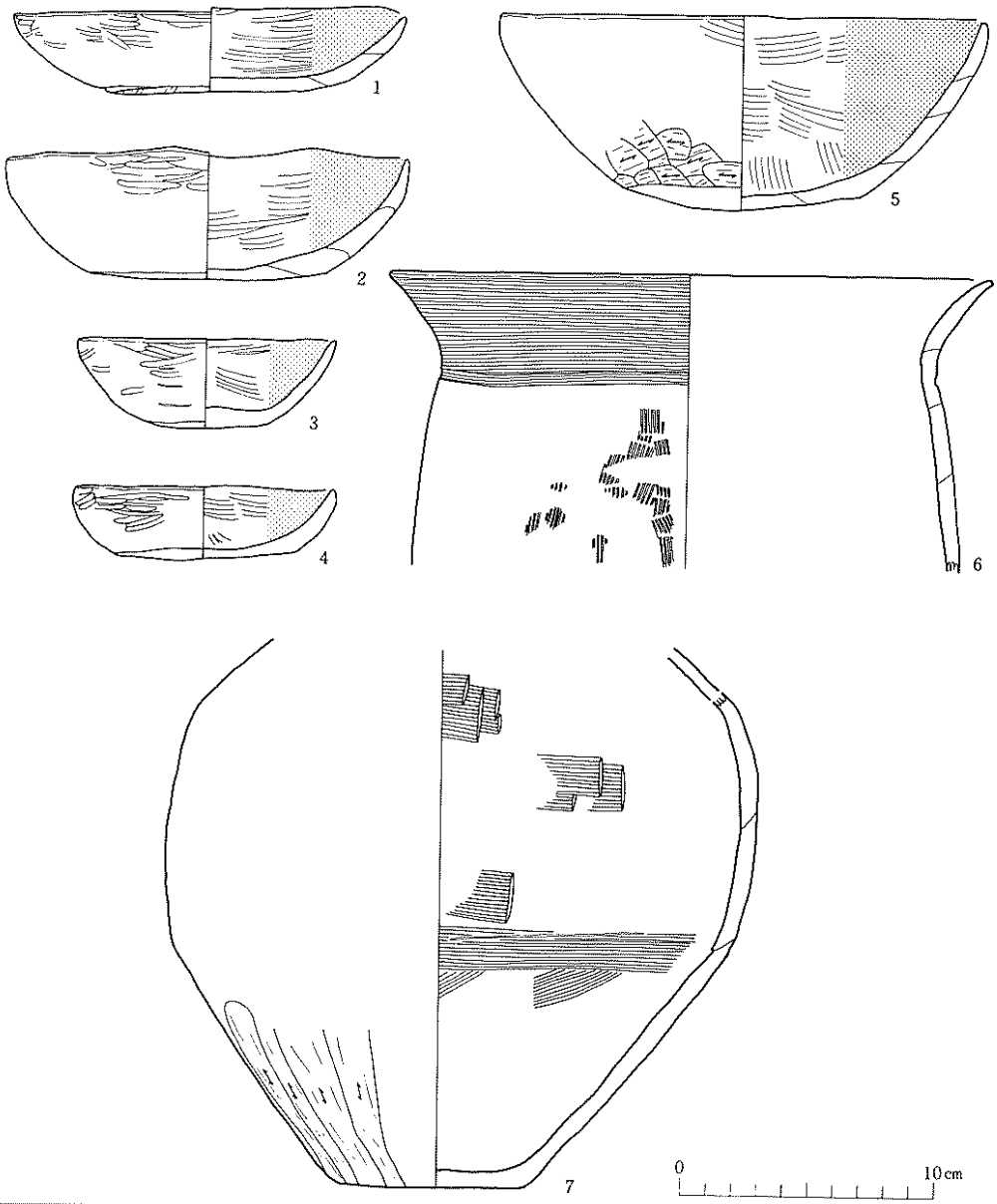


NO.	土　　色	土　性	備　　考
1	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	自然流入土
2	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	自然流入土 焼土、炭化物含む
3	褐色(10Y R4/4)	シルト	天井崩落土
4	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	カマド崩落土 地山ブロック含む
5	——	——	焼土 カマド崩落土

第15図　大嶺八幡遺跡１号住居跡

90ｃｍほどゆるやかに下方に傾斜しながら延びる。先端には煙道底面より 15ｃｍ深く煙出しピットが残存している。

【遺物】床面上より非ロクロ土師器が出土している（第16図）。



NO.	器種別	分　類	層　位	外　　面	底　　部	内　　面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	AⅡb	床	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	15.5	－	3.4	8-10	1/1
2	土師器坏	AⅢ1b	床	ヘラミガキ	ナデ マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	15.9	9.2	5.4	8-11	1/1
3	土師器坏	AⅢ2b	床	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ→黒色処理	10.1	4.8	3.7	8-14	1/1
4	土師器坏	AⅢ2b	床	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ→黒色処理	10.1	7.2	3.1	8-13	1/1
5	土師器椀	A	床	ヘラミガキ ヘラケズリ マメツ	ナデ	ヘラミガキ→黒色処理	19.2	9.3	8.0	8-12	3/4
6	土師器甕	A	床	口縁ヨコナデ体部ハケメ	／	マメツ	23.8	／	(13)		1/8以下
7	土師器甕	C	床	ヘラケズリ→ナデ？	ヘラケズリ	ヘラナデ	／	7.4	(23)	8-15	3/4

第16図　大嶺八幡遺跡１号住居跡出土遺物

［土師器］

<坏>　１～４のいずれも平底で、口縁部は内湾しながら開く器形である。１は外面の底部近くには段が形成されているが、一部は途切れており、痕跡的である。内面には稜や段は形成されない。２は外面には段や沈線は施されない。内面には稜や段はない。３、４は小形の坏である。いずれも外面には段や沈線は施されない。

<椀>　５は内湾しながら開き、底部は丸底状の平底を呈する。内面は緩やかに湾曲する。

<甕>　６は、長胴の甕であると考えられる。口縁部は緩やかに外反する。外面の肩部に沈線が施されている。７は体部の強く張る甕であると考えられる。肩部から上は失われており、全体の器形は不明である。

焼土遺構（第17図）

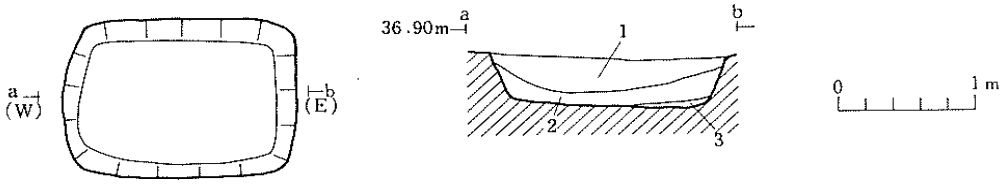
【位置・確認面】１号住居跡の西側、地山面で確認された。

【平面形･規模】長方形を呈している。長軸約1.8m、短軸約1.3mで、深さは約40ｃｍである。

【堆積土】３層に分けられる。１層は褐色土層、２層は焼土などを含む褐色土層、３層は木炭の層である。

【壁】地山を壁としている。側壁は強く焼けており、底面は弱く焼けている。

【遺物】出土していない。



NO.	土　　色	土　性	備　　考
1	褐色(10Y R4/4)	シルト	自然流入土
2	褐色(7.5Y R4/4)	シルト	自然流入土 焼土、炭化物含む
3	——	——	木炭層

第17図　大嶺八幡遺跡焼土遺構

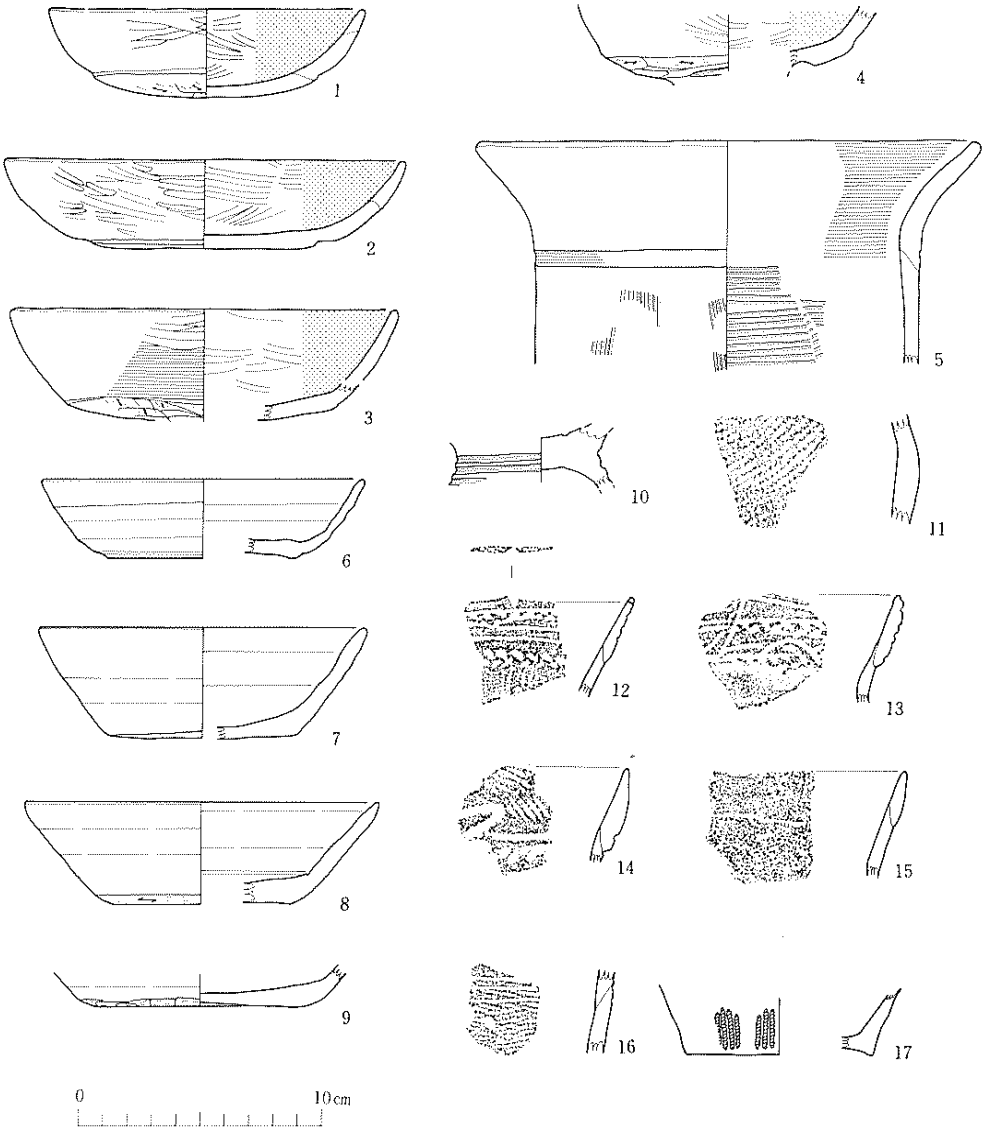
遺構外の遺物（第18図）

大嶺八幡遺跡では遺構外から土師器、須恵器のほか、若干の縄文土器、弥生土器などが出土している。

［土師器］

<坏>　１は小形で丸底を呈する。体部は内湾しながら開く。外面は段が施され、内面には稜や段は存在しない。２は平底を呈する。体部は内湾しながら開く。外面には段が施されており、内面には稜や段は形成されない。３は丸底で、体部は内湾しながら開く。外面に段が認められる。内面には稜や段は形成されない。

<高坏>　１点のみ出土している（４）。坏部の下半の一部が残存しているにすぎない。内面に稜や段は形成されない。脚部は不明である。なお坏部の脚部との境界部分に接合の際についたと見られる沈線状の凹部が認められる。



NO.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	A I b	2号住確認面	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	13.1	－	3.6		1/8以下
2	土師器坏	A II b	Uトレ表土	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	16.6	－	3.6		2/3
3	土師器坏	A I b	2号住南表土	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	16.0	－	(4.5)		1/4
4	土師高坏	－	2号住確認面	坏部上半ヘラミガキ 以下ヘラケ	——	ヘラミガキ→黒色処理	／	／	(3.0)		1/8以下
5	土師器甕	A	2号住南表土	口縁マメツ体部ハケメ	／	ヨコナデ ハケメ	20.8	／	(9.7)		1/8以下
6	須恵器坏	B2	2号住確認面	ロクロ調整(目明瞭)	ヘラ切	ロクロ調整(目明瞭)	13.3	7.9	3.2		1/8以下
7	須恵器坏	A	2号住南表土	ロクロ調整(目不明瞭)	静止糸切→手持ヘラケ	ロクロ調整(不明瞭)	13.6	7.8	4.5		1/8以下
8	須恵器坏	A	2号住南表土	ロクロ調整(目不明瞭)	回転ヘラケズリ	ロクロ調整(目明瞭)	14.6	7.2	4.2		1/8以下
9	須恵器坏	／	Q-Rトレ表土	ロクロ調整	静止糸切→手持ヘラケ	ロクロ調整	／	8.4	(1.7)		1/8以下

第18図　大嶺八幡遺跡遺構外出土遺物

<甕>　５は長胴の甕であると考えられる。口縁部は緩やかに外反し、外面の肩部には沈線が施される。

［須恵器］

<坏>　６は他の須恵器に比べて器高が低い。口縁部はほぼ直線的に開く。外面の底部との境界は部分的に段状になっている。内面の底部と体部の境界は緩やかで不明瞭である。切り離し・再調整は［ヘラ切り無調整］。７、８の体部はほぼ直線的に開き、底部から体部にかけては強く屈曲する。７の外面の底部と体部の境界は不明瞭であり、内面は緩やかで不明瞭。８は外面の底部と体部の境界は不明瞭であり、内面の境界にはヘラ状工具による沈線状のものが認められる。９は底部のみの出土である。外面の底部との境界は不明瞭、内面の境界は不明瞭ながら稜を形成する。

［縄文土器］

10は台付鉢の脚部である。平行沈線を３本施文している。鉢部の底面には円形に沈線を施す。11は壷の体部破片である。ＬＲ縄文が施文されている。いずれも縄文晩期と考えられる。

［弥生土器］

12～16は甕の口縁部で、いずれも肥厚する複合口縁様のものである。12は体部があまり屈曲せずに口縁部に向かって開く器形であると推測される。波状口縁を呈し、口縁部外面には２本の沈線の間を交互に刺突したり、肥厚部の下端を交互に刺突するなどして文様を描いている。頸部以下と口縁端部にはＲＬ縄文が施文されている。13は広口壷に近い器形であると推測される。波状口縁を呈し、12と同様の方法で不整な文様を描いている。頸部はナデ調整されている。14は器形は不明であるが、ほぼ同様の文様構成である。ＲＬ縄文が施されている。15は12と同様の器形になると推測される。口縁部と頸部以下にＲＬ縄文が施文される。16は甕若しくは壷の体部破片である。ＲＬ縄文の上から沈線を描き、赤彩を施している。17は壷若しくは甕の底部破片で、上げ底になっている。体部外面と底部外面にＲＬ縄文が施文される。これらはいずれも弥生後期、天王山式のものである。

Ⅲ　考察

今回の八幡遺跡、大嶺八幡遺跡の調査では、両遺跡合わせて竪穴住居跡が延べ７軒検出され、うち５軒を調査した。そして量的には少ないが、比較的まとまった形で土器が出土した。

この項ではまず、両遺跡から出土した土師器、須恵器全部について分類を行う。次に各住居跡での出土状況を検討して土器群を設定し、遺構の年代についても考えていきたい。

１．分類

①　土師器の分類

出土した土師器はいずれも製作に際してロクロを使用していないもので、坏、椀、甕、高坏、甑が出土している。

【坏】

図示できたのは17点である。内面をヘラミガキし黒色処理を施すものをＡ類、内面をヨコナデし黒色処理を施さないものをＢ類とする。さらに細かい器形によって細分する。なお口縁部の最終的な調整は、ヨコナデ（ａ）とヘラミガキ（ｂ）、調整不明（ｃ）がある。これも同時に表示する。

ＡⅠ類

底部は丸底で、体部から口縁部はやや内湾するものが多いが、直線的に開くものも若干存在する。外面に段または沈線が施され、対応する内面には稜や段はつかない。

口縁部の最終的な調整は、ヨコナデのもの(ＡⅠａ類)と、ヘラミガキのもの(ＡⅠｂ類)がある。

ＡⅡ類

底部は平底で、体部から口縁部はやや内湾する。外面に段または波線が施される。口縁部の調整はヨコナデのものはなく、ヘラミガキのもの（ＡⅡｂ類）のみである。

AⅢ類

底部は平底で、外面に段や沈線が施されないものである。口縁部の直径が15ｃｍ程度の、他の坏と変わらない大きさのもの（AⅢ1類）と、直径10ｃｍ程度の小形のもの（AⅢ2類）がある。口縁部の調整がヘラミガキのもの（AⅢ1ｂ類、AⅢ2ｂ類）と、調整不明のもの（AⅢ1ｃ類）がある。

Ｂ類

１点のみの出土である。体部中央で内側に屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。外面は摩滅しているため調整は不明、内面はヨコナデである。

【椀】

４点出土している。うち１点は全体の器形が不明で分類できず、３点のみ分類した。

A類

体部から口縁部にかけて内湾し、丸底となるもの。口径は20ｃm以上で大形である。口縁部はヘラミガキ、体部から底部にかけてはヘラケズリされる。１点のみ出土している。

B類

体部は直線的に開き、口縁部は内湾、底部は丸底風の平底を呈するもので、２点出土している。口縁部はヘラミガキされるものと、ヨコナデのものがある。体部以下はヘラケズリされる。

【甕】

図示できたのは16点である。口径と器高の比率、最大径の位置によって分類する。但し、全体の器形を把握できるものが少ないため分類不可能のものが少なからず存在する。

A類

口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。体部が長胴形を呈する。

B類

口径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるもの。全体に鉢形を呈する。

C類

口径より器高が大きく最大径の位置が胴部にあるもの。体部が球形を呈する。

【高坏】

１点のみ出土している。坏部下半の外面に段を持ち、内面はヘラミガキののち黒色処理している。

【甑】

１点のみ出土しているが、図示できなかった。単調に口縁部に向かって広がる無底式のもので、口縁部付近にはヨコナデ、それ以下にはハケメが施される。接合痕を明瞭に残す。

②　須恵器の分類

坏、高台付坏、甕、鉢、蓋が出土しているが、量は少ない。

【坏】

図示したのは11点であるが全体の器形が分類可能なものは10点である。器形によって大きく３つに分類できる。

A類

平底で底部の外径と内径の差が小さく、体部が急に屈曲して立ち上がるもの。底部切り離し・再調整は、［静止糸切り→手持ちヘラケズリ］、［切り離し不明→回転ヘラケズリ］、

［切り離し不明→手持ちヘラケズリ］である。

Ｂ類

平底で底部の外径よりも内径が大きく、体部が湾曲しながら立ち上がるもの。底部に再調整が施されるもの（B1類）と、再調整が施されないもの（B2類）がある。B1類の底部切り灘し・再調整は［ヘラ切り→回転ヘラケズリ］、［静止糸切り→回転ヘラケズリ］が各１点、B2類は［ヘラ切り→無調整］が１点である。

【高台付坏】

図示したのは３点のみである。１点は坏部が深く椀に近い形状をしている。底部から口縁部にかけて稜を持たずに立ち上がり、底部は［切り離し不明→回転ヘラケズリ］である。残り２点は底部のみで全体の器形は不明、底部切り離しはいずれも静止糸切りである。

【甕】

体部破片若しくは口縁部破片のみで全体の器形を把握できるものはない。

【鉢】

図示できたのは１点のみで、いわゆる鉄鉢形体である(注１)。口縁部はわずかに立ち上がり、肩部は強く張る。体部下半にはヘラケズリが施され、底部は丸底を呈する。

【蓋】

図示できたのは３点のみであるため明確な分類は行わない。１点は低平は器形で、リング状つまみをもち、口縁部は折れ曲がる。１点は天井部付近のみで、同じくリング状つまみをもつ。もう１点は、低平な器形で口縁部は折れ曲がる。

（注１）

鉄鉢形鉢は、畿内では７世紀前半に現れ、８世紀には多くの出土例が知られている。本来は仏具である鉄鉢を模して作られたものである。宮城県内では、多賀城市水入遺跡(森・平沢1982)、同市川橋遺跡(高倉他1983)、角田市峯瓦窯跡(角田市教委　1979)で出土している。水入遺跡の資料は詳細な時期は不明、市川橋遺跡の資料は９世紀、峯瓦窯跡の資料は角田市教委のご好意で実見させていただいたところ８世紀後半と考えられた。

２．出土土器の年代について

八幡、大嶺八幡遺跡から出土した土器は、前項のように分類された。次に、遺構での出土状況を通じて、その組み合わせを検討する。基本的に床面出土土器を中心とするが、住居に伴うピット等の遺構出土土器も含めて考えることとする。

住居跡に伴って出土した土器は、土師器坏、椀、甕である。しかし椀は出土点数が少ないため、編年的検討の対象外とする。また甕をA、B、C類に分類したが、これらは形態的に変遷するものではなく、セットの一部として同時存在するものであると考えられる。よっ

て土師器坏に注目して検討を行う。

各住居跡からの土師器坏の出土状況は次の表のとおりである。

	ＡＩａ	ＡＩｂ	ＡⅡｂ	AⅢ1b	AⅢ1c	AⅢ2b	B
八幡１号住居跡	2						
八幡３号住居跡	2				1		
大嶺八幡１号住居跡			1	1		2	

各類の出土状況を見ると、本遺跡出土土器は、次のように大別される。

・第１群土器＝土師器坏ＡＩａ類、AⅢ1ｃ類を含む。八幡遺跡１号、３号住居跡出土土器群。

・第２群土器＝土師器坏ＡⅡｂ、AⅢ1ｂ類、AⅢ2ｂ類を含む。大嶺八幡遺跡１号住居跡出土土器群。

次に他の類似する遺跡での例を挙げておく。

第１群土器に類似する土器群が出土した例としては、高清水町観音沢遺跡（加藤・阿部1980）がある。観音沢遺跡出土の坏の特徴としては、口縁部が内湾ぎみに外傾すること、丸底が多いこと、口縁部の調整はほとんどがヨコナデであることがあげられる。このような特徴は、本遺跡第１群土器と共通する。

そのほか比較的近似する資料としては、古川市名生館遺跡ＳＸ1045（柴原･鈴木1987）出土のものがある。また瀬峰町大境山遺跡第３群土器（阿部・赤沢1983）が、平底の坏の比率が高いことなどの違いはあるものの、近い様相を呈する。名生館遺跡と大境山遺跡の資料は、本遺跡第１群土器と近い時期のものと考えられる。

第２群土器に類似する土器群を出土した代表例としては、志波姫町糠塚遺跡第１群土器（小井川・手塚1978）がある。本遺跡第２土器群の出土点数が少ない恨みはあるが、糠塚遺跡第10号住居跡出土資料中にはよく類似する坏が見られる。本遺跡の北に近接する天狗堂遺跡第６号、第７号住居跡出土の坏も類似しており、近い時期のものと考えられる。

次に土器群の年代であるが、観音沢遺跡出土土器に対しては、８世紀前半の年代が与えられており（加藤･阿部1980、加藤1989）、本遺跡第１群土器についても同じ８世紀前半と考える。一方糠塚遺跡第１群土器は、８世紀後半の年代を与えられている（小井川・手塚1978、加藤1989）。したがって本遺跡第２群土器にも同様の年代を考えることができる。

３．遺構の年代について

以上の考察によって、八幡遺跡１号、３号住居跡については８世紀前半、大嶺八幡遺跡１号住居跡については８世紀後半と考えられる。

さらに八幡遺跡４号住居跡についてであるが、床面からの出土遺物はないが、堆積土中

から土師器ＡＩａ類が出土しており、８世紀前半と推定される。また大嶺八幡遺跡２号、３号住居跡については、位置を確認したのみで精査を行っていないため明確な年代は出せないが、２号住居跡確認面で土師器坏ＡＩｂ類などが出土しており、周辺から大きく異なる時期の遺物は出土していないことからみて、８世紀の中には収まると考えられる。

なお今回の調査区は、従来新田柵に擬定されてきた地域に隣接しており(興野1961)、また第３章で述べるように、近接する丘陵上には古代の築地跡が存在している。今回調査された竪穴住居跡が、文献上の新田柵、あるいは周辺に存在する築地などの遺構と関連するものであるかどうかは未詳であるが、今後検討が必要であると考えられる。

４．八幡遺跡の住居内堆積土及び遺構外の土器について

八幡遺跡では住居跡の堆積土や、基本層位Ⅲ層から土師器や須恵器が出土している。資料的な制約が大きいが、これについても不十分ながら考察を加えておく。

まず土師器坏について考える。小破片での出土が多く、全体の器形を把握できるものはＡＩａ類、ＡＩｂ類、AⅢ2ｂ類、Ｂ類各１点ずつの４点のみの出土である。ＡＩａ類は本遺跡第１群土器に属するが、ＡＩｂ類、Ｂ類は住居跡床面からは出土しておらず、AⅢ2ｂ類は第２群土器に属している。ＡＩｂ類は丸底の器形からみて、８世紀前半に位置づけられると考えられる（小井川他1982）が、AⅢ2ｂ類、Ｂ類については、年代は不明である（注２）。

次に須恵器の坏についてみてみる。分類可能をものは、A類が４点、B1類が２点のみである。底部の切り離し･再調整技法は、A類は［静止糸切り→手持ちヘラケズリ］が３点、［切り離し不明→手持ちヘラケズリ］が１点である。一方B1類は［ヘラ切り→回転ヘラケズリ］が１点、［静止糸切り→回転ヘラケズリ］が１点である。

このような坏の類例は、日の出山窯跡群A地点(岡田他1970)、また本遺跡の東方２ｋｍにある木戸瓦窯跡（野崎1974、辻 1984）など、８世紀前半の窯跡出土資料の中に見られる。特にA類の中には、切り離し･再調整技法が［静止糸切り→手持ちヘラケズリ］であったり、内面の底部と体部の境界にヘラ状工具による沈線状のものが見られたりと、日の出山窯跡群A地点の資料と共通する特徴が見られるものもある。しかし一方で、外面の体部と底部との境界は不明瞭なものが多い。この特徴は、木戸瓦窯跡や日の出山瓦窯跡群A地点の資料とは異なっており、むしろ８世紀中葉に位置付けられている硯沢遺跡出土資料に共通する様相であると考えられる。

したがってこれらの須恵器坏については、８世紀前半でも中葉に近い時期のものであると推定される。

次に須恵器蓋について考える。図示した３点のうち、全体の器形のわかる遺構外出土の

ものについて見てみると、リング状つまみをもち、器高は低平であり、直線的に開いて、折れ曲がった口縁部に至る。そのほかの２点もほぼ同様の器形であると考えられる。このような特徴をもつ蓋は、木戸瓦窯跡など８世紀前半の窯跡出土資料の中に多く見られる。したがって本遺跡出土の蓋は８世紀前半の年代が与えられると考えられる。

このように、須恵器についてはほぼ８世紀前半（中葉に近い）と考えられる。

以上述べてきたとおり、八幡遺跡の住居跡堆積土、包含層出土の土師器、須恵器については、年代の判明するものについては、住居跡と同じ８世紀前半の中におよそ収まると考えられる。また八幡遺跡では、８世紀前半以外の年代とされる資料はほとんど得られていないことからみて、年代が不明であるものについても、８世紀前半のものである可能性がある。

（注２）

AⅢ2ｂ類については、類似する土器が、色麻古墳群第 263 号墳で８世紀前半の土器と共伴している例がある（古川 1983）。

第３章　田尻町八幡地区、大嶺地区の遺構分布調査

Ⅰ　調査に至る経過

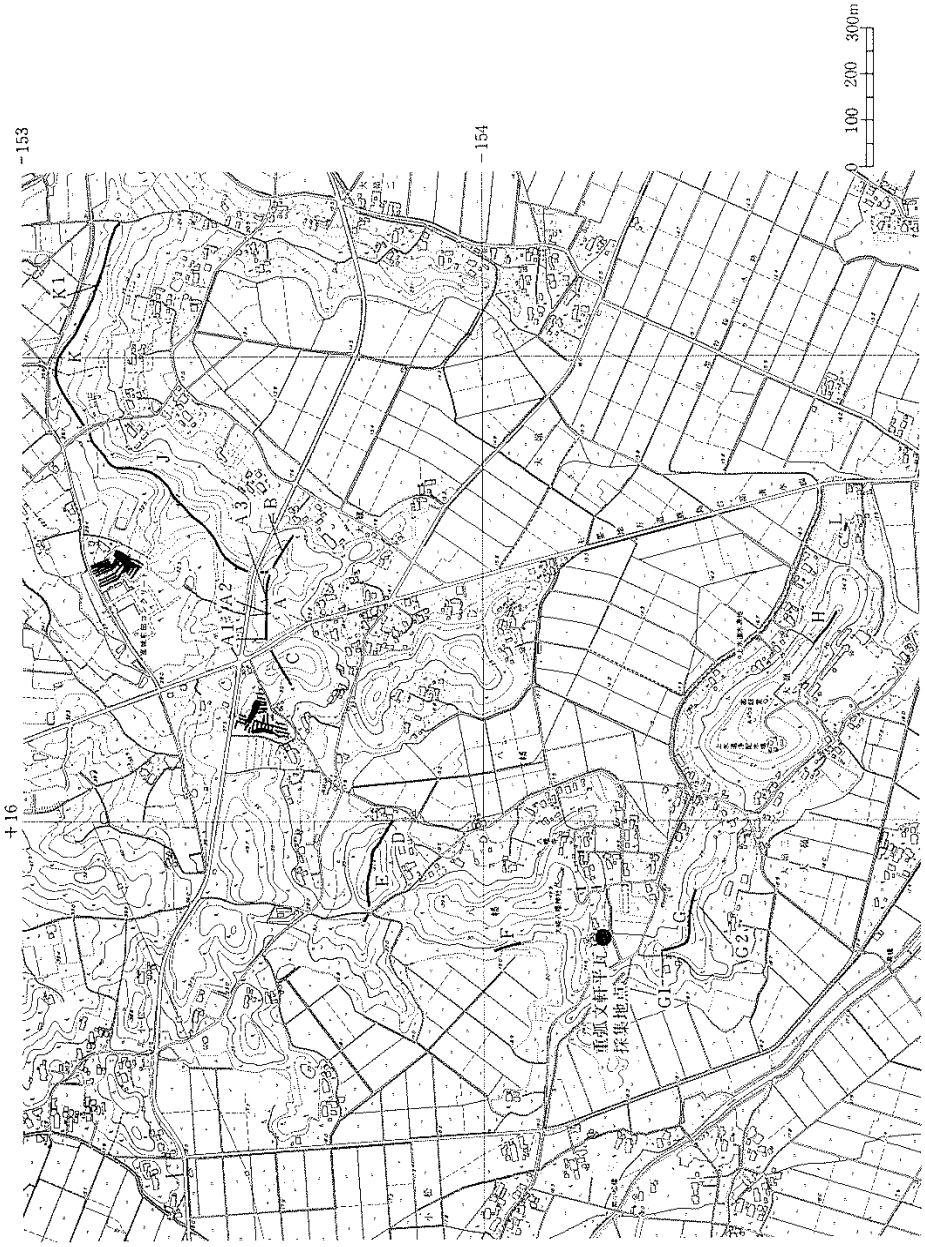
今回発掘調査した田尻町北西部の八幡地区、大嶺地区、木戸地区などは、『続日本紀』天平９（737）年条に記載されている新田柵の擬定地であると以前から考えられていた。

古くは大正年間の末、『宮城県史蹟名勝天然記念物』第二輯の中で、栗原茂治氏が新田柵の擬定地についていくつか候補を挙げて検討している。その中で木戸地区に残る『堤防及塹壕』について新田柵跡の可能性を述べている。しかしこの『堤防及塹壕』が現在残る土手状の高まりを指すのかどうかは不明である。

昭和30年代に入って、興野義一氏や今川美枝子氏などの調査により、この地域から奈良時代前半や平安時代の瓦が発見された。詳細は後述するが、興野氏はこの地域が新田郡に含まれると考えられることから、田尻町北西部の八幡地区、大嶺地区、小松地区周辺の丘陵を新田柵に当てて考えた(興野1961)。一方加藤孝氏、高橋富雄氏は周辺地域の踏査を行い、木戸地区の北方の小河川沿いの低地に堀跡が存在すると報告し、これを新田柵の北方を防衛する外塁線と考えた(高橋1962、1963)。その後、平野一郎氏や藤原二郎氏などにより踏査が行われ、八幡、大嶺地区の丘陵上に土手状の高まりが分布していることが判明した。

昨年度八幡地区の造成地内で、土手状の高まりの北側に、堆積土中に灰白色火山灰を含む溝が削平地断面に露出していることが、佐藤信行氏によって通報された。文化財保護課では遺構の性格、年代の把握のため、平成元年９月28日～29日、周辺の踏査と溝の断面図作成を行った。その結果、高さ約２ｍの土手状の高まりが東西約300ｍにわたって残存しており、その北側に堆積土中に灰白色火山灰を含む溝が存在することを確認し、この土手状の高まりと溝が古代のものであることが確認された(第20図)。また大崎八幡神社の社殿南側にトレンチを設定し確認調査を実施したが、遺構、遺物は発見されなかった。

今年度、八幡、大嶺八幡遺跡の発掘調査を行ったが、検出された竪穴住居跡はこの土手状の高まりと溝からわずか100～300ｍ余りしか離れておらず、これに関連するものであることも予想された。そのため土手状の高まりなどの位置と現況を確認する必要が生じた。そこで多賀城跡研究所の協力を得て、現地の遺構の様子に詳しい平野一郎氏と藤原二郎氏に案内をお願いし、平成２年12月25～26日に残存する遺構の位置と現況を記録する作業を行った(第19図)。続いて平成３年１月17～18日に状態の良い個所を選んで断面図を作成した(第20図)。なお今回報告する各遺構は平野、藤原両氏の知見によるものである。



第19図　分布調査遺構配置図

Ⅱ　調査の成果

八幡地区から大嶺地区にかけては丘陵の開析が進んでおり、標高40mほどの細い丘陵尾根と標高15mほどの低地が複雑に入り組んでいる。この丘陵尾根上を中心に、断続的に土手状の高まりなどの遺構が認められた（第19図）。

１．Ａ遺構

丘陵尾根上の針葉樹林中に、東西方向に走る高さ約２ｍの土手状の高まりが残存しているのが地表面観察で認められた。その長さは約150mである。断面観察の結果、これは築地と溝であることが判明した。

・Ａ1地点

平成元年度の調査の際、溝の断面図（第20図）を作成した地点である。造成地の西端にあたる。

・Ａ2地点

今年度の調査で、築地と溝の断面図（第20図）を作成した地点である。高清水方面へ抜ける幅数メートルの旧道によって遺構が切られている。

・Ａ3地点

針葉樹林中に築地が残存している。保存状況が良く犬走り状の段も認められる。東端は不明瞭である。

以下、Ａ2地点における築地と溝についての断面観察の結果を述べる。

（１）築地とその関連施設（第20図）

【築地】

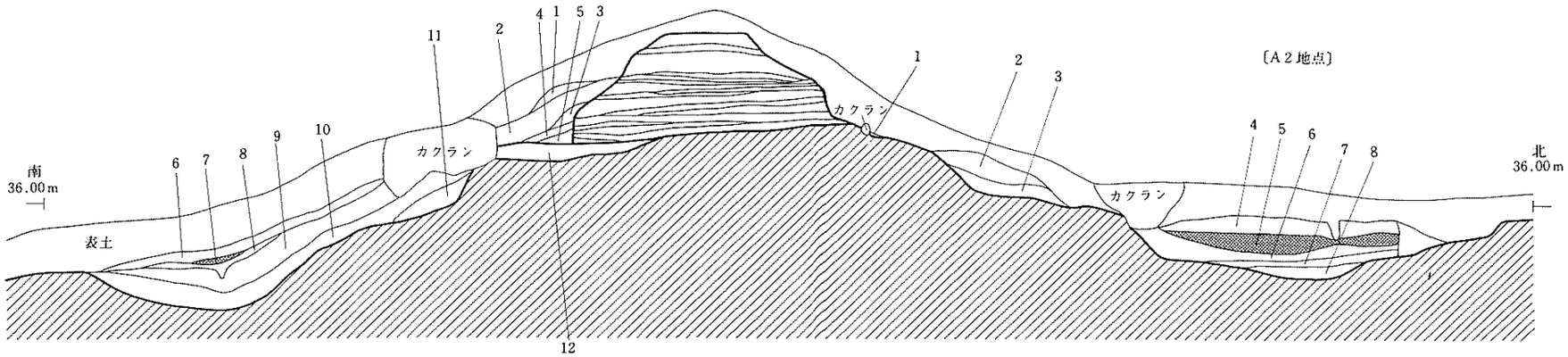
①　基礎整地

築地本体を構築する前に、北側の旧表土を削り、南側へ傾斜する旧表土上に褐色土を積んで平坦面を造り、基礎整地としている(南側12層)。これによって形成された犬走り状の段は、南側で約0.8mの幅をもつと推定される。築地北側は犬走り状の段は旧表土、地山を削り出して造られており、幅は約0.7mである。

②　築地本体

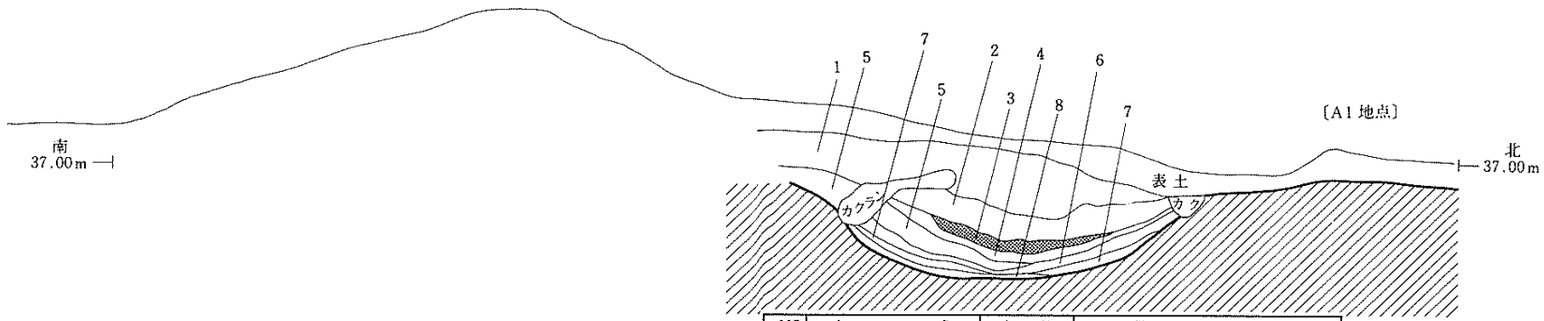
築地本体の残存高は、約１ｍであり、残存基底幅は約2.8mである。南壁は高さ0.3mまで残っているが、北壁は削られているため、築地本体の本来の基底幅は不明である。北側堆積土１層の位置からみて、本来の基底幅は最大で2.9mほどと推定され、北側の犬走り状の段の幅は現状よりも若干狭かったものと思われる。

築地本体の積み土は、黄褐色土（10ＹR5/6、地山の土）と暗褐色土（10ＹR3/4、旧表土）の互層で､版築によって構築されている。下半部は一つの層の厚さが３～５ｃｍの薄い層が



NO.	土　　色	土　性	備　　考
南１	明黄褐色(10Ｙ R6/8)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
南２	黄褐色(10Ｙ R5/8)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
南３	にぶい黄褐色(10Ｙ R5/4)	シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
南４	明黄褐色(10Ｙ R6/8)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
南５	明黄褐色(10Ｙ R6/8)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)　褐色土ブロック含む
南６	黒褐色(10Ｙ R2/3)	シルト	自然流入土
南７	にぶい黄橙色(10Ｙ R6/4)	——	灰白色火山灰
南８	暗褐色(10Ｙ R3/4)	粘土質シルト	自然流入土　炭化物若干含む
南９	黄褐色(10Ｙ R5/6)	粘土質シルト	自然流入土
南10	褐色(10Ｙ R4/6)	粘土質シルト	自然流入土
南11	黄橙色(10Ｙ R7/6)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
南12	褐色(10Ｙ R4/4)	シルト	基礎整地層

NO.	土　　色	土　性	備　　考
北１	暗褐色(10Ｙ R3/3)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
北２	にぶい黄褐色(10Ｙ R5/4)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
北３	暗褐色(10Ｙ R3/3)	粘土質シルト	自然流入土(築地本体崩壊土)
北４	黒色(10Ｙ R2/1)シルト	自然流入土	
北５	にぶい黄橙色(10Ｙ R4/6)	——	灰白色火山灰
北６	暗褐色(10Ｙ R4/3)	粘土質シルト	自然流入土　炭化物若干含む
北７	褐色(10Ｙ R4/4)	粘土質シルト	自然流入土
北８	褐色(10Ｙ R4/4)	粘土質シルト	自然流入土　地山ブロック含む



NO.	土　　色	土　性	備　　考
1	褐色(10Ｙ R4/6)	粘土質シルト	
2	黒色(10Ｙ R1.7/1)	粘土質シルト	旧表土
3	灰白色(5Ｙ 7/2)	——	灰白色火山灰
4	暗褐色 (7.5Ｙ R3/3)	粘土質シルト	自然流入土
5	にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4)	粘土質シルト	自然流入土
6	褐色(10Ｙ R4/4)	シルト	自然流入土
7	褐色(10Ｙ R4/6)	シルト	自然流入土
8	褐色(10Ｙ R4/4)	シルト	自然流入土

0　　1 m

第20図　A１・A２地点築地・溝断面図

多く、中半に厚さ約15ｃｍの層があり、その上は一つの層の厚さが６～10ｃｍとやや厚い。全体に非常に丁寧に突き固めてある。

【築地に関連する施設】

○　溝

築地本体の南側と北側に溝が存在する。

南側の溝は犬走り状の段の下端から約1.4m離れて掘り込まれている。幅は約2.3m、断面形はゆるやかな『U』字状を呈している。深さは溝の南側の肩から約0.4mである。

北側の溝は犬走り状の段の下端から約 1.5m離れて掘り込まれている。溝の北側の立ち上がりが削平により失われているため本来の規模を知ることはできないが、残存部で幅約3.2mである。断面形はゆるやかな『U』字状を呈している。溝の南側の肩からの深さは、約0.8mである。

北側の溝については昨年度、今回の調査地点の約50m西側の地点で調査を行っている(第20図)。それによると残存部幅は約３ｍで、断面形は緩やかな浅い『U』字状を呈している。

（２）築地両側の堆積土

南側で11層、北側で８層の堆積土が確認された（第20図）。

南側の２～５層は、築地本体に接して堆積している。全般に黄褐色土（築地本体の積み土）が主体となっており、築地本体の崩壊土であると考えられる。南側の６～10層は溝の中に堆積する。８層は灰白色火山灰層である。11層は犬走り状の段の下端にみられる。

一部撹乱を受けているため１～５層と、６～11層との先後関係は不明である。

北側の１層は、犬走りの段の上に堆積しており、築地本体の崩壊土であると考えられる。２・３層は犬走り状の段の下端にみられる。北側の４～８層は北側の溝の中に堆積する。５層は灰白色火山灰の層で、層の下端にプライマリーな火山灰の堆積が見られる。

北側も一部撹乱を受けているため１～３層と、溝中の４～８層との先後関係は不明である。

（３）出土遺物

南側の堆積土10層（溝堆積土）中から、土師器が１点出土している。小破片のため図示できないが、非ロクロ成形の坏の底部付近である。外面の調整は不明、内画はヘラミガキの後黒色処理されている。

２．Ｂ遺構

東方へ低くなる小尾根上に高さ約１ｍの土手状の高まりが残存する。西端でＡ遺構と接続する可能性があるが、不明瞭である。東側の低地へ延びるが、途中で不明瞭となる。

３．Ｃ遺構

小さな谷の南側の針葉樹林中に、高さ１～２ｍの土手状の高まりとその北側、南側に溝状の落ち込みが認められる。西方の低地へ延びているが、途中で不明瞭となる。Ａ遺構に連続する。

４．Ｄ遺構

丘陵頂部にある『お伊勢様』の祠付近から南東方向に低くなる尾根上（針葉樹林中）に、土手状の高まりが残存し、その北側に溝状の落ち込みが沿って続く。土手状の高まりの高さは尾根上方で約１ｍ、下方へいくほど残りが良く、丘陵裾付近では約２ｍである。

５．Ｅ遺構

丘陵の北斜面頂部付近（針葉樹林中）に、高さ約２ｍの段状の落ちが東西方向に連続して存在する。Ｄ遺構の土手状の高まりと連続する。西端の谷の斜面から、瓦が採集されている。

６．Ｆ遺構

丘陵の裾部、低地との境界（針葉樹林中）に、高さ２～３ｍの土手状の高まりと、その東側に沿って溝が存在する。残存する長さはおよそ20mである。さらに南には、土手状の高まりに接続する形で、若干の土手状の高まりが数十メートルにわたって認められる。なおこの丘陵の西側低地の畑には、土師器、須恵器が散布している。

７．Ｇ遺構

丘陵の尾根上（針葉樹林中）に、土手状の高まりが残存する。長さは約150～200mで、『L』字状に屈曲して延びている。西半分の高さは約１ｍ、東半分は高さは約0.5mである。

・G1地点

墓地脇の切り通しの断面で、厚さ数十センチメートルの整地層（地山ブロックを多く含む、しまりあり）を確認した。地山を削り出し、表土を除いてから土を積んでいる。築地の基礎整地の可能性がある。非ロクロ成形の土師器甕の破片を表面採集した。

・G2地点

土手状の高まりの下方、丘陵の南斜面の針葉樹林中から瓦を表面採集した。

８．Ｈ遺構

丘陵の尾根上に土手状の高まりが存在する。高さは南側の法面が約２ｍ、北側が約１ｍで南側が高い。長さは約80mである。

Ｈ遺構の西方、薬師堂のある丘陵頂部には中世の城館跡（大嶺山館跡）があり、平場や土塁、空堀が残っている。またＨ遺構の東側に隣接する丘陵上にも、平場が幾つか見られる。このためＨ遺構も、城館跡関連の遺構である可能性もある。しかしこの部分の丘陵尾

根上には平場はなく、他の地点での遺構の在り方と共通することからみて、他の遺構と一連のものであると考えられる。

９．Ｉ遺構

丘陵端部の尾根上に、高さ約１ｍの土手状の高まりが約20mにわたって存在する。

10．Ｊ遺構

丘陵の尾根上（針葉樹林中）に、約500mにわたって土手状の高まりが存在する。北半部の残りは良好で、高さは約1.5mである。南半部の残りは悪く、高さは１ｍ以下である。残りの悪い部分では、高まりは２～３条認められる。なお南端でＡ地点の築地と連続する可能性があるが不明瞭である。

11．Ｋ遺構

丘陵の尾根上（針葉、広葉樹林中）に、高さ1.5m～２ｍの土手状の高まりが存在する。Ｊ地点の土手状の高まりと連続する。東方に約500m延び、東端で南にやや湾曲して途切れている。その先は未調査である。なお「新田柵外塁線」の標柱が立てられている。

・Ｋ1地点

土手状の高まりが小道によって切られて断面が現れている。頂部近くのみの観察であるが、黄褐色土（地山ブロック主体）層と褐色土（旧表土の土）層が数枚、厚さ５ｃｍほどで交互に積み上げられ、その上に厚さ約15ｃｍの黄褐色土が積まれている。しまりは強く、層の方向は水平である。よって、Ｋ遺構は版築による築地である可能性が高い。

Ⅲ　遺構の性格について

以上述べてきたように、八幡地区、大嶺地区の丘陵上には土手状の高まりや、溝状の落ち込みなどの遺構が残存している。この項では、これらの遺構の性格について考察してみたい。

Ａ2地点の調査によって、Ａ遺構についてはこれが築地とそれに伴う溝であることが明らかになった。またＧ1地点では、基礎整地の可能性がある整地層が観察されている。さらにＫ1地点の断面観察によって、Ｋ遺構も築地である可能性が高いといえる。最終的な結論は発掘調査の成果を待たなくてはならないが、現時点においてはＡ遺構以外の遺構も築地とそれに伴う溝であることが推定される。

またこれらの遺構は、丘陵の尾根上に、尾根の方向に沿って存在するという点で共通することが注目される。また遺構全体の分布状況を見ると、Ａ遺構～Ｋ遺構は大崎八幡神社の東方の低地を半弧を描いて囲むように存在している。

このようなことからみてＡ遺構～Ｋ遺構は一連のもので、ある地域を囲い込む区画施設であり、その構造は築地とそれに伴う溝であると推定される。

次に築地とそれに伴う溝の年代について考える。A2地点の断面観察では、築地本体の南北両側の溝の堆積土上位に、10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰が堆積しているのが確認された。したがってこの築地と溝は、10世紀前半以前に造られたものであり、10世紀前半には廃絶していたと考えられる。なお南側堆積土10層から、内黒の非ロクロ土師器坏の破片が出土している。

次にその性格について考える。ここで注目されるのは、築地とそれに伴う溝が囲い込む範囲が東西が1.5ｋｍ以上、南北が1.7ｋｍにも及び、大規模である点である。規模から見て外郭施設であると考えられるが、10世紀前半以前の年代で、外郭施設が築地である可能性があるものとしては、城柵などの官衙と寺院が考えられる。しかしこの規模からみて寺院とは考えられない。したがって、この区画施設は城柵などの官衙の外郭施設である可能性が高いと思われる。

以上のように今回の分布調査では、八幡地区並びに大嶺地区に、10世紀前半以前の城柵などの官衙の外郭施設と考えられる遺構が分布していることが確認された。

ところで先述したとおり興野義一氏は、八幡地区、大嶺地区周辺を新田柵に擬定している（興野1961）。ここでその論を再整理し、今回確認された遺構との関連を検討する。

興野氏と今川美枝子氏は大崎八幡神社の南西側斜面から、木戸瓦窯跡の製品の多賀城Ⅰ期の重弧文軒平瓦と、平安時代のものと考えられる軒丸瓦を採集した。また興野氏は北小松地区内で重弁蓮華文軒丸瓦を、天狗堂山でも平瓦の破片を採集した。興野氏はこれらの瓦を城柵（あるいは城柵に付属する寺院）の建造物に使われたものと考え、「小松寺跡、天狗堂山、大崎八幡神社、大嶺山」の丘陵一帯に城柵の存在を想定した。

一方、『日本往生極楽記』（注３）にある「陸奥国新田郡小松寺」を現在の小松地区内に考える吉田東伍氏の説を引用し、古代において小松地区が新田郡内であった公算が極めて強いとした。また『延喜式』に「新田郡一座　子松神社」とあるのを大崎八幡神社の前身と考える、吉田東伍氏の説も引用している。

以上のようなことから、興野氏は「小松寺跡、天狗堂山、大崎八幡神社、大嶺山」にまたがって想定した古代城柵を新田柵であると考えた。

興野氏らが重弧文軒平瓦を採集した地点は、今回確認された区画施設西辺のＧ遺構の延長線上またはその内側にあたる（大崎八幡神社の西南西150mにある住宅の南側であるという(第19図)。今川氏のご教示による）。興野氏らが採集した重弧文軒平瓦が今回確認された区画施設、もしくはそれに囲まれた城柵などの官衙の施設に伴うものであると考えると、この城柵官衙の年代が多賀城Ⅰ期の年代である８世紀前半まで溯る可能性も考えられる。

以上述べてきたように、今回の調査では田尻町八幡地区、大嶺地区内に、10世紀前半以前の築地と考えられる区画施設を確認した。これは城柵などの官衙の外郭施設である可能性が高い。従来新田柵に擬定されてきた地域に当たるため新田柵の外郭施設である可能性もあるが、年代が８世紀前半まで溯り得るかどうかについては、確実に伴う遺物が明確でないためなお検討の余地がある。遺跡保存の対策を早期に取るためにも、遺跡範囲の把握、年代、性格の確定を目的とした体系的な調査が必要と考えられる。

（注３）

『日本往生極楽記』は慶滋保胤の著作で、10世紀後半の成立である。

（「日本思想大系」７　井上光貞、大曽根章介校注　1974　岩波書店）

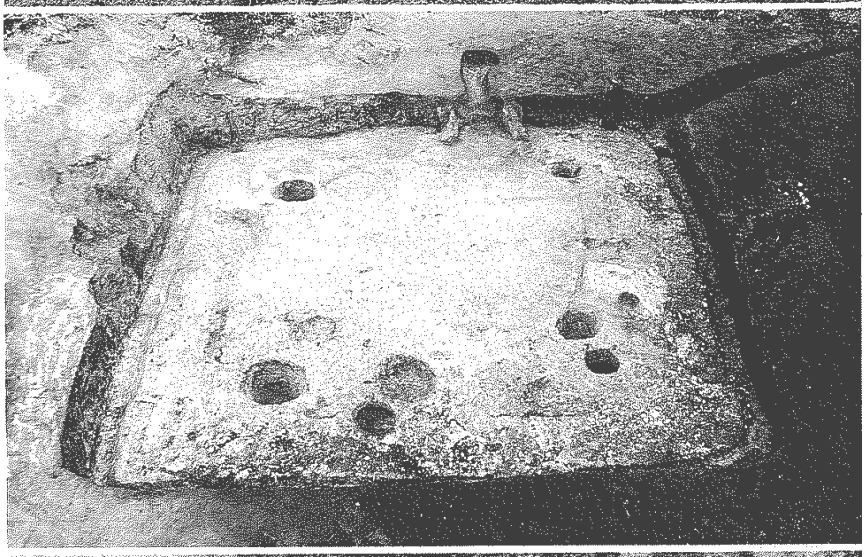
＜引用・参考文献＞

阿部正光・赤沢靖章（1983）：「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第４集
伊東信雄（1970）：『多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡－』
氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
岡田・工藤・桑原・佐々木茂・進藤秋輝（1970）：「日の出山窯跡群」宮城県文化財調査報告書第22集
岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『多賀城跡調査研究所研究紀要』１
角田市教育委員会（1979）：『角田市の文化財　遺跡・遺物』第９集
加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集
加藤　　（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
興野義一（1961）：「宮城県遠田郡田尻町出土古瓦の問題点」『歴史考古』６
工藤雅樹（1989）：『城柵と蝦夷』考古学ライブラリー51
栗田茂治　　：「再び新田柵に就いて」『宮城県史蹟・名勝・天然記念物』第２輯
小井川和夫・高橋守克（1977）：「宮城県対馬遺跡の土器」『宮城史学』５
小井川・手塚均（1978）：「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集
小井川・小川淳一（1982）：「御駒堂遺跡」宮城県文化財調査報告書第83集
斎藤吉弘・高橋・真山悟（1980）：「宮沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第69集
斎藤・後藤彰信（1985）：「古川市宮沢遺跡－化女沼ダム建設関係Ⅰ」宮城県文化財調査報告書第105集
佐々木和博・古川・大槻仁一（1985）：「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第103集
佐藤宏一・手塚（1978）：「天狗堂遺跡」田尻町文化財調査報告書第１集
柴原一雄・鈴木勝彦（1987）：「名生館遺跡Ⅶ」古川市文化財調査報告書第６集
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『多賀城跡調査研究所研究紀要』７
白鳥・後藤秀一（1985）：「名生館遺跡Ⅴ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第10冊
高倉敏明・滝口卓・石本敬（1983）：「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第４集
高橋誠明（1990）：「権現山遺跡」『平成２年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨』
高橋富雄（1962）：「古代辺境村落試論」『東北大学教養部文科紀要』10
（1963）：『蝦夷』
田尻町史編纂委員会（1982）：『田尻町史』上巻
辻　秀人（1984）：「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究１』
仲田茂司（1989）：「陸奥国における奈良時代土師器の地域性について」『歴史』第72輯
丹羽茂・阿部・小野寺祥一郎（1981）：「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集
野崎　準（1974）：「東北地方における須恵器生産」『東北文化研究所紀要』６
平川　南（1978）：「古代東北城柵の特質について」『東北歴史資料館研究紀要』４
（1979）：「古代東北城柵再論」『東北歴史資料館研究紀要』５
（1980）：「宮沢遺跡に関する文献上の検討」宮城県文化財調査報告書第69集
（1982）：「律令制下の多賀城」『多賀城跡　政庁跡本文編』
古川一明（1983）：「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第95集
（1984）：「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第100集
藤沼邦彦・加藤・真山悟・佐藤則之（1987）：「硯沢窯跡」宮城県文化財調査報告書第116集
森貢喜・平沢英二郎（1982）：「水入遺跡」宮城県文化財調査報告書第84集

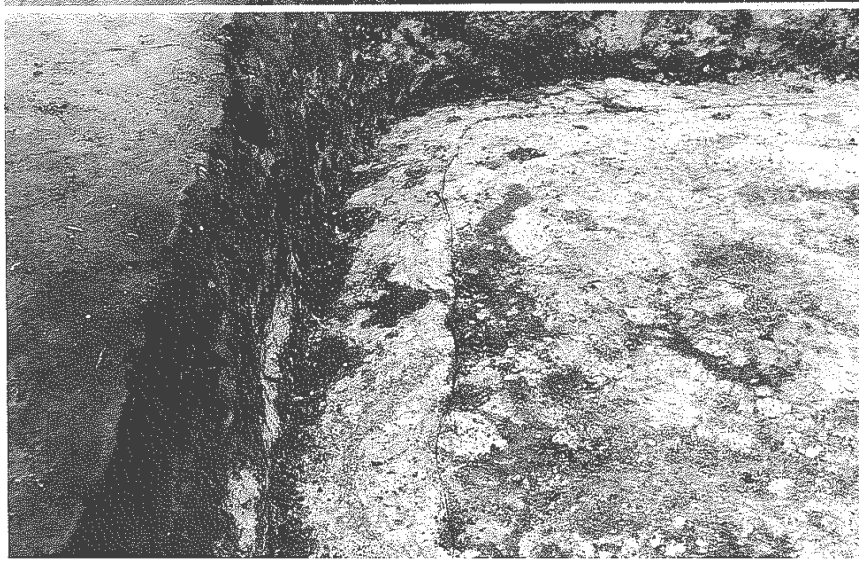
写　真　図　版

遺跡遠景（北方より）
中央右が調査区

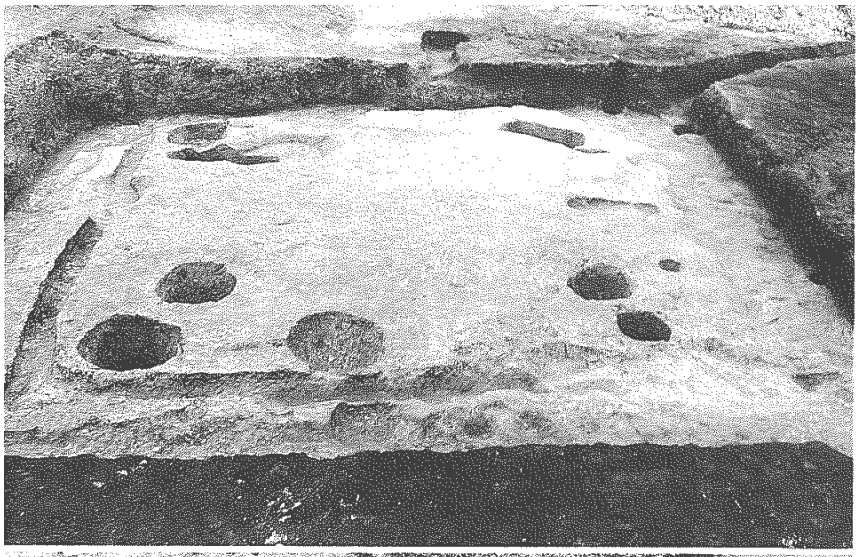
1号住居跡



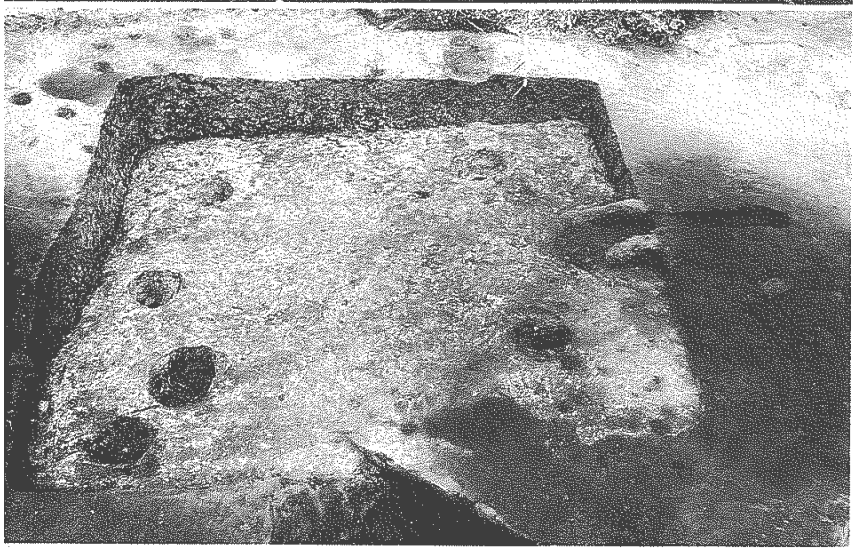
周溝掘り方と壁材痕跡



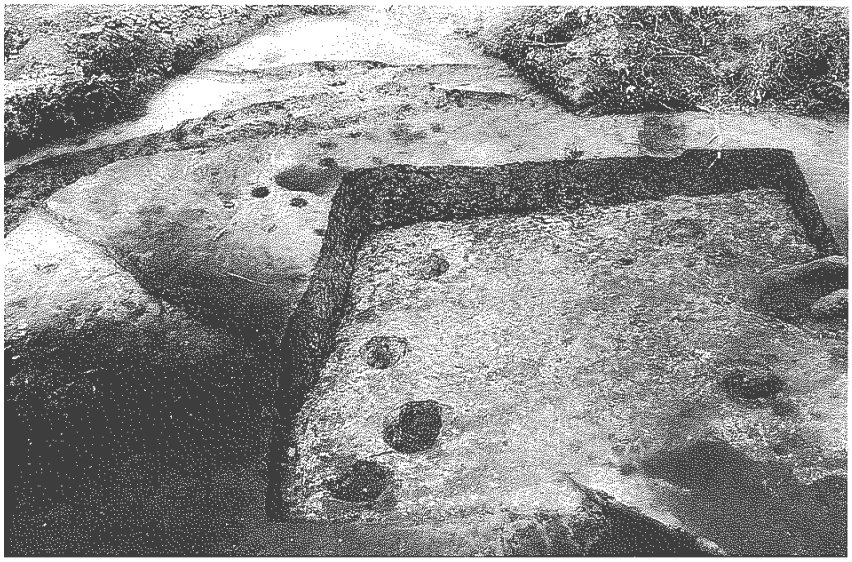
図版1　八幡遺跡



2 号住居跡



3 号住居跡



3 号住居跡及び外周溝

図版 2　八幡遺跡

4 号住居跡

大嶺八幡遺跡
1 号住居跡

大嶺八幡遺跡
焼土遺構

図版 3　八幡遺跡
大嶺八幡遺跡

Ａ地点遠景（南方より）
右奥の丘陵上で
築地と溝を確認している

Ａ遺構（北面）

Ａ２地点断面
築地本体

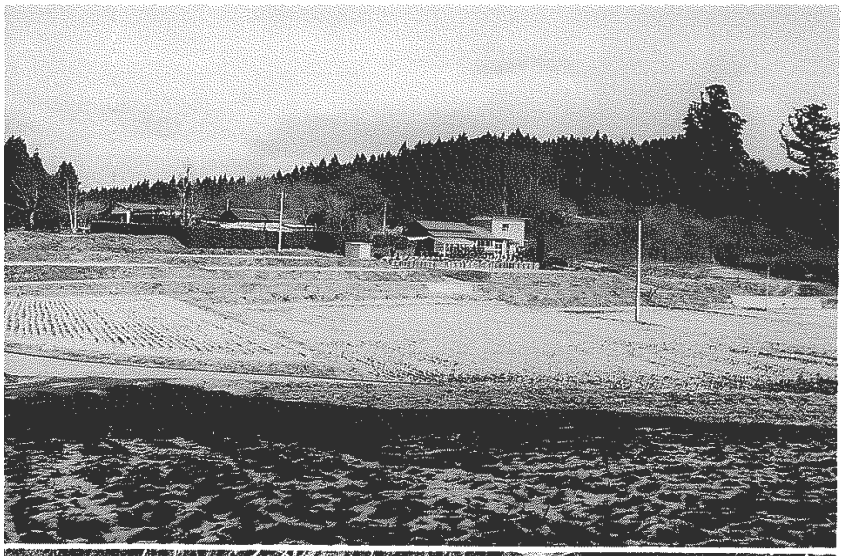
図版４　分布調査

Ａ２地点断面
北側溝

Ｃ遺構（北面）

Ｄ遺構（北面）

図版５　分布調査

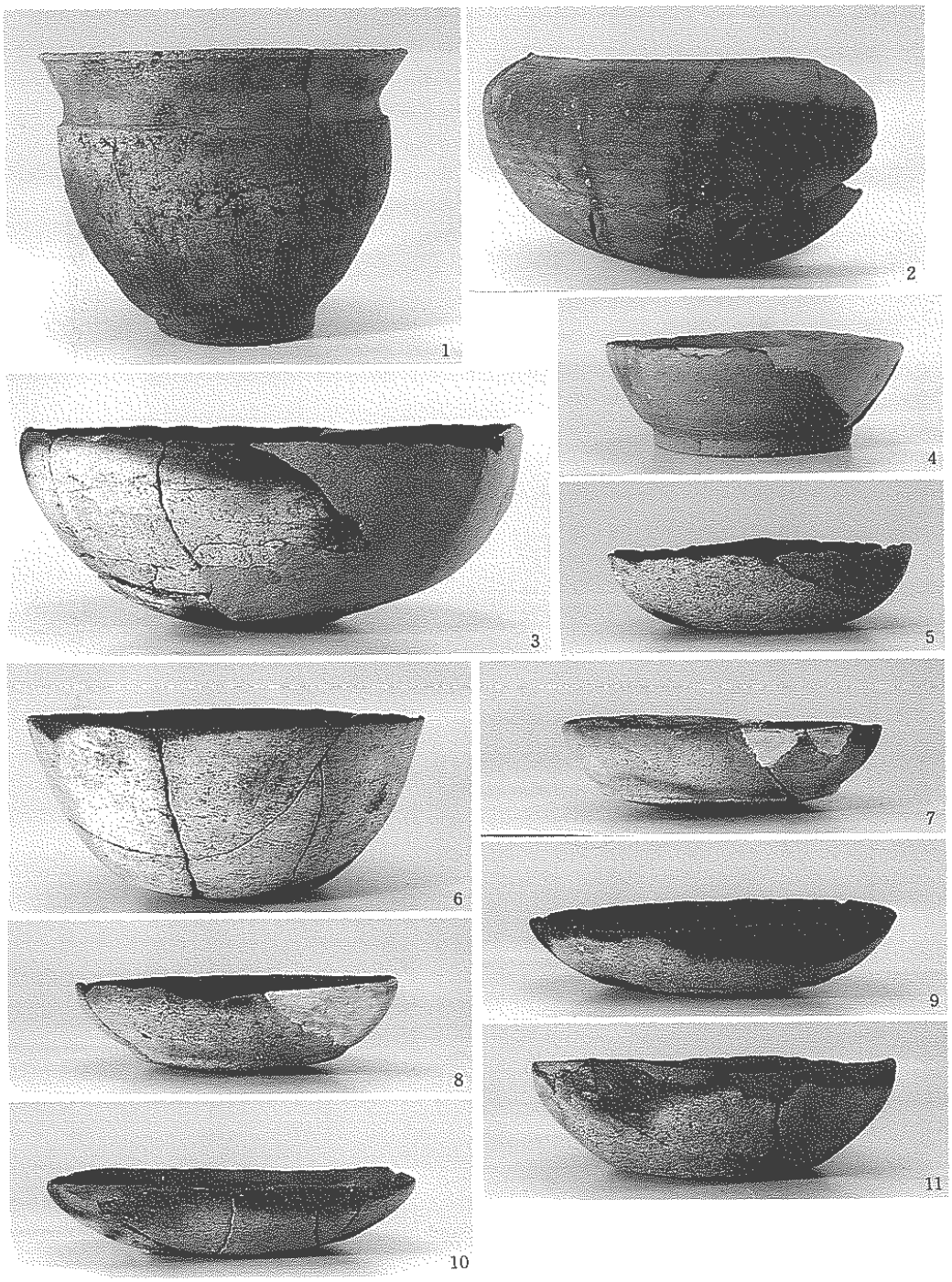


大崎八幡神社付近
（南西より）
奥の丘陵上に社殿がある
手前の水田で瓦が採集
されている。

K 1 地点断面

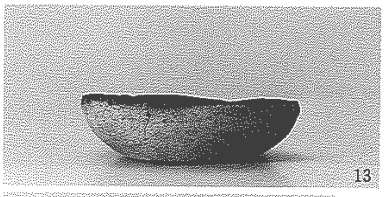
K 遺構
東端部分

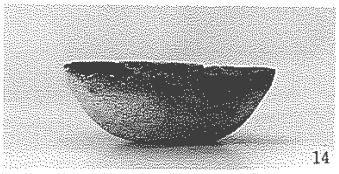
図版 6　分布調査

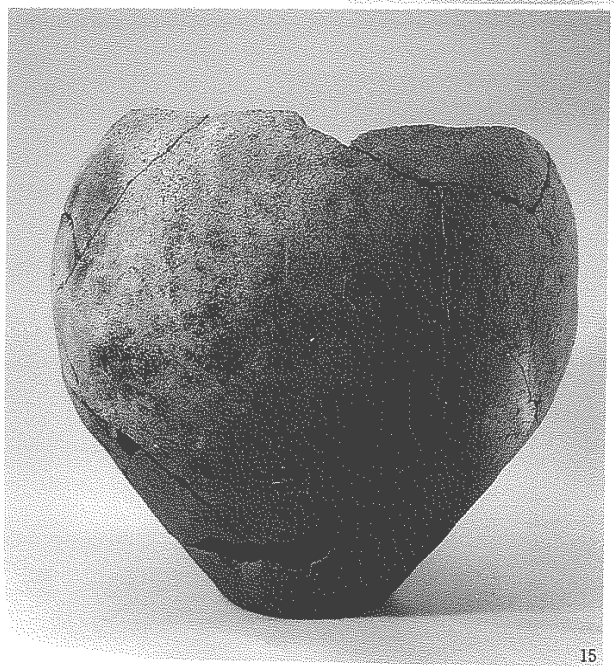


1～4　　八幡1号住居跡
5～7，9 八幡3号住居跡
8　　八幡4号住居跡

図版7　八幡遺跡・大嶺八幡遺跡出土遺物







10～15　大嶺八幡1号住居跡

図版8　大嶺八幡遺跡出土遺物

要害原遺跡
（ようがいはらいせき）

調　査　要　項

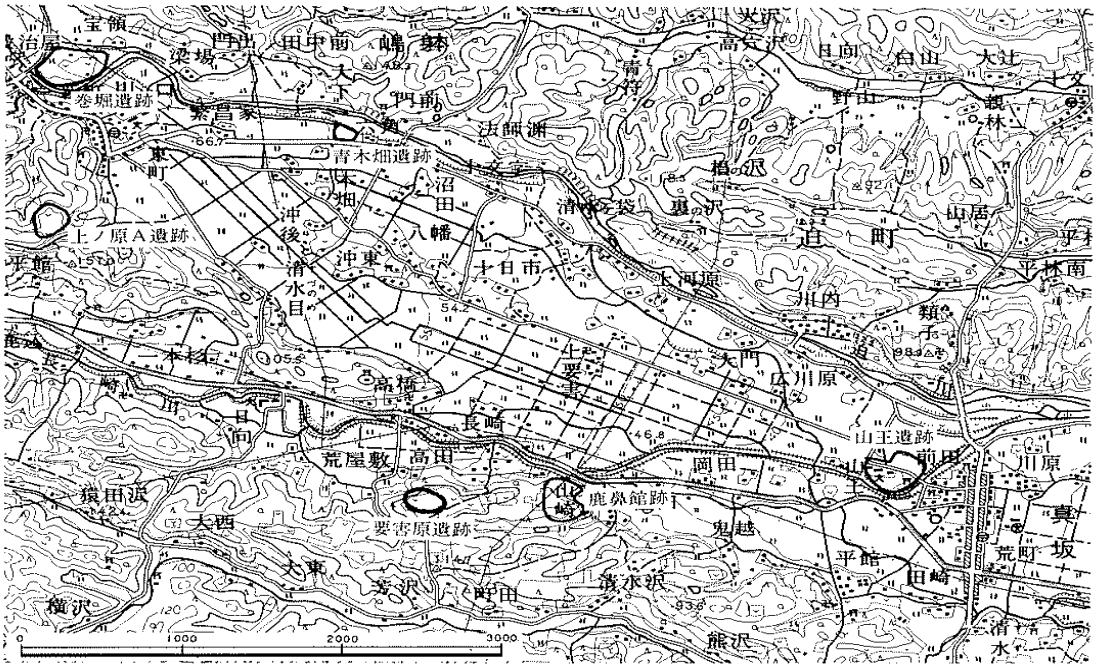
遺　跡　名：要害原遺跡（宮城県遺跡地名表発載番号　45066）
遺跡所在地：栗原郡一迫町字要害
発 掘 面 積：約400㎡
調 査 期 間：平成２年10月11日～12日
調 査 主 体：一迫町教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：白鳥良一・真山悟・須田良平・岩見和泰

要害原遺跡（ようがいはらいせき）

要害原遺跡は栗原郡一迫町字要害にあり、町役場の西方約３ｋｍの地点に位置している。地形的には奥羽山地から東に派生する築館丘陵にあって、一迫川流域の低地を北に望む小丘陵上に立地している。遺跡およびその付近は標高が約100mほどで、広い範囲にわたって畑地や杉林となった平坦な面が続く。遺跡の東側には中世城館である鹿鼻館跡が隣接し、周辺には山王遺跡や青木畑遺跡、巻堀遺跡、上ノ原Ａ遺跡など縄文時代～弥生時代の著名な遺跡が散在する地域でもある。

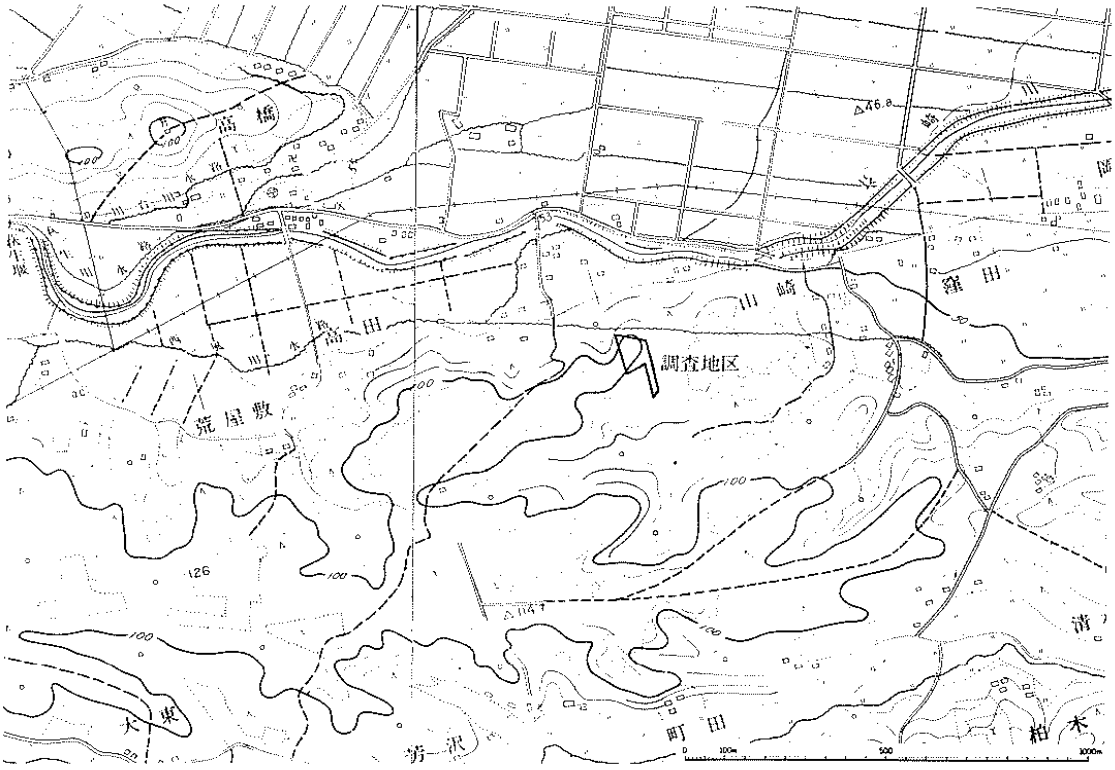
今回宮城県農業公社による草地造成計画事業の予定地が本遺跡に近接しており、遺構と係る恐れがあったため、同地約7200㎡を対象に平成２年10月11日～12日にかけて確認調査を実施した。しかし、幅２ｍの探索トレンチによる調査の結果、若干の縄文土器と土師質土器の破片が出土しただけで、遺構は検出されなかった。

縄文土器は深鉢の破片で、時期は地文のみであるため明確ではない。これらはいずれも表土から出土したもので、本来の包含層位や遺構との関係は不明であるが、出土地点が調査区西寄りの一ケ所に限られ、数量もごく少なかった状況から、居住域など集落の主な部分に関係するものではなかったものと思われる。ただし良好な地形からみて、付近にはまとまった遺構群の存在が想定される。

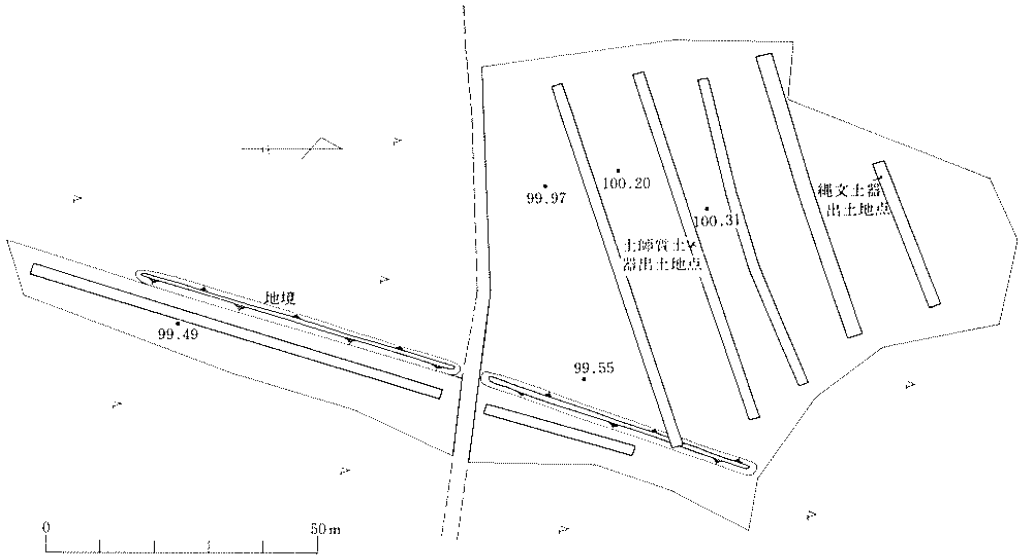


第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

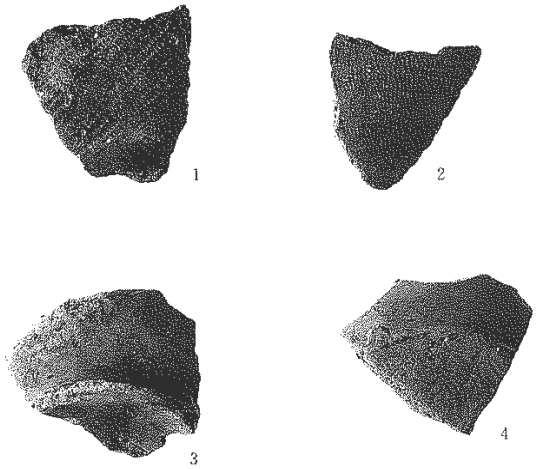
土師質土器は表土から出土したもので、上底状の皿の形態から中世のものと思われ、隣接する鹿鼻館跡に関係する遺物の可能性が強いと考えられた。



第２図　調査地区



第３図　調査トレンチ配置図



1・2－縄文土器　　3・4－土師質土器

図版1　上：調査トレンチ　下：出土土器

吉野城跡（よしのじょうあと）

調　査　要　項

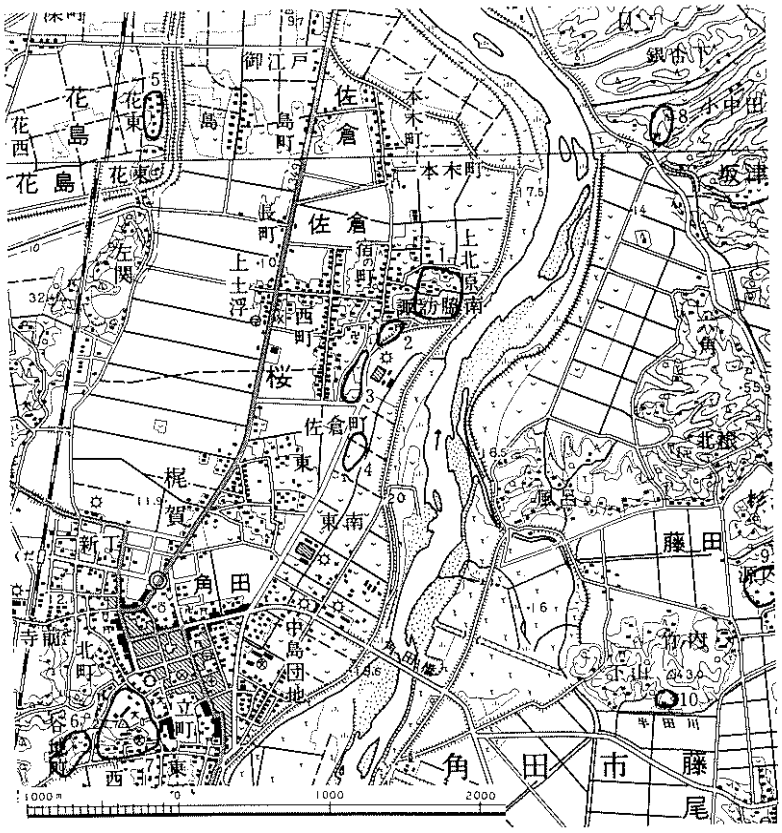
遺　跡　名：吉野城跡（宮城県遺跡地名表登載番号　03007）
遺 跡 記 号：ＹＮ
遺跡所在地：宮城県角田市佐倉字諏訪南、同上北原
発 掘 面 積：約110㎡
調 査 期 間：平成２年５月22日～23日
調 査 主 体：宮城県教育委員会・角田市教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課・角田市教育委員会社会教育課文化財係
調　査　員：小井川和夫、手塚　均、小村田達也、大和幸生、佐藤憲幸（県教委）
小野隆男、中村方彦、斎藤彰裕（市教委）

吉野城跡（よしのじょうあと）

1．はじめに

吉野城跡は角田市佐倉字諏訪南・上北原に所在する中世の平城跡で、角田市内を蛇行しながら北流する阿武隈川左岸の標高11～12mの自然堤防上に立地し、角田市役所の北東約2.7ｋｍに位置している。遺跡内は水田･畑地が大部分であるが、近年では宅造も増えつつある地域である（第１図）。

遺跡は市道改良工事に係わって昭和56・57・63年に発掘調査が行われており、堀で区画された東西80間・南北70間ほどの長方形の内郭と、内郭を中心として堀と土塁で区画された東西165間・南北172間ほどの規模で、西辺中央部が僅かに内側に入り込むもののほぼ方形を呈する外郭の存在が明らかになっている。また、外郭東辺外堀の内外の平坦面からは柱穴・井戸跡・土壙などが、外郭西辺郭内からも井戸跡・土壙が検出され、西辺では堀に３時期、土塁に２時期の作り替が認められている。これらの遺構からは国産の中世陶器



1．吉野城跡
2．諏訪脇南遺跡
3．梶賀遺跡
4．田町裏遺跡
5．左関城跡
6．松ヶ枝館跡
7．臥牛城跡
8．筒目木Ｂ遺跡
9．松前館跡
10．館山館跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

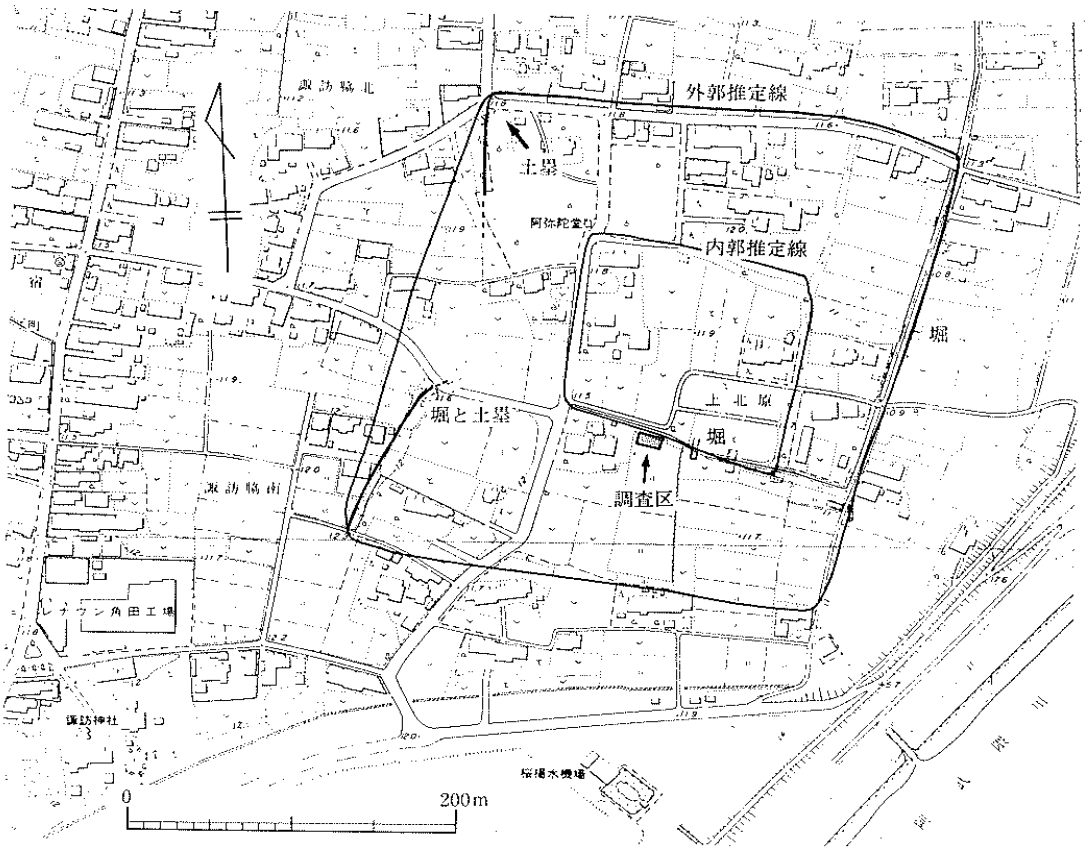
（施釉・無釉）が主に出土しており、中国産の青磁・古銭の出土も見られる。なお、遺跡内からは弥生式土器・土師器・近世磁器なども発見されており、複数期の遺跡が重複している可能性が指摘されている（斎藤：1991）。

なお、遺跡の南西および南側に連なる自然堤防上には諏訪脇遺跡、梶賀遺跡、田町裏遺跡など街道沿いに発達したと考えられる中世の集落跡が広がり(第２図)、掘立柱建物跡・井戸跡・土壙などが調査され、中世陶器・カラワケなどが出土している（註１）。

註１．諏訪脇遺跡は昭和57年、梶賀遺跡は昭和58年に調査が行われているが、その内容は未報告であり、記載内容は県教育委の資料に基づいている。田町裏遺跡については角田市教委の平成二年度発掘調査報告書（角田市教委：1991）を参照されたい。

２．調査の成果

今回の調査は内郭南辺のほぼ中央部の堀（内堀）の外側の畑地を対象とした個人住宅の建設に伴うもので、建坪分の約110㎡について平成２年５月22・23日の両日に発掘調査を行った（第２図）。



第２図　遺跡の範囲と調査区

【基本層位】

基本層位は第１層が褐色の耕作土で約50ｃｍの層厚がある。第２層は暗褐色土層で南側では約20ｃｍの厚層であったが、北側では内堀方向に傾斜する軽い段が見られ、段を境に40ｃｍほどの厚さになり、下位は湿地のようなグライ化した層になっていた。第３層は褐色の砂質シルト層である。

【発見された遺構と遺物】

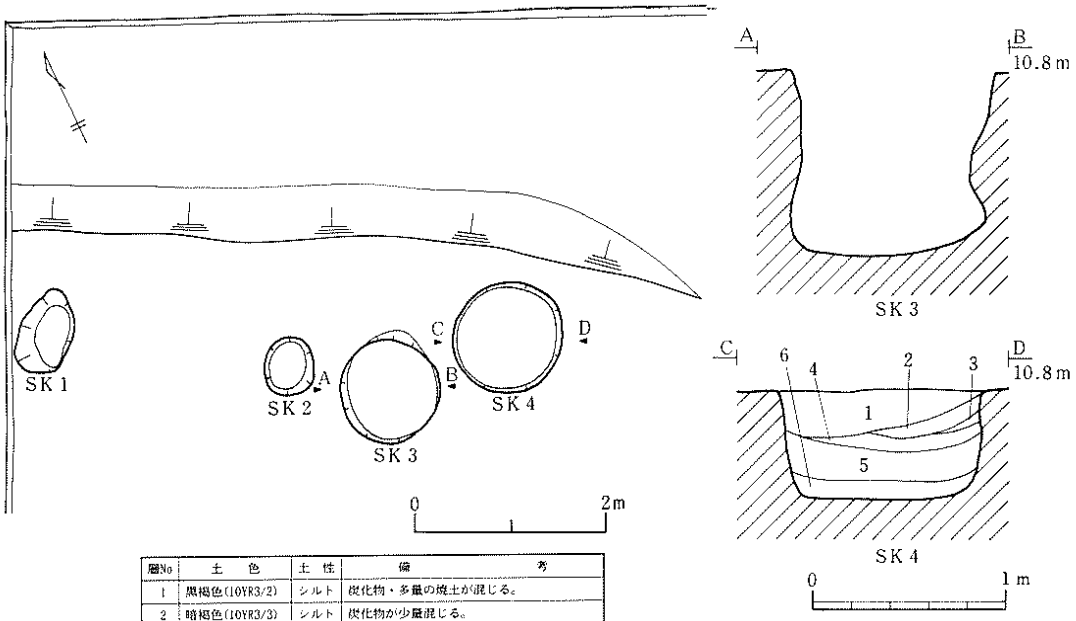
発見された遺構は土壙が４基（ＳＫ１～４）で、第３層の上面で検出された（第３層）。

ＳＫ１：長軸90ｃｍ・短軸50ｃｍ・深さ23ｃｍの楕円形を呈する。堆積土は暗褐色のシルトで層中には木根の攪乱が見られた。出土遺物はない。

ＳＫ２：径60ｃｍ・深さ約20ｃｍの円形で、断面形は皿状を呈する。堆積土は暗褐色のシルトで炭化物の混入が見られた。出土遺物はない。

ＳＫ３：径1.1m・深さ約１ｍの円形で、断面形は上部はほぼ垂直であるが下部はやや抉れている。堆積土は黒褐色の砂質シルトで地山ブロックや砂を班状に含んでおり、人為的な埋土と思われる。埋土中から非使用の土師器甕破片、中・近世の陶器片が出土している（写真図版２－下１～４）。

１．土師器甕：口縁部がほぼ水平に外方に折れ、体部は長胴形になるものと思われる。内



層No	土　色	土 性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・多量の焼土が混じる。
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物が少量混じる。
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土が少量混じる。
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土と粘土粒が少量混じる。
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	酸化鉄の付着が著しい。粘土粒が混じる。
6	褐　色(10YR4/4)	シルト	砂質で 5層の汚れが入る。

第３図　発見された遺構

外面にナデ調整が施されている。胎土には砂粒をおく含み、焼成は良好である。
２．中世施釉陶器・灰釉が掛かっており、貫入が著しい。器壁の厚さは約１ｃｍ、胎土は緻密で焼成は良好である。器種は不明であるが瀬戸産のものと思われる。
３．中世無釉陶器：大甕の体部破片で外面にナデ調整が見られる。器壁の厚さは約1.3ｃｍ、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。産地は不明である。
４．近世施釉陶器：外面に鉄釉が掛かっている鉢である。内面は磨面になっており、筋目はないものの摺鉢としての使用が考えられる。器壁厚は約１ｃｍ、胎土は緻密で焼成は良好である。

ＳＫ４：径1.15m・深さ約1.1mの円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形である。堆積土は黒褐色・暗褐色のシルトで１～４層には炭化物あるいは焼土の混入がみられた。出土遺物はない。

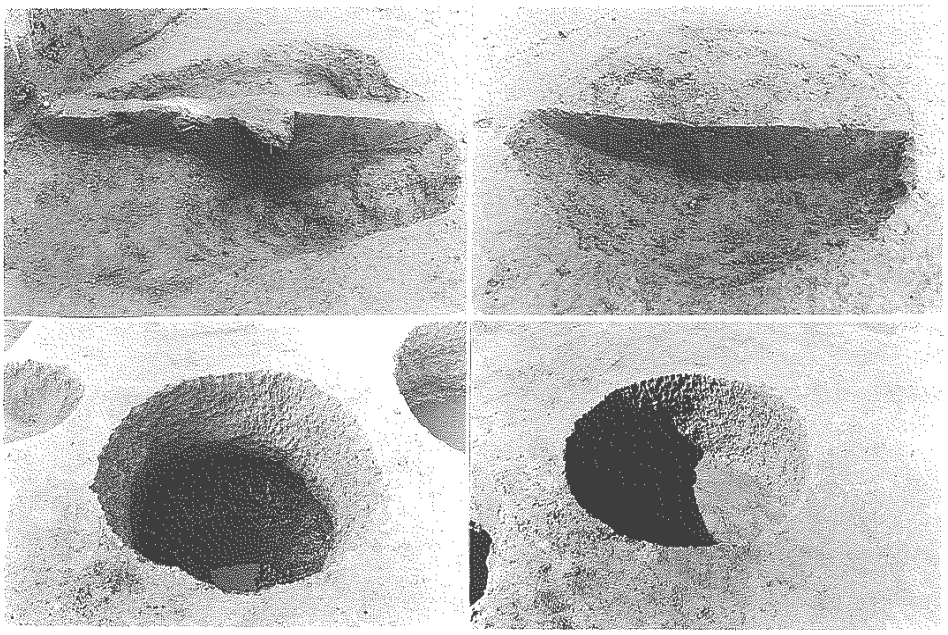
３．まとめ

今回の調査で発見された遺構と遺物は、上記のとおりである。調査区が内堀にほぼ接するような場所であるためか、遺構の存在は希薄であった。遺物はＳＫ3から出土しているが、これは古代～近世までの遺物が混在する状況であり、遺構の廃棄時期が近世以降の時期であることしか明らかではない。また、他の遺溝については出土遺物がなく、その年代は不明である。

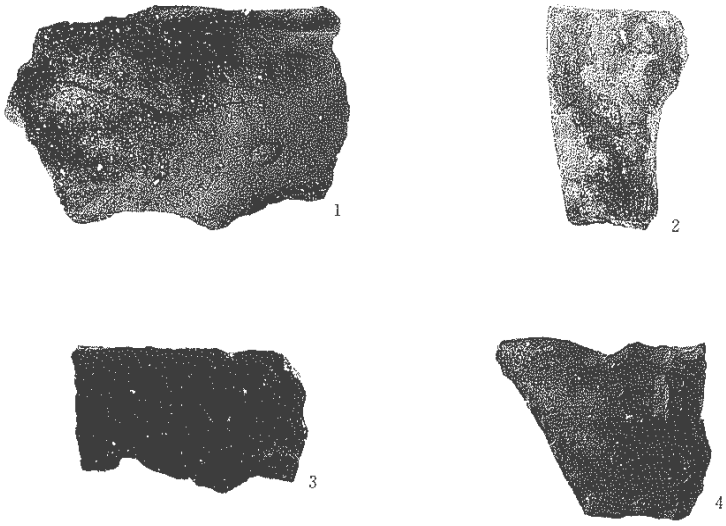
吉野城については今回を含め四回の発掘調査が行われているが、調査された面積は城跡全体の面積からみると極めて狭いものであり、区画施設としての堀・土塁、生活の跡である井戸など一部の遺構のみが明らかにされているだけである。遺跡のある微高地は現在では畑地となっている部分が多いが、周辺では開発化が進んでおり、貴重な中世の平城を残すために保護・保存を前提とした取り組みが必要と考えられる。

写真図版１　調査地点近景（北より：手前の道路が内堀南辺）

写真図版２　検出された遺構（南より）



写真図版３　上段左SK１、同右SK２、下段左SK３、同右SK４



写真図版４　発見された遺物　1.土師器、2･3.中世陶器、4.近世陶器

川袋古墳群（かわぶくろこふんぐん）

山中遺跡（やまなかいせき）

調　査　要　項

遺　　跡　　名：川袋古墳群（宮城県遺跡地名表登載番号　22057）
　　山中遺跡　（宮城県遺跡地名表登載番号　22065）
所　　在　　地：宮城県宮城郡利府町森郷字川袋
調査対象面積：3,100㎡
発 掘 面 積：約2,500㎡
調 査 期 間：平成２年４月９日～５月19日
調 査 担 当：利府町教育委員会
調 査 協 力：宮城県教育庁文化財保護課
調　　査　　員：菊池逸夫、近藤和夫、吾妻俊典（宮城県教育庁文化財保護課）
　　庄子敦（利府町教育委員会）

川袋古墳群・山中遺跡

１、はじめに

川袋古墳群・山中遺跡は、宮城県宮城郡利府町森郷字川袋、山中に所在し、ＪＲ東日本利府駅の東１ｋｍ余の丘陵上に位置している。

遺跡の所在する利府町東部は、松島から塩竈・多賀城まで続く丘陵地帯（松島丘陵）となっている。川袋古墳群は、利府町加瀬字十三塚付近から森郷地区に延びる標高37～38mの丘陵にあり、現在のところ３基（１～３号墳）の古墳が確認されている。

川袋古墳群（１号墳）は、昭和52年に宮城県教育委員会によって直径約10mの円墳が発掘調査され、胴張りのある両袖型の横穴式石室が確認された。主体部は玄室・玄門・羨道からなり、羨道前面には溝状遺構（墓道？）が認められた。また、玄室の床面には間仕切石によって２分されている。石室内部では追葬が確認されている(県教育委員会：1978)。

２、発見遺構

(1) １号周溝墓：調査区北西隅に位置し、周溝の一部が検出されたものである。周溝の規模は最大幅約7.25m～最小幅１m、深さ0.95m～0.3mを計る。全体を調査したわけではないので、形態については不明である。

出土遺物には、周溝堆積土中から焼成前になされた底部穿孔の土師器壷２個体分が出土した。

(2)竪穴式住居跡：４軒(１～４号住居跡)発見されている。規模の推定できるものは５～８mの方形を呈している。

出土遺物には１号住居－複合口縁土師器甕、２・３号住居－土師器甕、４号住居－土師器甕、弥生土器、アメリカ式石鏃がある。

(3)川袋３号墳（第２図）

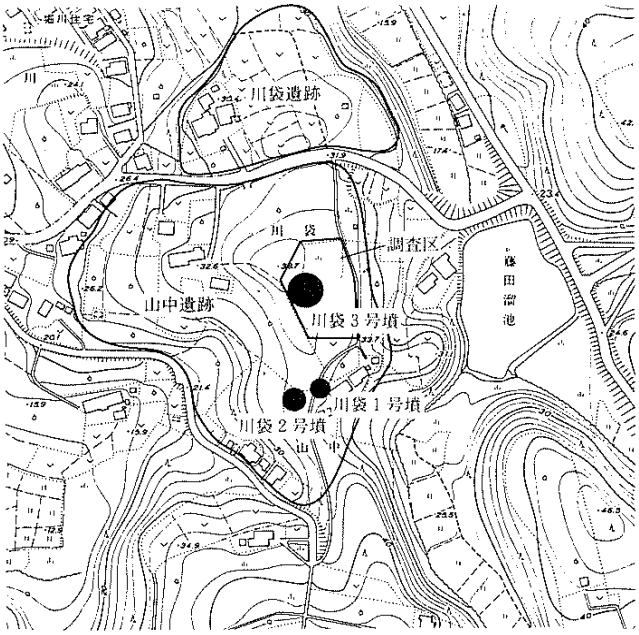
【古墳の形態及び規模】墳丘が削平されていたが、奥壁が古墳の中央にすえられたものと仮定してみると、周溝内縁までの規模は、北側周溝まで12m、同西側10、75m、同東側12.5mを計ることから、直径が22～23mの円墳と推定される。

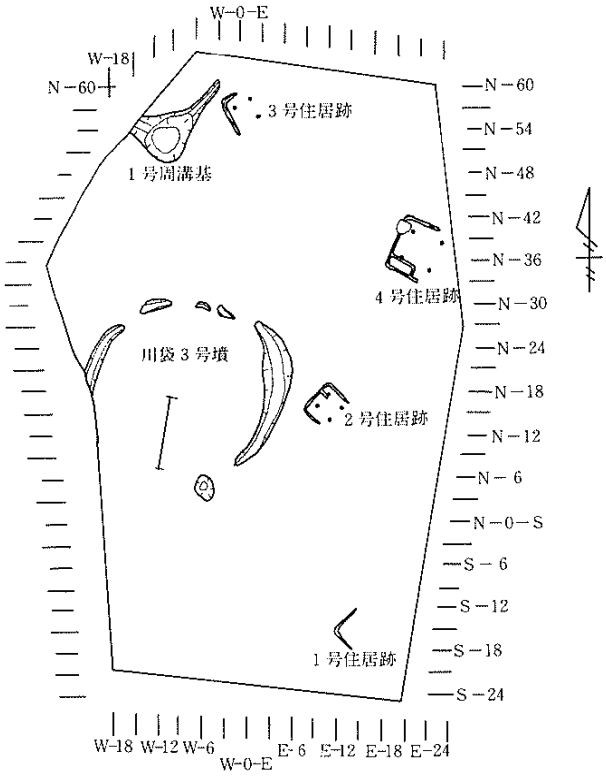
【主体部の構造】主体部は玄室、羨道からなり、玄室中央部でわずかに膨らむ胴張りの横穴式石室である。玄室と羨道は梱石によって区画されている。

主体部の規模は、長さ（残存部）4.70m、玄室の長さ3.56m、奥壁部幅0.99m、中央部幅1.10m、梱石部幅0.78mである。羨道部の長さは（残存部）0.96m、幅0.78mである。

また、玄室及び羨道底面にはともに５～10ｃｍの砕石を敷き詰めている。

【周溝】保存状態が比較的良好な東側部分での周溝の規模は、幅２m、深さ0.6mであ





第1図　遺跡の位置と調査区

る。周溝底部の形態は「U」状である。周溝堆積土中には、主体部周囲に認められる地山ブロックを含む封土と同様な組成を示す堆積土が主体部方向から流れ込んでいる。

【封土】旧表土上に２層観察された。ともに、5～10ｃｍの地山ブロックを含んでいる。

【古墳の構築手順】古墳の残存部位が少なく、構築手順について分かる範囲で報告すると、①旧表土を掘り込んで、主体部掘り方を設ける。②奥壁、側壁石を置く。(繰り返す)③その際裏込め石、土を入れ、安定させる。(繰り返す)④封土を盛る。という手順と見られる。

【出土遺物】玄室床面から鉄製品（刀子、鉄鏃）が４点、周溝から若干の須恵器甕片が出土している。

２、まとめ

(1)　川袋古墳群は、利府町加瀬地区から森郷地区に至る、北に延びる標高37～38mの丘陵上に立地し、現在のところ、３基の円墳（１～３号墳）が発見されている。

(2)　今回調査された３号墳の規模は、直径約22～23mの円墳である。

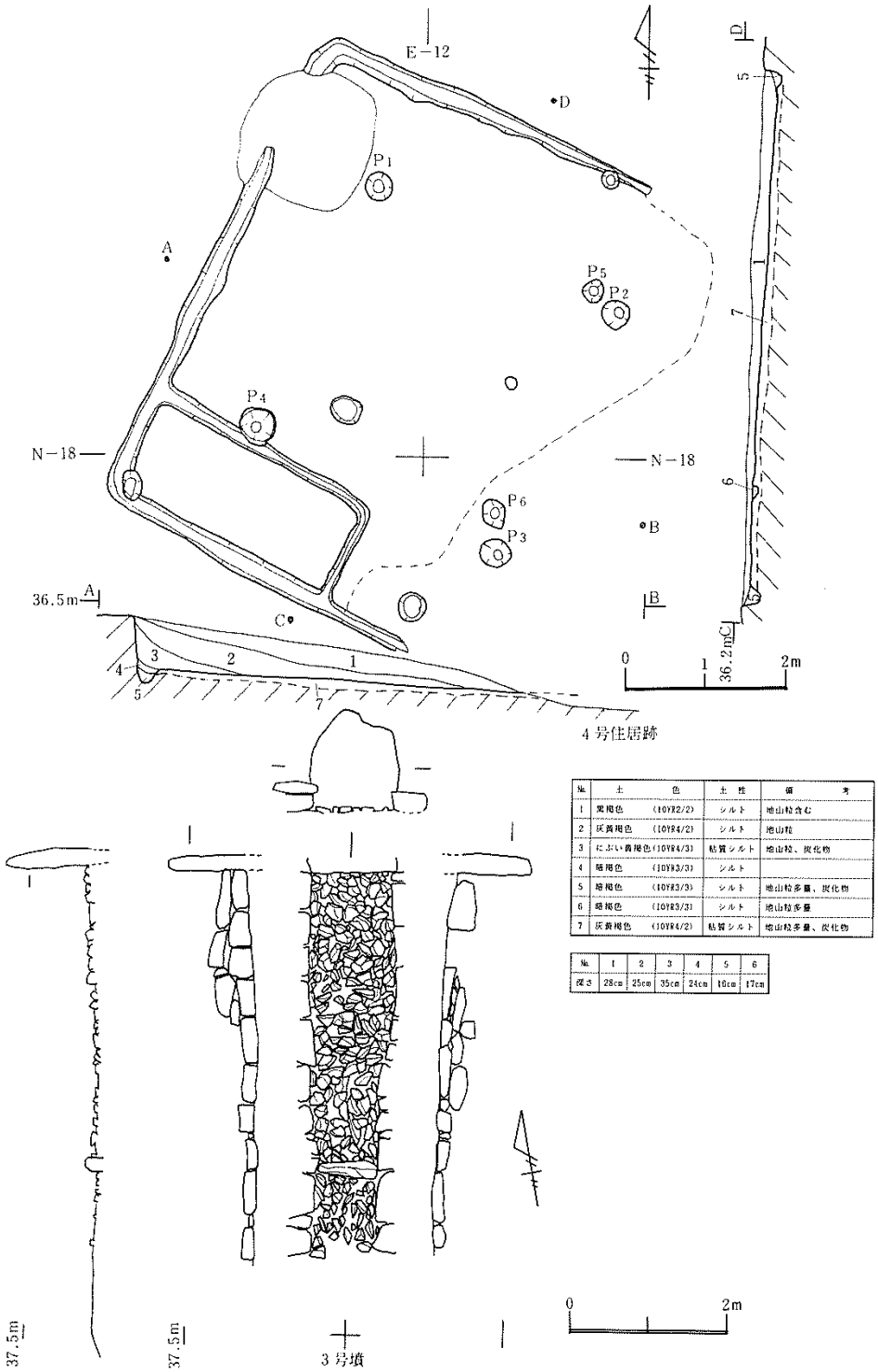
(3)　内部主体は、やや胴張りの横穴式石室である。石室は玄室・羨道からなり梱石で区画され、玄室・羨道双方の底面には5～10ｃｍ大の砕石を敷詰めている。

(4)　３号墳の所属時期については、主体部の特徴から１号墳とおおむね同じ７世紀後半と見られる。

(5)　今回の調査では、古墳の他に周溝墓（１号周溝墓）１墓、竪穴式住居跡４軒が検出された。周溝墓からは底部穿孔（焼成前穿孔）の土師器壷があり、出土遺物の特徴から塩釜式段階と見られる。また、竪穴式住居跡は、出土遺物から塩釜式～南小泉式段階と見られる。

参考引用文献

宮城県教育委員会(1978)：川袋古墳群－利府町文化財調査報告書第１集
宮城県教育委員会
利府町教育委員会(1990)：郷楽遺跡Ⅱ
利府町教育委員会(1988)：八幡崎Ｂ遺跡－利府町文化財調査報告書第４集



No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒含む
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘質シルト	地山粒、炭化物
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒多量、炭化物
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒多量
7	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	地山粒多量、炭化物

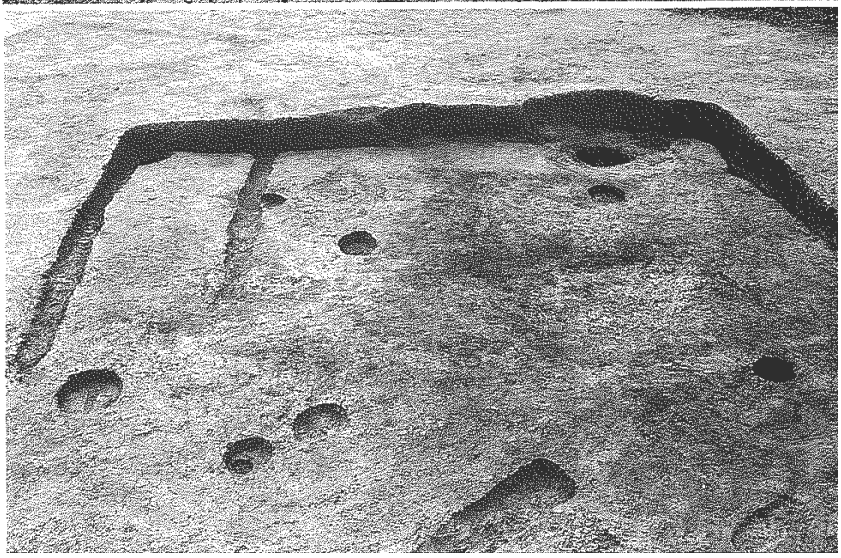
No.	1	2	3	4	5	6
深さ	28cm	25cm	35cm	24cm	10cm	17cm

第２図　４号住居跡、３号墳

1 号周溝墓

1 号住居跡

4 号住居跡



写真図版 1

3号墳主体部

同出土遺物

3号墳東側周溝

写真図版2

中組遺跡（なかぐみいせき）ほか

目　　次

Ⅰ　はじめに 247
Ⅱ　検出された遺構と出土遺物 249
Ⅲ　考察とまとめ 263
引用参考文献 265
写真図版 267

調　査　要　項

遺跡の名称、遺跡記号・宮城県遺跡地名表掲載番号、所在地

(1) 中組遺跡　なかぐみいせき　ＭＰ･05092　蔵王町円田字新石橋、田町前、屋敷
(2) 堂の入遺跡　どうのいりいせき　ＮＯ･05106　蔵王町円田字堂の入
(3) 中沢Ａ遺跡　なかざわＡいせき　ＭＱ･05045　蔵王町平沢字中沢、宮ケ内下
(4) 中沢Ｂ遺跡　なかざわＢいせき　ＭＲ･05071　蔵王町平沢字中沢
(5) 立目場遺跡　たちめばいせき　ＭＳ･05013　蔵王町平沢字立目場、谷地田
(6) 屋木戸内遺跡　やぎとうちいせき　ＭＵ･05043　蔵王町平沢字屋木戸内、吹張、越戸

調査面積	合計5395㎡	〈対象面積〉	〈調査面積〉
	(1) 中組遺跡	2700㎡	2700㎡
	(2) 堂の入遺跡	周辺を含む30ha	680㎡
	(3) 中沢Ａ遺跡	1900㎡	280㎡
	(4) 中沢Ｂ遺跡	3500㎡	75㎡
	(5) 立目場遺跡	7200㎡	1060㎡
	(6) 屋木戸内遺跡	2900㎡	600㎡

調査期間　平成２年(1990年)６月18日～７月11日、10月２日～10月３日
調査主体　宮城県教育委員会
調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
小井川和夫　阿部博志　古川一明　鈴木真一郎　木皿直幸　村上利雅
調査協力　宮城県農政部耕地課、宮城県大河原土地改良事務所
蔵王町円田地区圃場整備事業組合
蔵王町教育委員会社会教育課　森貢喜　芦立敏彦　（敬称略）
調査参加者　我妻長雄　岡崎今朝一　小島勇蔵　佐藤生七　佐藤きみえ　高橋けさの
樋口博　真壁さだ　村上弘三　山家栄治　山家久義　（敬称略）

中組遺跡ほか

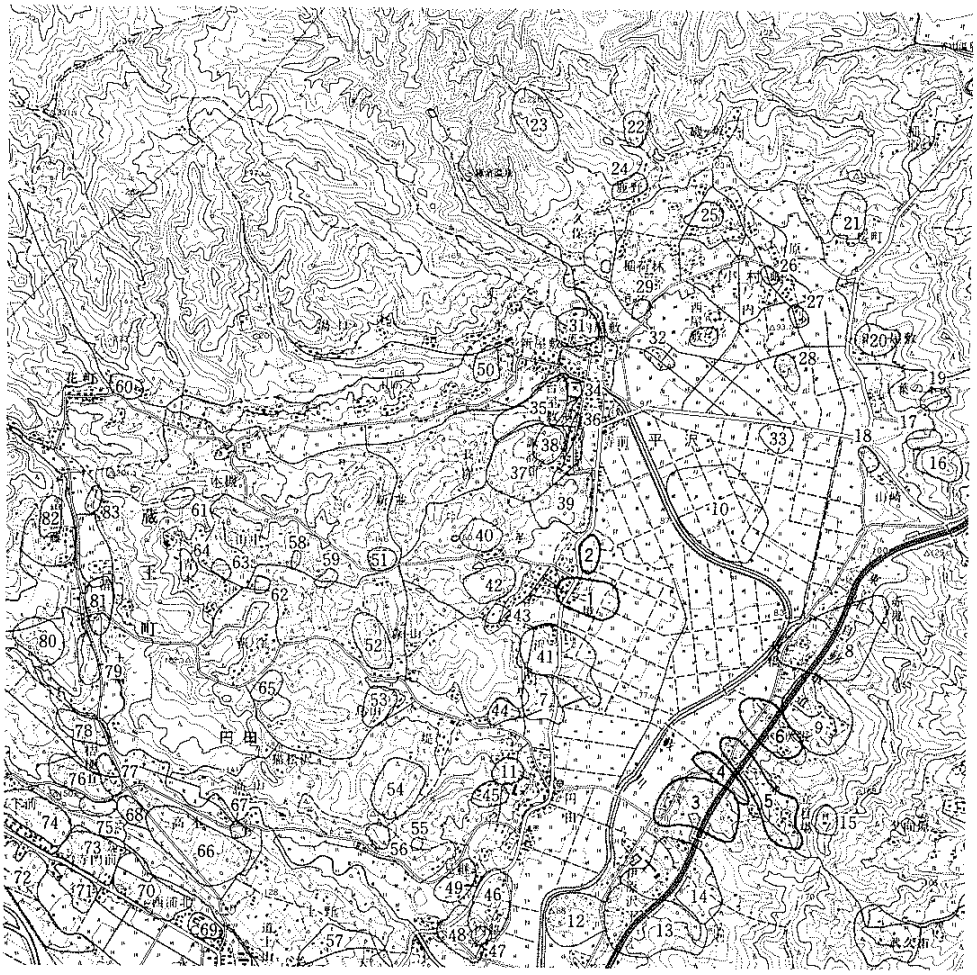
Ⅰ　はじめに

［遺跡の位置と環境］中組・堂の入の２遺跡は蔵王町円田に所在し、円田盆地の西側丘陵麓に位置する遺跡であり、中沢Ａ・中沢Ｂ・立目場・屋木戸内の４遺跡は蔵王町平沢に所在し、盆地の東側丘陵麓に位置する遺跡である。

円田盆地は蔵王町の北東部に位置する東西1.5ｋｍ、南北４ｋｍほどの狭隘な盆地で、刈田郡の北端にもあたり、柴田郡村田町と境を接している。南北に並行に走る断層が幾筋か生じた結果、地溝となったところが盆地となっており、その周囲のうち南側を除く三方は標高150～250mの低い丘陵地帯である。丘陵は藪川およびその支流の小河川によって、複雑に開析されている。その裾部は台地または微高地となっており、集落立地には条件がよく、遺跡も数多く見られる。盆地底では藪川が北西側から南へ流れており、流域には標高75～80mほどの沖積地が形成され、今日では大部分が水田となっている。

蔵王町には旧石器時代から中近世まで各時代の遺跡があり、特に今回調査の対象となった先の６遺跡が立地する円田盆地の丘陵裾部や松川流域の河岸段丘上には非常に多くの遺跡が分布し、県内でもっとも遺跡が多い地域の一つにあげられよう。（第１図）

［調査の方法と経過］今年度の調査は昨年度の調査にひきつづき、藪川南岸までの遺構確認のための試掘調査（堂の入遺跡周辺）と、昨年度の試掘調査により確認された遺跡の範囲内で、圃場整備が施行される箇所について行った事前調査（中組・中沢Ａ・中沢Ｂ・立目場・屋木戸内の５遺跡）とを実施した。まず**中組遺跡**の事前調査に取り組み、調査を６月18日に開始した。微高地の削平を伴う圃場整備の部分2700㎡全面を対象としたものである。昨年竪穴遺構、土壙およびピットが検出された東側、つづいて西側（水路部分）を調査した結果、東側調査区では掘立柱建物跡７棟、土壙22基などを検出し、西側調査区では土壙２基および溝跡２条を検出した。遺構の実測については、ピットが多く検出されたところは任意の３m方眼を設定し、縮尺1/20の遣り方測量を行い、遺構の分布密度の低いところは遺構を個別に縮尺1/20で実測し、位置は縮尺1/200の平板測量で補った。併せて遺構等のカラースライド・モノクロによる写真撮影も行った。調査がほぼ終了に近づいた６月30日には蔵王町円田地区の一般の方々を対象とした現地説明会を開催し、調査の内容を公表した。



1	中組遺跡	2	堂の入遺跡	3	中沢A遺跡	4	中沢B遺跡
5	立目場遺跡	6	屋木戸遺跡	7	臼山遺跡	8	赤鬼上遺跡
9	大橋遺跡	10	都遺跡	11	堀ノ内遺跡	12	台遺跡
13	塩沢北遺跡	14	伊原沢下遺跡	15	愛宕山遺跡	16	北割山遺跡
17	山崎遺跡	18	中篠木の沢遺跡	19	上篠木の沢遺跡	20	鍛冶屋敷遺跡
21	清上遺跡	22	鹿野遺跡	23	平衛館跡	24	大久保遺跡
25	後原遺跡	26	原遺跡	27	六角上遺跡	28	六角下遺跡
29	前戸内遺跡	30	西小屋館後	31	平沢館跡	32	十郎田遺跡
33	新城館跡	34	平沢遺跡	35	諏訪館前遺跡	36	諏訪館横穴古墳群
37	諏訪館遺跡	38	諏訪館跡	39	小薗遺跡	40	大柿内遺跡
41	本宿前遺跡	42	北境遺跡	43	沢遺跡	44	清水遺跡
45	寺坂遺跡	46	宗勝寺遺跡	47	宗勝寺古墳	48	戸の内遺跡
49	土ヶ市遺跡	50	丈六遺跡	51	新並遺跡	52	築館館跡
53	鳥山遺跡	54	花橋館跡	55	八幡山古墳群	56	見樋遺跡
57	上野遺跡	58	角山A遺跡	59	角山B遺跡	60	野尻遺跡
61	三木規遺跡	62	青木遺跡	63	山中遺跡	64	入青木遺跡
65	萩の窪遺跡	66	高木遺跡	67	高木B遺跡	68	宮団遺跡
69	愛宕山遺跡	70	西浦・西浦B遺跡	71	谷地遺跡	72	十文字遺跡
73	寺門前遺跡	74	曲木遺跡	75	上曲木A遺跡	76	上曲木B遺跡
77	桔梗山遺跡	78	土橋遺跡	79	湯坂山遺跡	80	湯坂山B遺跡
81	円田入B遺跡	82	根無藤遺跡	83	円田入C遺跡		

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

堂の入遺跡とその周辺については、６月26・29日、７月11日および10月２日に遺跡の範囲確認のための試掘調査を行った。トレンチについては昨年同様、圃場整備によって深い掘削が予定されている用水路や道路が施行される部分を中心に設定した。その結果、中世のピット群が検出され、微地形ともあわせて遺跡の範囲を確認した。

中沢Ａ・立目場・屋木戸内の３遺跡については７月２～10日に、また**中沢Ｂ遺跡**については10月３日に調査を行った。中組遺跡同様、昨年度確認した遺跡の範囲内において削平による圃場整備が実施される箇所においての事前調査であるが、遺構の分布密度がうすいとみられたので、トレンチを任意に設定して行った。いずれのトレンチも遺構の存在が予想される地山が地表面近くにあって、台地（微高地）周縁部とみられる場所ではあったが、遺物が若干出土したのみで遺構は検出されなかった。したがって、今回の圃場整備事業が遺跡に与える影響はないものと判断した。記録についてはトレンチの位置を縮尺1/1000の地形図にしるすだけにとどめた。この４遺跡については、第15図にトレンチ配置をしるし、立目場遺跡で出土した遺物については第14図に示した。

なお、本報告の図版内の方位はすべて座標北を用いた。

以上が今年度の調査の概要であるが、これをもって円田地区圃場整備事業にかかわる遺跡の調査のうち、藪川南岸までの区間を終了した。

Ⅱ　検出された遺構と出土遺物

(1)中組遺跡（第２～11図）

検出された遺構には、掘立柱建物跡７棟、溝跡２条、土壙24基などがある。また、出土遺物には、縄文時代・弥生時代の土器・石器のほか、中近世の陶器・銅製品がある。

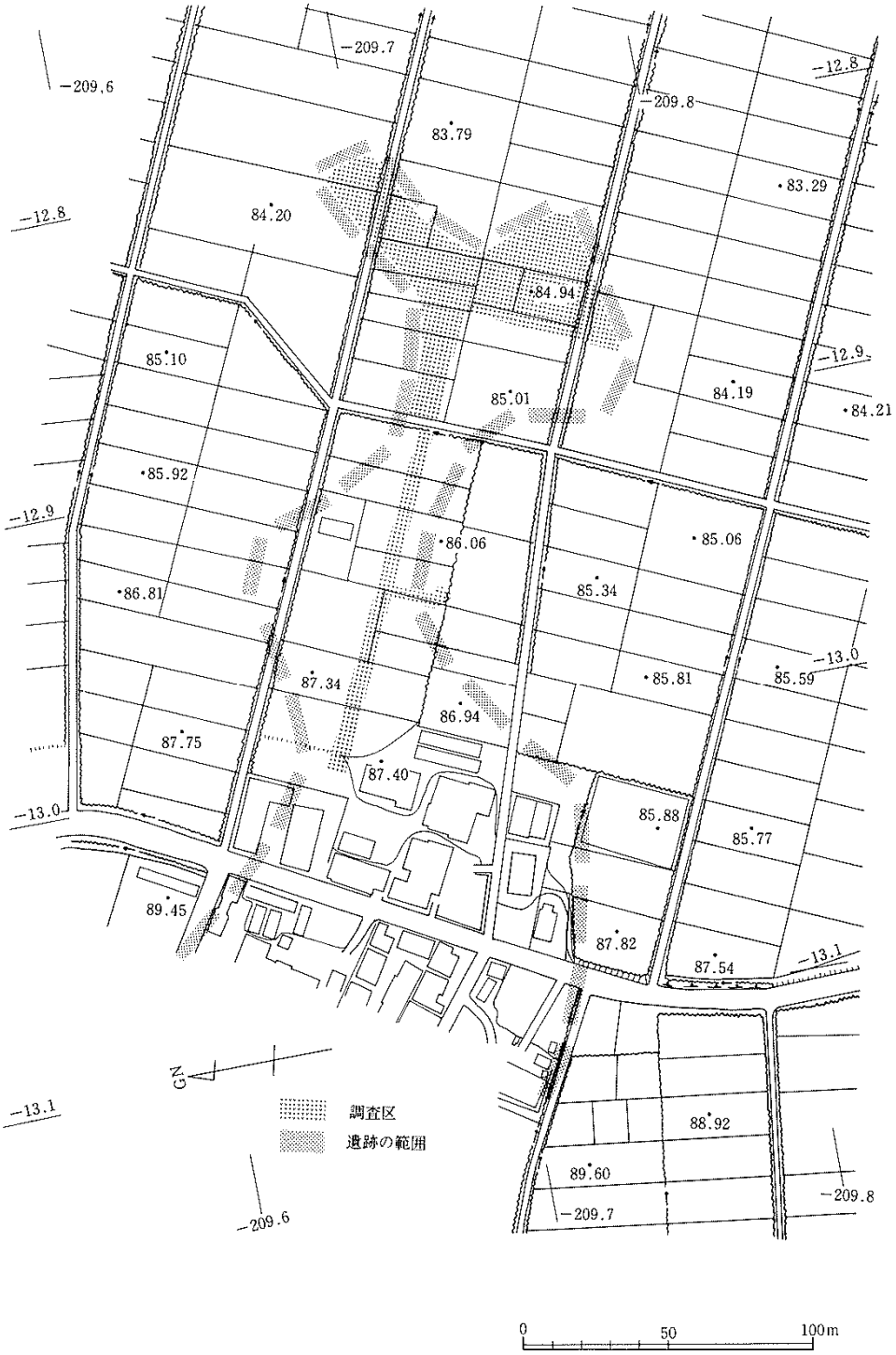
《微地形と基本層位》　層位は、表土・旧表土・地山の３つに分けられる。丘陵ののびがあって、標高86mより上位では表土の下にすぐ地山が認められるが、それより下位では地山と表土の間に黒色の沖積層（２層）がある。遺物の多くはこの層から出土した。また、遺構は３号掘立柱建物跡および18号・19号土壙以外はすべて地山上面で検出した。

１層：黒褐色（10ＹR2/3）シルト層、表土及び耕作土

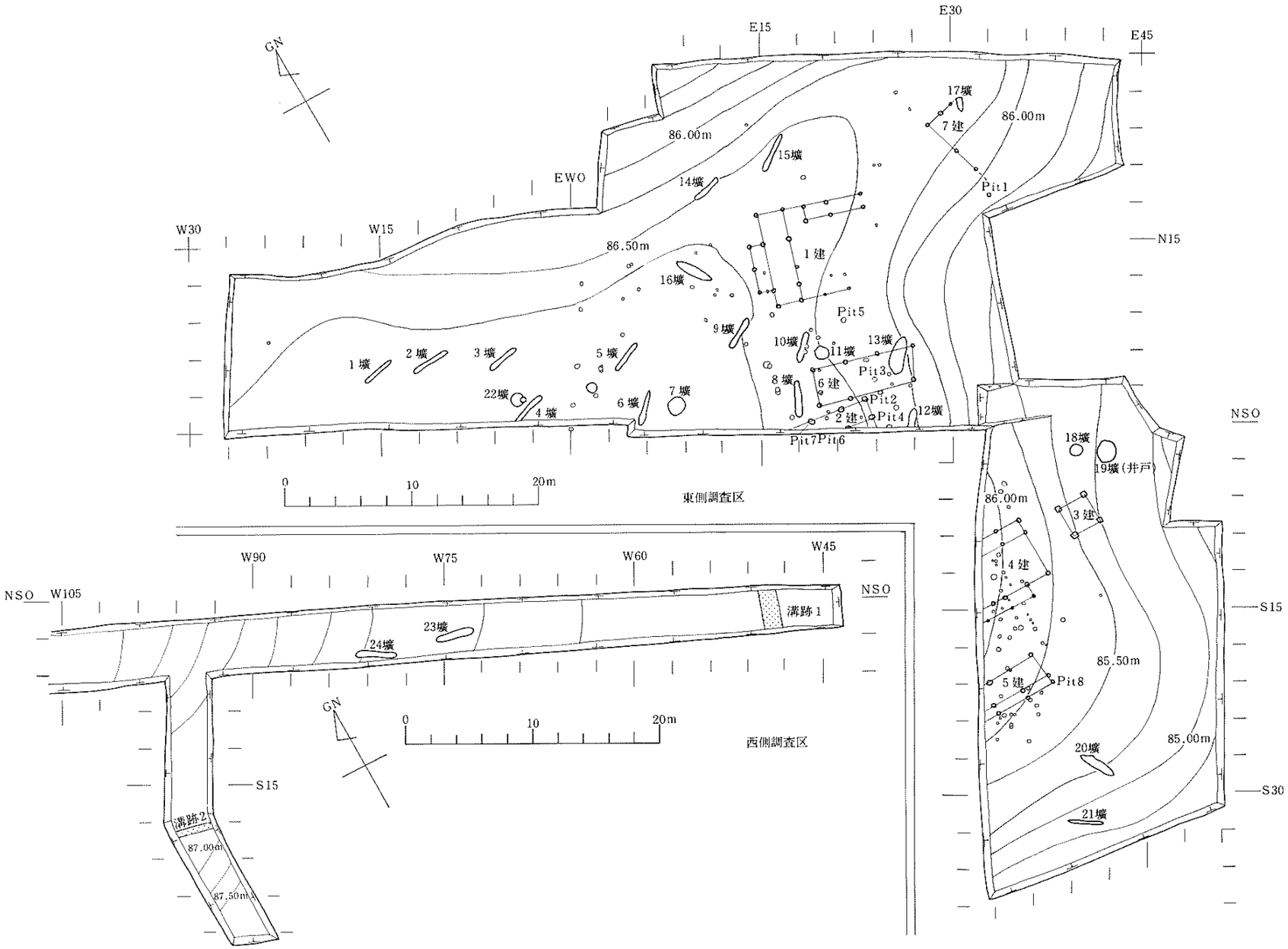
２層：黒色（10ＹR2/1）シルト層、旧表土（黒ボク）

３層：橙色（５ＹR6/6）シルト層　地山である

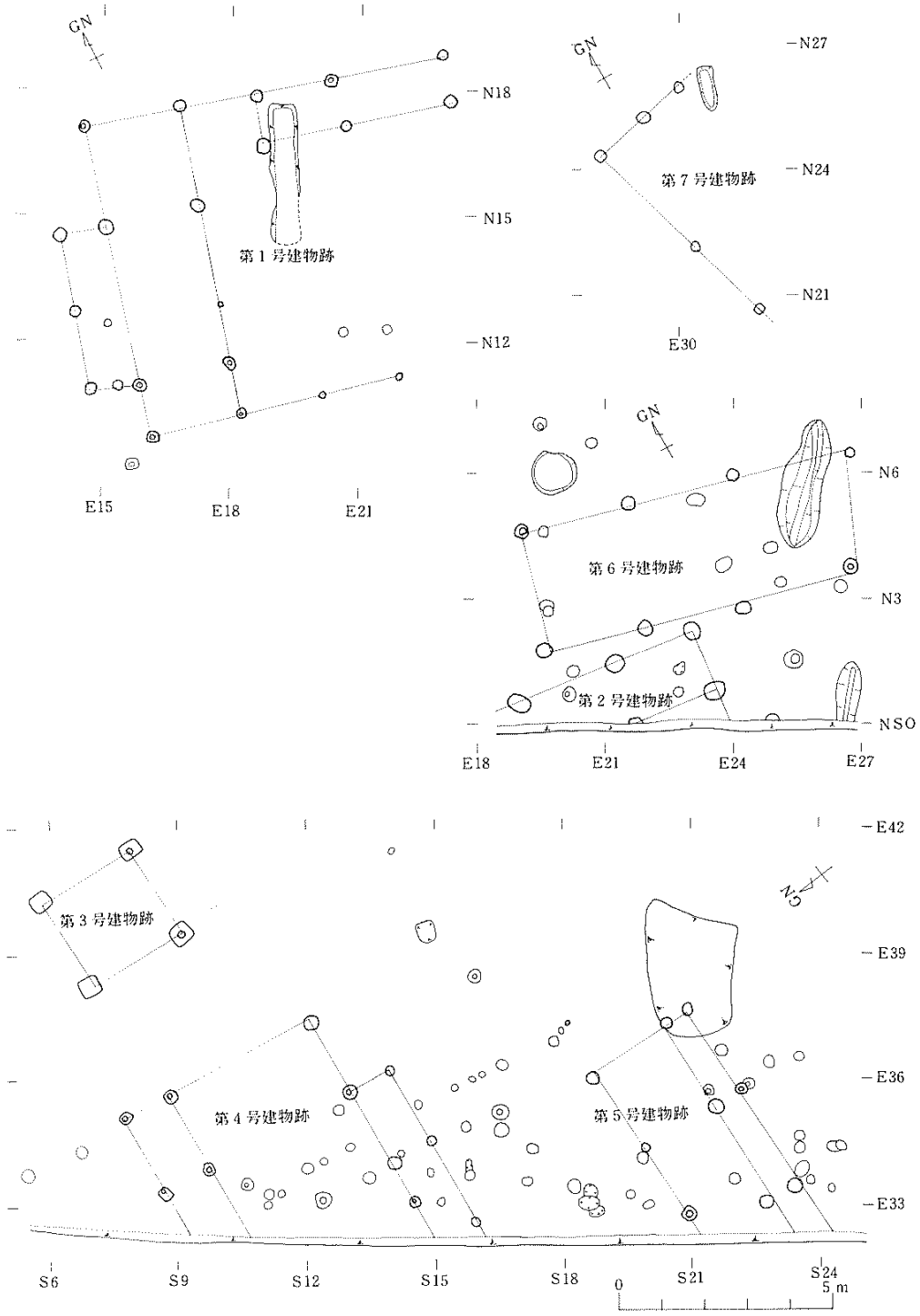
《掘立柱建物跡》（第４図）　調査区東側の標高86m付近の台地の落ち際に多数の柱穴が分布している。柱穴の掘り方は暗褐色のシルト質土で、中には地山粒を含むものもある。柱痕跡は黒褐色のシルト質土である。なお、遺物が出土した柱穴には番号を付し、遺構配置図（第３図）にしるした。これらの柱穴の組み合せを検討した結果、７棟の掘立柱建物跡


−209.6
−209.7
−209.8
−12.8
83.79
83.29
84.20
84.94
85.10
85.01
84.19
84.21
−12.9
85.92
86.06
85.06
86.81
85.34
85.81
85.59
−13.0
87.34
86.94
87.75
87.40
85.88
85.77
89.45
87.82
87.54
−13.1
GN
調査区
遺跡の範囲
88.92
89.60
−209.6
−209.7
−209.8
0
50
100m

第２図　中組遺跡調査区


E30
E15
E45
GN
17壙
7建
86.00m
15壙
14壙
EWO
Pit1
W30
W15
N15
86.50m
1建
16壙
Pit5
9壙
10壙
11壙
13壙
1壙
2壙
3壙
5壙
Pit3
8壙
6建
22壙
4壙
6壙
7壙
Pit2
2建
Pit4
12壙
Pit7
Pit6
NSO
18壙
19壙(井戸)
0
10
20m
東側調査区
W90
W75
W60
W45
NSO
W105
溝跡1
23壙
24壙
3建
4建
S15
85.50m
5建
Pit8
20壙
85.00m
S30
21壙
西側調査区
溝跡2
87.00m
87.50m

第３図　遺構配置図


GN
N18
N15
N12
第1号建物跡
E15
E18
E21
GN
N27
N24
N21
第7号建物跡
E30
GN
N6
N3
第6号建物跡
第2号建物跡
NSO
E18
E21
E24
E27
E42
E39
E36
E33
第3号建物跡
第4号建物跡
第5号建物跡
S6
S9
S12
S15
S18
S21
S24
0
5 m

第4図　掘立柱建物跡

が確認された。ただし建物跡の柱穴からは、その年代を決めるような遺物は出土しなかった。以下、個別に記述を進めることにする。

〈１号掘立柱建物跡〉　桁行４間以上・梁行３間の東西棟で、桁行北側は8.4m以上、梁行西側は7.6mである。東側は柱穴が残っていなかった。身舎の内部に間仕切りまたは床束がみられるほか、廂状の張り出しも西梁行にみられる。建物方向は桁行南側でＮ－75°－Ｗである。柱間寸法は桁行が1.6～2.8mで不均一である。柱穴掘り方は平面形が円形で、直径30～35ｃｍ、深さは10～50ｃｍである。柱痕跡は６柱穴で確認され、直径12～16ｃｍの円形を呈する。

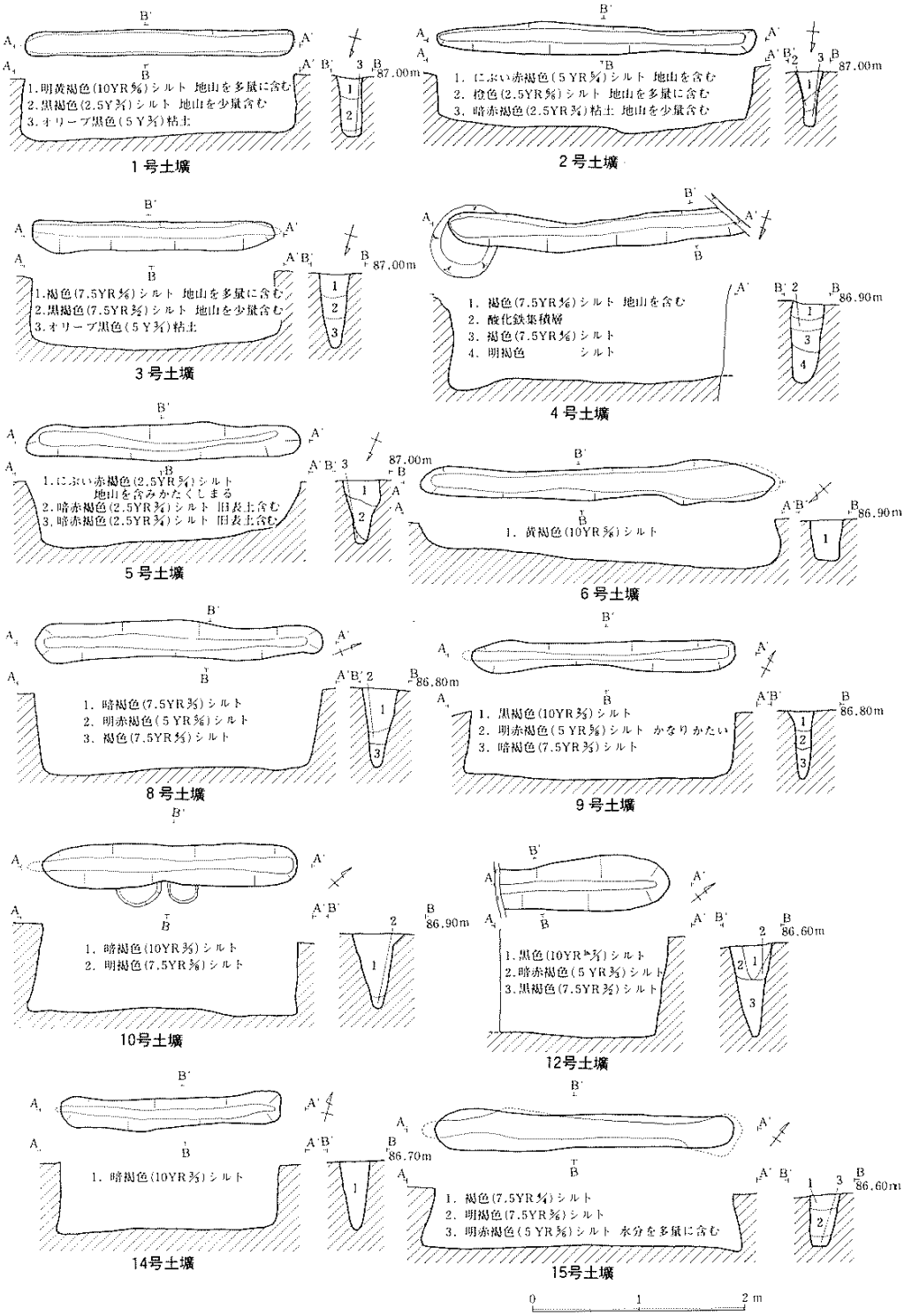
〈２号掘立柱建物跡〉　東西２間以上・南北１間以上の建物跡である。建物は調査区外南側へ延びており、全体の構造はわからないが、北側に廂をもつ建物跡とみられる。建物方向は北辺でＮ－83°－Ｗである。柱間寸法は東西が2.0～2.6mで不均一である。柱穴掘り方は平面形がほぼ円形で、直径46～50ｃｍ、深さは27～51ｃｍである。柱痕跡は確認されなかった。また、柱穴（Pit7）の掘り方底面には扁平な河原石２個が認められ、柱を立てた際の根石と考えられる。

〈３号掘立柱建物跡〉　２層上面で確認された。柱間一間四方の建物跡で、規模は東西2.2m、南北2.5mである。建物方向は南辺でＮ－90°－Ｗである。柱穴掘り方は平面形がほぼ正方形で、一辺50ｃｍ前後、深さは20～40ｃｍである。柱痕跡は南側の２柱穴で確認され、直径はともに18ｃｍの円形を呈する。

〈４号掘立柱建物跡〉　桁行３間以上・梁行１間の東西棟で、桁行南側は６m以上、梁行東側は3.8mである。建物は南北両側の桁行に廂をもち、調査区外西側へ延びている。建物方向は桁行南側でＮ－90°－Ｗである。柱間寸法は桁行が1.2～2.0mで不均一である。柱穴掘り方は平面形が円形と方形のものがある。円形のものは直径20～34ｃｍ、方形のものは一辺25～35ｃｍで、南側の廂を構成する柱穴は他に比べ小さい。深さは16～40ｃｍである。柱痕跡は６柱穴で確認され、直径10～14ｃｍの円形を呈する。

〈５号掘立柱建物跡〉　桁行３間以上・梁行１間の東西棟で、桁行南側は5.8m以上、梁行東側は２mであった。建物は南側に廂をもち、調査区外西側へ延びている。建物方向は桁行南側でＮ－90°－Ｗである。柱間寸法は桁行が2.0～2.6mで不均一である。柱穴掘り方は平面形が円形で、直径20～38ｃｍ、深さは14～44ｃｍである。柱痕跡は３柱穴で確認され、直径14～20ｃｍの円形を呈する。また、柱穴（Pit8）の掘り方底面には扁平な河原石１個が認められ、柱を立てた際の根石と考えられる。

〈６号掘立柱建物跡〉　桁行３間・梁行１間の東西棟で、桁行北側は８m、梁行西側は３mで、北東側では13号土壙と重複関係にある。また、東西の梁行は平行でない。建物方向は

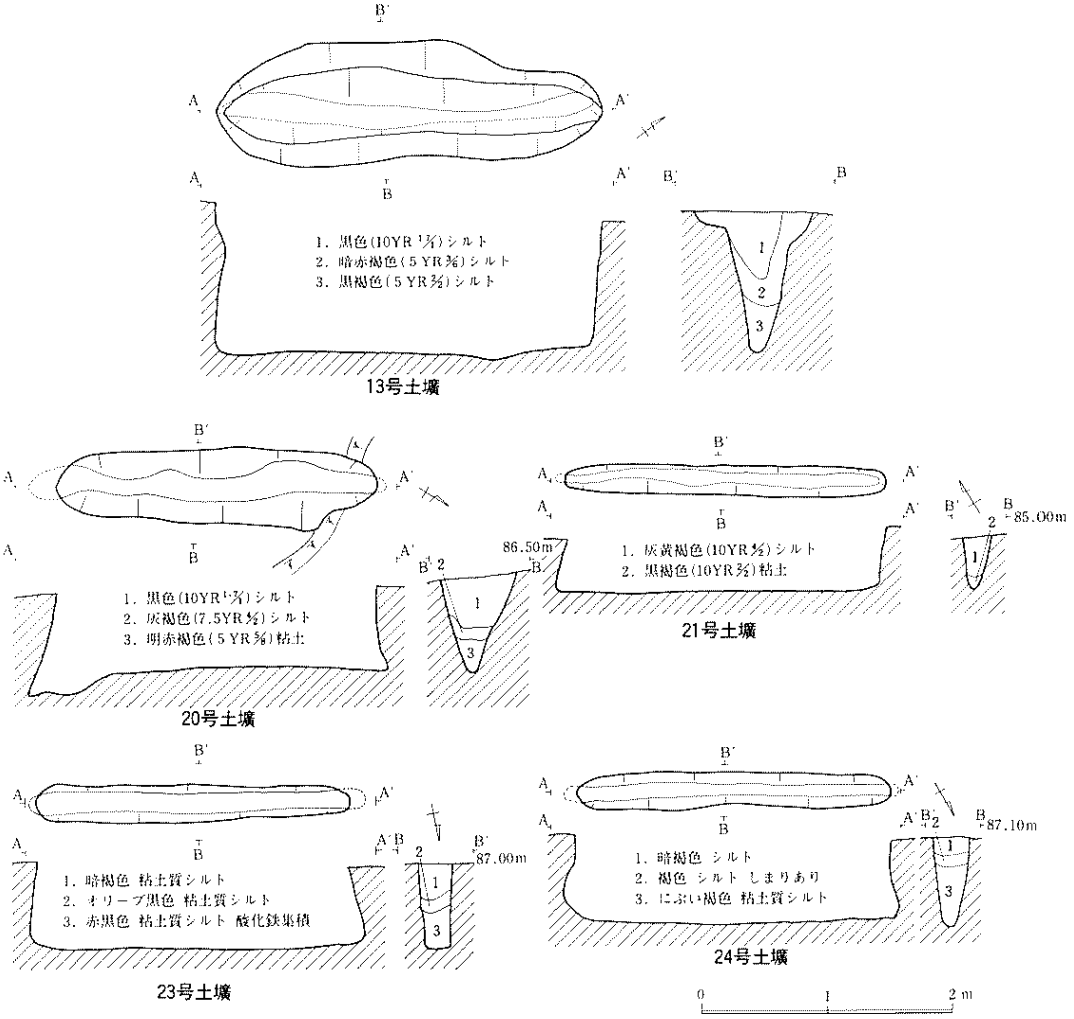

1.明黄褐色(10YR5/6)シルト 地山を多量に含む
2.黒褐色(2.5Y3/1)シルト 地山を少量含む
3.オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
87.00m
1号土壙
1.にぶい赤褐色(5YR4/4)シルト 地山を含む
2.橙色(2.5YR6/6)シルト 地山を多量に含む
3.暗赤褐色(2.5YR3/4)粘土 地山を少量含む
87.00m
2号土壙
1.褐色(7.5YR4/6)シルト 地山を多量に含む
2.黒褐色(7.5YR3/2)シルト 地山を少量含む
3.オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
87.00m
3号土壙
1.褐色(7.5YR4/6)シルト 地山を含む
2.酸化鉄集積層
3.褐色(7.5YR4/6)シルト
4.明褐色 シルト
86.90m
4号土壙
1.にぶい赤褐色(2.5YR4/4)シルト
地山を含みかたくしまる
2.暗赤褐色(2.5YR3/4)シルト 旧表土含む
3.暗赤褐色(2.5YR3/4)シルト 旧表土含む
87.00m
5号土壙
1.黄褐色(10YR5/6)シルト
86.90m
6号土壙
1.暗褐色(7.5YR3/3)シルト
2.明赤褐色(5YR5/6)シルト
3.褐色(7.5YR4/3)シルト
86.80m
8号土壙
1.黒褐色(10YR3/2)シルト
2.明赤褐色(5YR5/6)シルト かなりかたい
3.暗褐色(7.5YR3/3)シルト
86.80m
9号土壙
1.暗褐色(10YR3/3)シルト
2.明褐色(7.5YR5/6)シルト
86.90m
10号土壙
1.黒色(10YR2/1)シルト
2.暗赤褐色(5YR3/3)シルト
3.黒褐色(7.5YR3/2)シルト
86.60m
12号土壙
1.暗褐色(10YR3/3)シルト
86.70m
14号土壙
1.褐色(7.5YR4/4)シルト
2.明褐色(7.5YR5/6)シルト
3.明赤褐色(5YR5/6)シルト 水分を多量に含む
86.60m
15号土壙
0
1
2 m

第5図　土壙（その1）

桁行南側でN－76°－Wである。柱間寸法は桁行が2.4～2.6mで概ね均一である。柱穴掘り方は平面形がほぼ円形で、直径24～40ｃｍ、深さは5～46ｃｍである。柱痕跡は２柱穴で確認され、直径がともに16ｃｍの円形を呈する。

〈７号掘立柱建物跡〉　東西２間以上・南北２間以上の遺存状況のわるい建物跡で、東西は2.6m以上、南北は5.2m以上である。南東側は柱穴が残っていなかった。建物方向は西辺でN－16°－Wである。柱間寸法は東西が1.0～1.4mで不均一である。柱穴掘り方は平面形が円形と方形のものがあり、円形のものは直径22～30ｃｍ、方形のものは一辺20～30ｃｍ、深さは12～31ｃｍである。柱痕跡は確認されなかった。

《溝跡》　溝跡１・溝跡２ともに西側調査区の地山上面で検出した。溝跡１は上幅約２mで、ほぼ南北方向に延びており、堆積土は黒褐色のシルト質土である。溝跡２は上幅約１mで、



第６図　土壙（その２）

ほぼ東西方向に延びており、堆積土は黒褐色のシルト質土である。なお、出土遺物はともになく、堆積土からみて新しい溝と思われる。

《土壙》(第５・６・７図)　土壙は24基（１号～24号土壙）ある。その平面形には長楕円形と円形の２種類があり、断面形をふまえると深いものと浅いものがそれぞれにみられる。ここでは平面形が長楕円形で深い土壙をＡ類、浅い土壙をＢ類、また平面形が円形で深い土壙をＣ類、浅い土壙をＤ類というように４種類に分けて説明する。

○平面形が長楕円形 ｛ 深い……Ａ類 / 浅い……Ｂ類

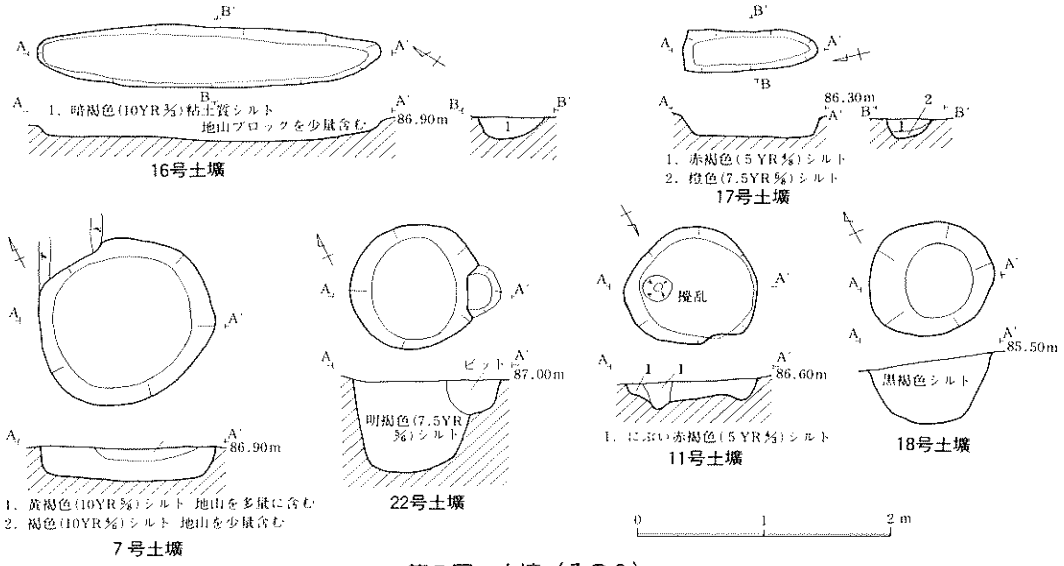
○平面形が円　　形 ｛ 深い……Ｃ類 / 浅い……Ｄ類

以下、種類ごとに記述を進めていくことにする。

Ａ類は17基ある。すべて地山上面で検出された。溝状土壙で一般にＴピットと呼ばれる。規模は長軸206～336ｃｍ、短軸24～98ｃｍ、深さ37～110ｃｍである。

Ｂ類は２基（16号・17号土壙）ある。尾根すじの地山上面で検出された。長軸は107ｃｍと271ｃｍ、短軸は36ｃｍと54ｃｍ、深さは16ｃｍと18ｃｍである。

Ｃ類は１基（19号土壙）である。３号掘立柱建物跡北側の２層上面で検出された。直径180ｃｍ、深さは湧水がひどく完掘はしなかったが、１ｍ以上である。形態的な特徴から、この土壙は井戸跡と思われる。



第７図　土壙（その３）

D類は４基（７号・11号・18号・22号土壙）ある。それぞれ７号土壙は６号土壙東側、11号土壙は10号土壙東側、18号土壙は19号土壙西側、22号土壙は４号土壙西側にある。直径100～144ｃｍ、深さ18～78ｃｍである。11号土壙は東側が撹乱を受けていた。22号土壙は新しいピットに切られていた。

《出土遺物》(第８・９・10・11図)　出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、石器、陶器、石製品（石臼）、銅製品（キセルの火皿）、古銭などがある。土壙Ａ類からは縄文土器（５号・９号・12号・13号・14号・15号土壙）、石器（４号・12号土壙）、陶器（13号土壙）、古銭（12号土壙）が出土した。土壙Ｂ類からは縄文土器（16号土壙）、石器（16号土壙）が出土した。土壙Ｃ類からは石製品（19号土壙）が出土した。土壙Ｄ類からは縄文土器（11号土壙）が出土した。柱穴からは縄文土器、弥生土器、石器、銅製品が出土した。基本層位からは縄文土器、弥生土器、石器が出土した。とくに沖積層の２層から多くの縄文土器が出土した。以下、遺物の年代を検討することにする。

〔縄文土器〕　胎土に繊維を含む早期～前期のもの、口頸部文様帯の隆起文がやや扁平化して流麗な渦巻状文の中期中葉（大木８ｂ式）のもの、その他小片のため時期が判定できないものが数点ある。数的には中期中葉（大木８ｂ式）のものがもっとも多い。

〔弥生土器〕　１点あり口縁部に撚糸文がみられるが、時期は不明である。

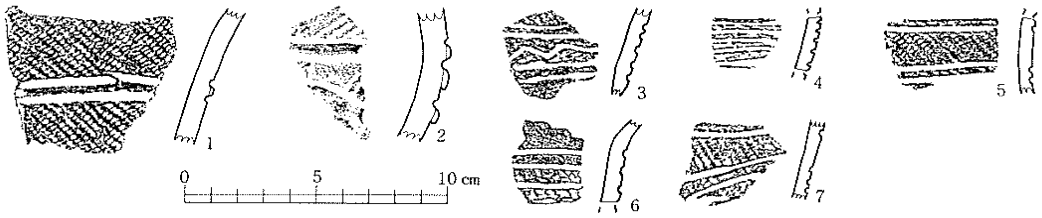
〔石　　器〕　数点あり出土状況からみて、縄文時代のものと考えられる。

〔陶　　器〕　１点あり近世の中頃と考えられるが、小片のため時期の決定は難しい。

〔石 製 品〕　下臼1/3が残存しているが、時期は不明である。

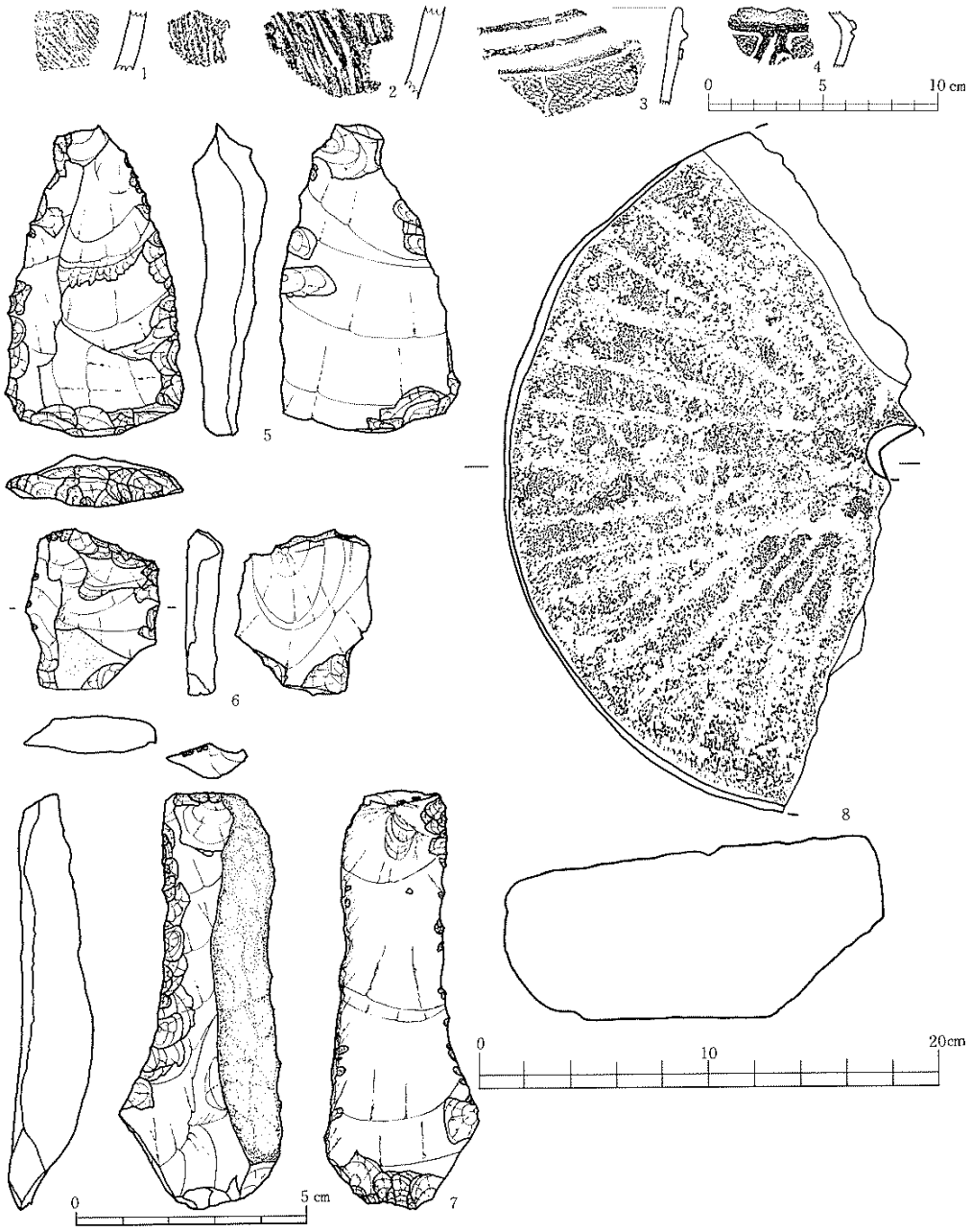
〔銅 製 品〕　キセルの１部が残存しているが火皿部だけなので、時期は不明である。

〔古　　銭〕　１枚あり残存状況が悪く貨幣名がわからないので、時期は不明である。



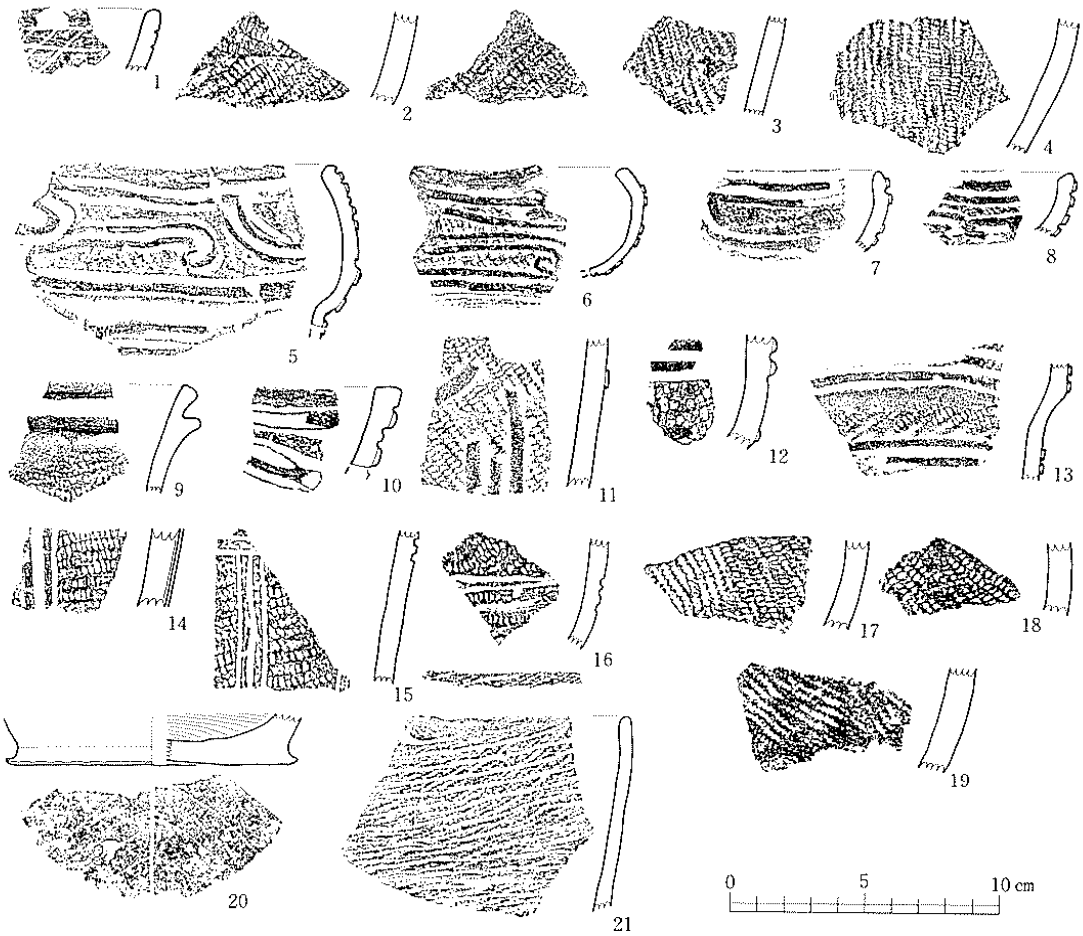
No.	層　位・遺　構	種類	器種	文　様　・　調　整　その他	時期・年代	写真	登録No.
1	５号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→隆沈線　内：ナデ	中　期	3-1	8
2	９号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→隆沈線　内：ナデ	中　期	3-2	24
3	12号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：不明縄文→沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-3	14
4	12号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：不明縄文→平行沈線　内：ナデ	――――	3-4	5
5	13号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→２本同時平行沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-5	13
6	15号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：不明縄文→ナデ→平行沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-6	9
7	15号土壙堆積土	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-7	10

第８図　溝状土壙出土遺物



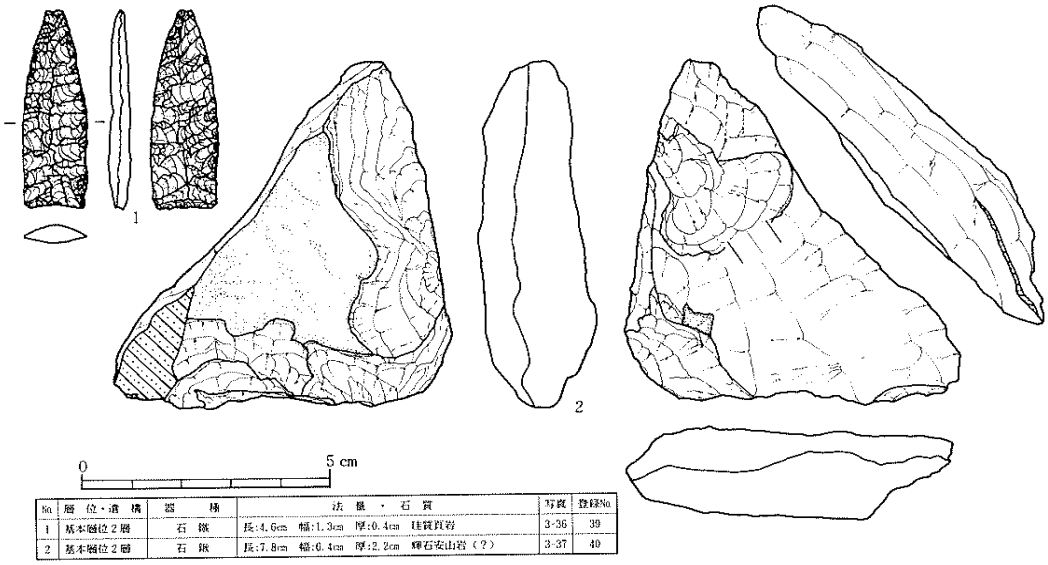
No.	層　位・遺　構	種類	器種	法　量・文　様・調　整　その他	時期・年代	写真	登録No.
1	Ｐｉｔ１堆積土	縄文土器	深鉢	外：条痕文　内：条痕文　胎土に繊維を含む	早期～前期	3-8	11
2	Ｐｉｔ２堆積土	縄文土器	深鉢	外：条痕文　内：ナデ　胎土に繊維を含む	早期～前期	3-9	21
3	Ｐｉｔ４堆積土	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆線・沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-10	30
4	Ｐｉｔ３堆積土	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆沈線　内：ナデ	中　期	3-11	22
5	16号土壙堆積土	エンド・スクレイパー		長：7.1cm　幅：3.9cm　厚：1.4cm　珪質頁岩	――――	3-33	36
6	Ｐｉｔ５堆積土	スクレイパー		長：3.6cm　幅：2.9cm　厚：0.8cm　珪質岩	――――	3-34	37
7	Ｐｉｔ６堆積土	サイド・スクレイパー		長：9.4cm　幅：3.4cm　厚：1.8cm　珪質頁岩	――――	3-35	38
8	19号土壙堆積土	粉ひき臼	下臼	安山岩　残存1/3	――――	4-4	35

第９図　その他の遺構出土遺物



No.	層位・遺構	種類	器種	文様・調整 その他	時期・年代	写真	登録No.
1	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：平行沈線　内：ナデ	早期	3-12	34
2	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：羽状縄文ＬＲ・ＲＬ（多条）　内：縄文ＬＲ（多条）　胎土に繊維を含む	早期	3-13	15
3	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ　内：ナデ　胎土に繊維を含む	早期～前期	3-14	4
4	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ　内：ナデ　胎土に繊維を含む	早期～前期	3-15	6
5	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→隆沈線による渦巻文　内：ナデ	大木８ｂ式	3-16	32
6	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→隆沈線による渦巻文　平行沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-17	31
7	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆沈線による渦巻文　内：ナデ	大木８ｂ式	3-18	26
8	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆沈線による渦巻文　内：ナデ	大木８ｂ式	3-19	27
9	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-20	28
10	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：不明縄文→隆沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-21	23
11	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→隆線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-22	25
12	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→隆沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-23	20
13	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-24	29
14	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→隆沈線　内：ナデ	大木８ｂ式	3-25	16
15	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＲＬ→沈線　内：ナデ	――	3-26	19
16	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ→沈線　内：ナデ	――	3-27	12
17	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ　内：ナデ	――	3-28	17
18	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ　内：ナデ	――	3-29	18
19	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：縄文ＬＲ　内：ナデ	――	3-30	7
20	基本層位２層	縄文土器	深鉢	外：ナデ　下端に木葉痕　内：ナデ　底部：木葉痕	――	3-31	2
21	基本層位２層	弥生土器	深鉢	外：撚糸文Ｒ　内：ナデ　口縁部：撚糸文Ｒ	――	3-32	3

第10図　基本層位出土遺物（その１）



No.	層位・遺構	器種	法量・石質	写真	登録No.
1	基本層位2層	石鏃	長:4.6cm 幅:1.3cm 厚:0.4cm 珪質頁岩	3-36	39
2	基本層位2層	石鏃	長:7.8cm 幅:0.4cm 厚:2.2cm 輝石安山岩（？）	3-37	40

第11図　基本層位出土遺物（その２）

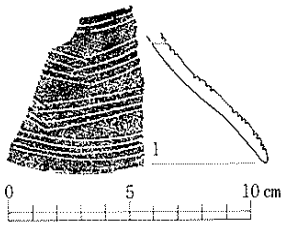
(2)堂の入遺跡（第12・13図）

検出された遺構は、K4トレンチの表土下80ｃｍの地山上面から土壙１基、ピット２基、またK5トレンチの表土下１ｍの地山上面からピット２基がある。遺物にはK2トレンチの中世陶器（擂鉢）１点があり、土壙やピットは中世の集落にかかわるものと考えられる。

なお、確認調査の結果、第12図に示すとおり遺跡の範囲を確認した。

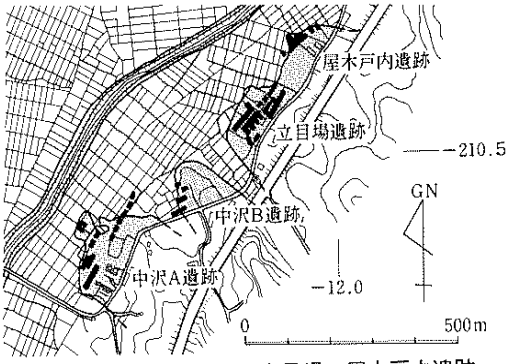
No.	層位・遺構	種類	器種	文様・調整 その他	時期・年代	写真	登録No.
1	K2トレンチ	中世陶器	擂鉢	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 使用痕有	中世	4-8	33

第13図　堂の入遺跡出土遺物

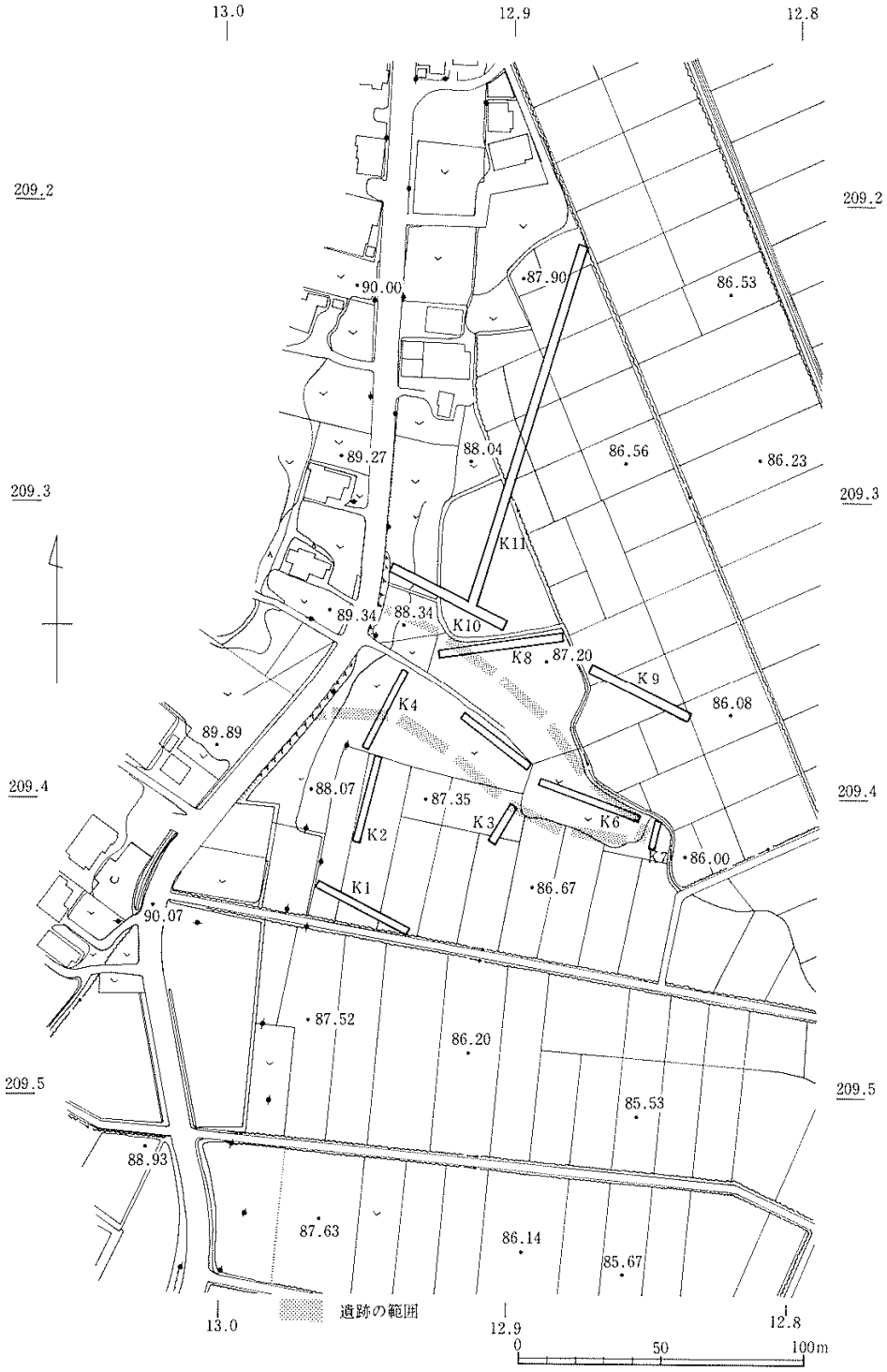


No.	層位・遺構	種類	器種	文様・調整 その他	時期・年代	写真	登録No.
1	基本層位	弥生土器	甕	外：2本同時平行沈線文 内：ナデ	Ⅲ期円田式	4-9	1

第14図　立目場遺跡出土遺物



第15図　中沢A・中沢B・立目場・屋木戸内遺跡トレンチ配置図



第12図　堂の入遺跡トレンチ配置図

Ⅲ　考察とまとめ

以上のように、中組をはじめとする６遺跡の調査の結果、今回遺構について報告できたのは中組遺跡だけである。中組遺跡では、掘立柱建物跡・溝跡・土壙などを検出した。ここでは調査の結果にもとづき、中組遺跡における掘立柱建物跡について、また検出土壙の約７割をしめる溝状土壙（土壙Ａ類）について考察を行う。

(1)掘立柱建物跡

東側調査区から７棟検出された。各建物の規模等については、Ⅱ章で述べたとおりである。以下、各建物跡の特徴および年代について検討を加える。

全体の規模がわかったのは３号・６号棟のみであった。３号棟は１×１間の棟で、６号棟は３×１間の東西棟であった。また柱穴掘り方は平面形が３号棟はほぼ方形、６号棟はほぼ円形というような相違点もみられた。

１号棟は東半が、７号棟は南東半が、それぞれ柱穴が残存していなかったので全容はわからなかった。

２号・４号・５号棟はいずれも南西半が調査区外に延びており、やはり全容はわからなかったが、棟方向、柱穴の形等において１号・６号棟と近似した特徴をもつ。

具体的な年代については、出土遺物がなく、判定が難しいが、１号･２号･４号･５号･６号の５棟は、建物の造りをみると柱間寸法が狭く、また均一でないという近世建築の特徴がみられることから近世の建物跡群と考えられる。また、多数の柱穴が建物周辺で検出されていることから、何時期かの建替えがあったものと思われる。

３号棟は柱穴掘り方の規模や形が、古代の建物跡に類似しているが、出土遺物がないので、時期はわからない。

７号棟に関しては遺存状態がきわめてわるいので詳細は不明である。

(2)溝状土壙

１）分布

中組遺跡で検出された溝状土壙は17基あり、東側調査区の南斜面と尾根東部、西側調査区の南東側斜面に分布するが、数的には東側調査区の南側斜面が13基と大部分を占めている。この南側斜面の分布をみると、中央やや東側の１号掘立柱建物跡の東西両側付近が分布せず、その南側に多く認められる。また、それらの多くは長軸が等高線に沿っている。

２）形態

平面形はすべて長楕円形を基調にする。短軸方向の断面形は上部から底部まで一定の傾斜ですぼまる「Ｖ字形」、ほぼ垂直におちる「Ｕ字形」・「⊔字形」、中途で急角度におちる

「Y字形」の３つに分けられ、数的には「V字形」が10基ともっとも多い。長軸方向の断面形は、開口部よりも底面が広がる、オーバーハングしているもの、開口部よりも底面が狭くなるもの、開口部と底面の広さがほぼ同じものの３つに分けられ、開口部よりも底面が広がるオーバーハングしているものが 11 基ともっとも多い。埋没状況はほとんどが自然堆積によるものである。なお、底面にピットをもつものはない。

３）規模（第１表）

土壙番号	方　向	長軸：cm	短軸：cm	深さ：cm
1号土壙	N－77°－E	254	26	64
2号土壙	N－85°－E	302	32	60
3号土壙	N－77°－E	220	32	72
4号土壙	N－71°－E	280以上	32	82
5号土壙	N－65°－E	260	36	68
6号土壙	N－45°－E	336	42	48
8号土壙	N－24°－E	272	40	80
9号土壙	N－57°－E	248	30	68
10号土壙	N－42°－E	240	44	74
12号土壙	N－38°－E	158以上	55	89
13号土壙	N－43°－E	310	98	110
14号土壙	N－77°－E	200	32	68
15号土壙	N－54°－E	282	42	50
20号土壙	N－29°－W	265	68	76
21号土壙	N－57°－W	255	24	37
23号土壙	N－79°－W	252	31	70
24号土壙	N－59°－W	252	20	72

第１表　溝状土壙の規模一覧表

溝状土壙の規模は、普通長軸２～６m、短軸40～80ｃmであるが、長軸は３～４mほどのものが多く、深さは確認面からではあるが、１～1.6mのものが多い。（福田：1981）。第１表は、中組遺跡の溝状土壙の方向、長軸・短軸の長さ、深さを示したものである。したがって中組遺跡の溝状土壙の平均規模は長軸264ｃm、短軸41ｃm、深さ70ｃmで比較的小さなものといえる。

４）堆積土の状況

２号土壙の堆積土の状況をみてみると、底面直上層が暗褐色粘土、その上層が橙色シルト、最上層がにぶい赤褐色シルトの３層に分けられる。第２層は開口部の肩や壁の崩れと考えられ、各層とも自然堆積の様相を示している。このような状況はほとんどの土壙について認められ、溝状土壙は廃棄時に開口状態で、その後自然に埋没していったと考えられる。

５）配列・年代

溝状土壙の配列状況についてみると、１・２・３・５号土壙はほぼ直線上に並んでおり、配置されたものと思われる。ただし、土壙間隔は4.5m･6.5m･10.5mと不均一である。また、４・6号土壙、８・12号土壙、９・10・13号土壙、14・15号土壙、20・21号土壙、23・24号土壙はそれぞれ配置された可能性が考えられる。これら溝状土壙の年代については遺構に共伴する遺物の出土例がなく、堆積土からの出土遺物も極めて少ないため特定できないが、わずかではあるが縄文中期中葉（大木８ｂ式）の土器片が出土している土壙がある。溝状土壙の埋土から出土する土器は、土壙を掘るときに掘りあげられた土器片が埋没の過程で土壙内に落ちこんだものであり、出土した土器は溝状土壙よりも古いものと考えられる。したがって土器の出土した溝状土壙の年代については縄文中期以降と思われる。

６）機能

中組遺跡の溝状土壙の特徴をまとめると以下の様になる。

① 平面形はすべて長楕円形である。

② 東側調査区では尾根東部に、等高線に沿って意図約に配置している。

③ 堆積土の状況は流れ込みや壁の崩壊による自然埋没である。

このような特徴をもつ土壙は、県内では川崎町支倉遺跡(手塚ほか：1986)、蔵王町堀ノ内遺跡（菊地：1990）などに類例があり、県外でも北海道や東北・関東を中心に多数報告されている。その機能としては墓壙説、貯蔵穴説、便所説、馬関連施設説、けものの陥し穴説などが唱えられているが、現在のところ陥し穴説（今村：1973 ほか）がもっとも有力である。特に近年の調査例では、東京都多摩ニュータウン№759 遺跡（東京都埋文センター：1982）の第１号土壙の堆積土の中～下位において、シカとされる歯や肢骨が出土し、また、中組遺跡の溝状土壙のような幅の狭い溝状の穴で動物をはさみこむ工夫は、西アフリカのパングエ族によって行われていた（今村：1983）という民族例もあり、これらのことから陥し穴の妥当性が高まってきている。前述した特徴①～③は、これら各地で報告されている陥し穴の特徴と共通することから、中組遺跡の溝状土壙はけものの陥し穴であった可能性が高い。

ま と め

1 今回の調査で、中組遺跡の全容が明らかになるとともに、堂の入遺跡の範囲を確認できた。

2 中組遺跡から検出された遺構には、掘主柱建物跡・溝跡・土壙・ピットがあった。また、それらの遺構や基本層位から出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・石器・石臼のほか、中近世の陶器・古銭・銅製品があった。

3 中組遺跡の丘陵およびその裾部に立地する掘立柱建物跡は、近世の建物跡群と考えられる。

4 中組遺跡から検出された多数の溝状土壙は、縄文時代の陥し穴と考えられる。

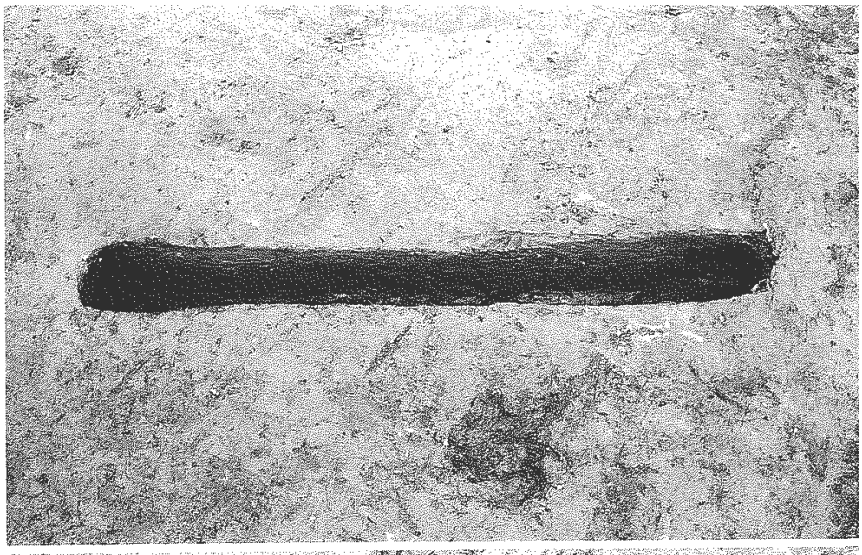
5 中沢Ａ・中沢Ｂ・立目場・屋木戸内の４遺跡からは、遺構が検出されなかった。

引 用・参 考 文 献

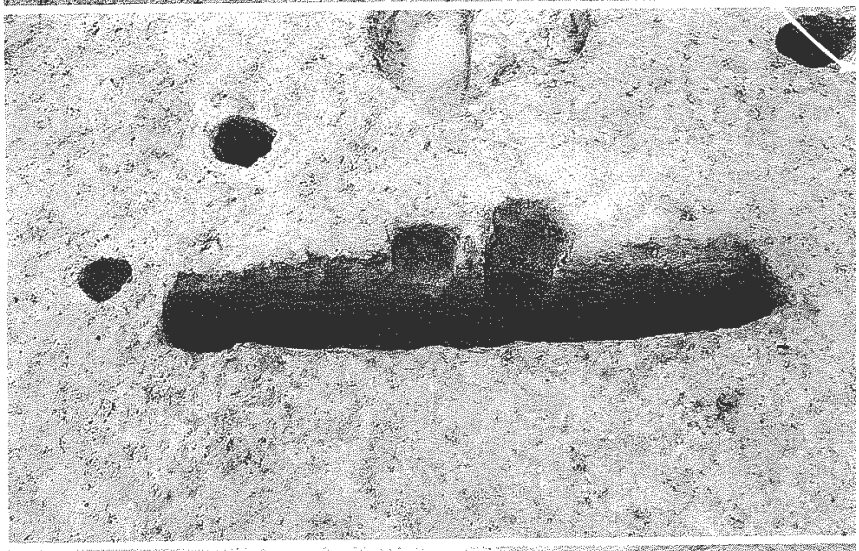
佐藤広史・佐藤甲二（1983）：茂庭　『庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告』
仙台市文化財調査報告書第45集

今村啓爾（1973）：「霧ヶ丘遺跡の土壙群に関する考察」　『霧ヶ丘』
霧ヶ丘遺跡調査団
今村啓爾（1983）：陥穴（おとし穴）　『縄文文化の研究２・生業』　雄山閣
菊地逸夫（1990）:「堀ノ内遺跡」　蔵王町文化財調査報告書
佐藤宏之（1989）：縄紋時代狩猟の民族考古学　『現代思想⑫』　青土社
鈴木真一郎・木皿直幸（1990）：「白山遺跡ほか」　『寂光寺跡ほか』
宮城県文化財調査報告書第135集
手塚　均・小川　出（1986）：「支倉遺跡」　『東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』
宮城県文化財調査報告書第120集
福田友之（1981）：「溝状ピット」研究に関する覚書　『弘前大学考古学研究第１号』
弘前大学考古学研究会
福田友之（1989）：下北半島尾駮・鷹架沼周辺の溝状ピット群『考古学論叢Ⅱ』　纂修堂
結城慎一（1989）：「上野遺跡」　『電力鉄塔関係発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第127集
宮城県教育委員会編（1984）：『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ』
宮城県文化財調査報告書第99集
宮城県教育委員会編（1987）：「小梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
宮城県文化財調査報告書第122集
宮城県教育委員会編（1990）：「摺萩遺跡」　宮城県文化財調査報告書第132集

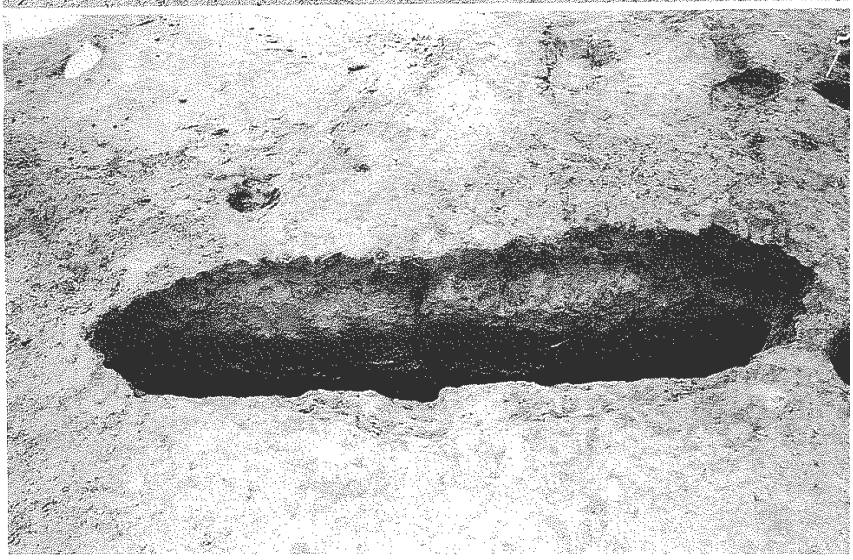
1 号土壙



10号土壙

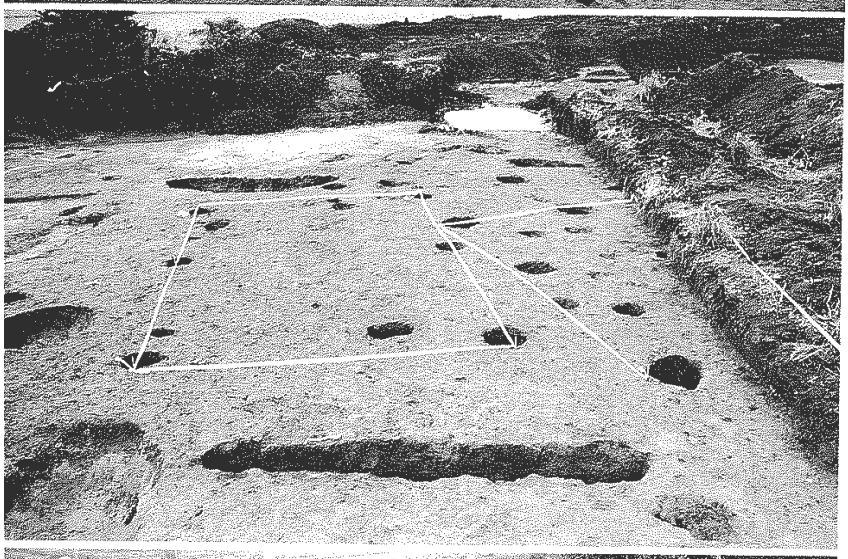


13号土壙

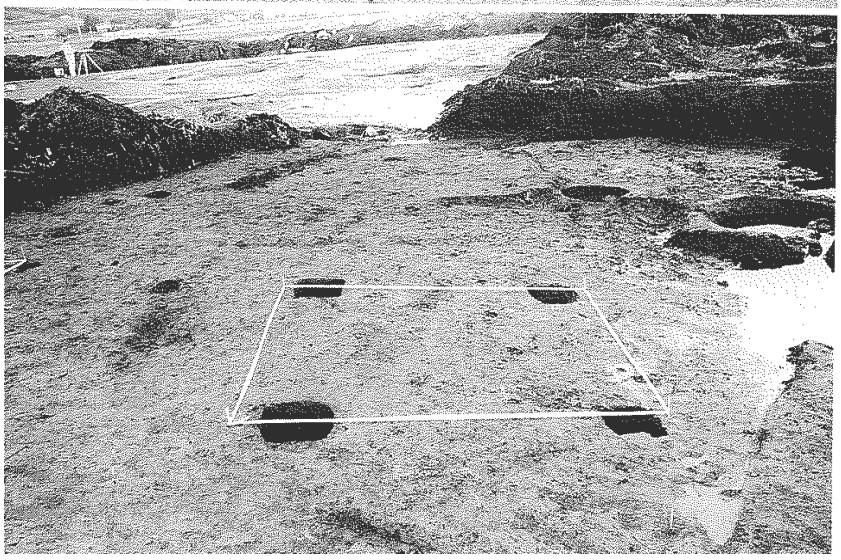


写真図版 1

1 号掘立柱建物跡（手前）
7 号掘立柱建物跡（奥）

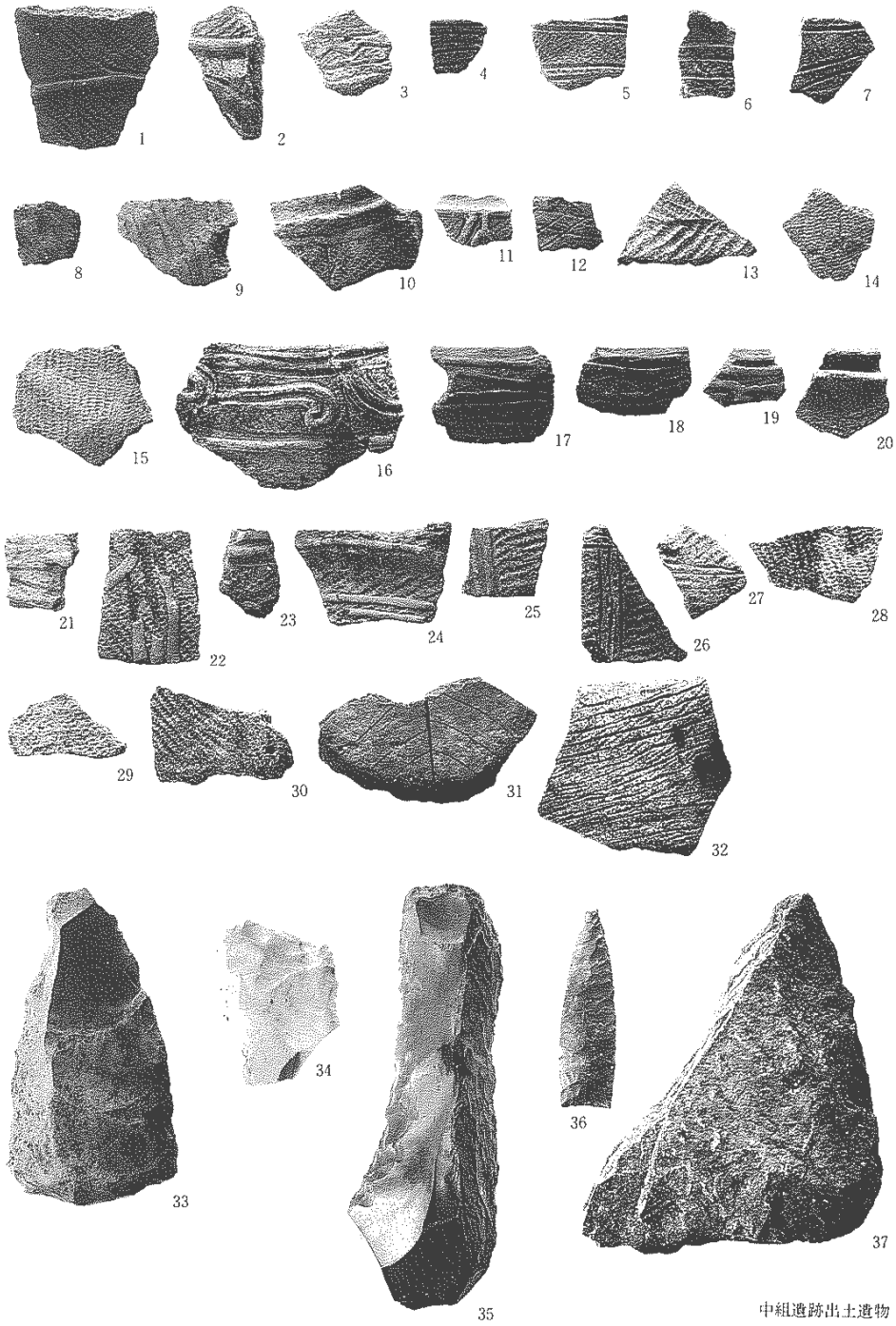


2 号掘立柱建物跡（右）
6 号掘立柱建物跡（左）



3 号掘立柱建物跡

写真図版 2



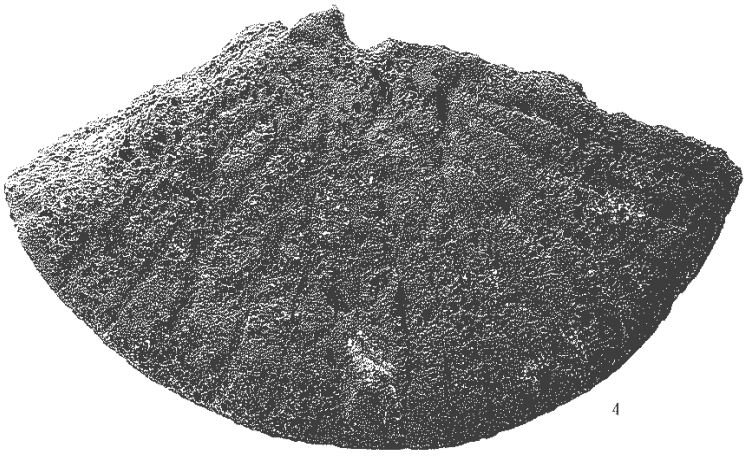
中組遺跡出土遺物

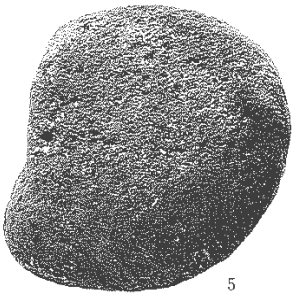
写真図版 3

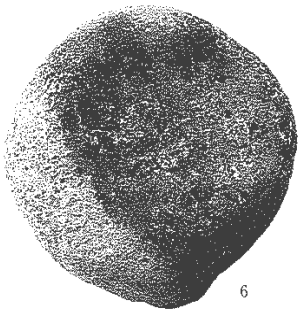
1

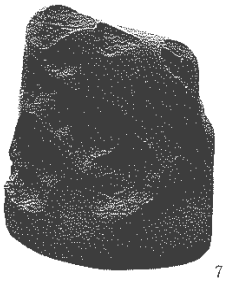
2

3


4


5


6


7

中組遺跡出土遺物

8

堂の入遺跡出土遺物

9

立目場遺跡出土遺物

写真図版 4

堀合館跡（ほりあいたてあと）

目　　次

１．位置と歴史的環境 313
２．館跡に関する文献 314
３．調査の内容 315
４．まとめ 317

調　査　要　項

遺　跡　名：堀合館跡（宮城県遺跡地名表発載番号62007）
遺跡所在地：本吉郡本吉町岩尻後田
発 掘 面 積：500㎡
調 査 期 間：平成２年９月10日～12日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：小井川和夫・真山悟・阿部博志・須田良平・岩見和泰

堀谷館跡（ほりあいたてあと）

１．位置と歴史的環境

堀合館跡は本吉郡本吉町岩尻後田にある。ＪＲ気仙沼線大谷駅の北方1.6ｋｍの地点に位置し、気仙沼市と境を接する地域にあたる。地形的には東北地方北半の太平洋側を縦断する北上山地南部の東麓に形成された海岸段丘上に立地する。この段丘は標高約20mほどで、遺跡の北～東にかけては概ね平坦であるが、南～西縁は沖田川によって開析され急斜面となっている。斜面下は東西に細長い扇状地性低地で、段丘との比高差は約10mである。現状は段丘上の大部分が水田となっているほか、一部が畑や宅地などに利用されており、斜面下一帯では水田が広がっている。

周辺の遺跡についてみると、古い時代では縄文時代の前浜貝塚や縄文時代・古代の野々

番号	遺跡名	立地	種別	時代	12	前浜貝塚	海岸段丘	貝塚	縄文（後・晩）
本吉町					13	平磯古館跡	海岸段丘	城館	中世
1	堀合館跡	海岸段丘	城館	中世	14	照合館跡	海岸段丘	屋敷跡	中世
2	土久戦場館跡	海岸段丘	城館	中世	15	鳴壺館跡	海岸段丘	城館	中世
3	峰平館跡	海岸段丘	城館	中世	気仙沼市				
4	直伝遺跡	海岸段丘	包含地	縄文	16	波路上東館跡	海岸段丘	城館	中世
5	鳳京館跡	海岸段丘	城館	中世	17	杉の下貝塚	海岸段丘	貝塚	縄文
6	野々下遺跡	海岸段丘	包含地	縄文、古代	18	岩井崎遺跡	海岸段丘	包含地	縄文
7	鳴壺館跡	海岸段丘	屋敷跡	中世	19	波路上西館跡	海岸段丘	城館	中世
8	洞館跡	海岸段丘	屋敷跡	中世	20	波路上西遺跡	海岸段丘	包含地	縄文
9	三島古墳群	海岸段丘	円墳	古墳（後）	21	杉の下南遺跡	海岸段丘	包含地	奈良・平安
10	中学校付近遺跡	海岸段丘	包含地	縄文、古代	22	内田遺跡	海岸段丘	包含地	縄文
11	府中館跡	海岸段丘	城館	中世	23	堀合館跡	海岸段丘	城館	中世

第１図　堀合館跡の位置と周辺の遺跡

下遺跡、中学校付近遺跡のほか古墳時代後期のものといわれる三島古墳群など古代以前の遺跡が分布する。このうち南西約12ｋｍの地点にある前浜貝塚では昭和53年に発掘調査が行われ、縄文時代晩期初頭の貝層の検出や晩期中葉の土壙墓の発見など内容の一端が明らかにされた。しかしこれら古代以前の時期の遺跡の数は現在のところ必ずしも多くはない。この地域はむしろ本遺跡をはじめ、土久戦場館跡や平磯古館、津谷城などの中世以降の館跡が多く散見するのが特徴といえよう。

２．館跡に関する文献

本館跡については、まず安永風土記御用書出に「堀合館　竪百五拾間　横百弐拾間　米倉玄蕃居館」とあり、仙台領古城書上では「山北館城　西二十五間　南北五十間　城主米倉玄蕃」となっており、いずれも米倉玄蕃が居住したところとしている。また江戸時代後期に書かれた地元の記録である岩尻村風土誌には「小館　高七間　竪三十間　横二十間　－中略－　延徳中葛西ノ臣安倍玄蕃之先祖築ト云」とあり、延徳年間（1489～92）に安倍玄蕃の先祖によって築かれたとしている。

米倉氏の出自に関係する記録については、米倉系図や安倍姓金家系譜などが知られている。現在のところ、米倉系図をもとに嘉暦元年（1326）頃に葛西の家臣薄衣氏平清村が米倉氏を名乗り津谷邑に住したとする説や、安倍姓金家系譜をもとに文和２年（1353）葛西氏配下にある気仙郡の金弥四郎俊清の三男孫三郎俊持が磐井郡薄衣邑米倉塞に住し米倉氏を称したとする説などがあるが明確ではない。一方両記録とも共通してそれぞれの後嗣としている玄蕃持村については、本吉町誌によれば津谷峰仙寺縁起の記録から応安５年（1372）に津谷邑獅子館（津谷館）に移住していたとされているという(本吉町教委：1978, 本吉町：1982)。

本館跡に関係する米倉玄蕃および安倍玄蕃については、本吉町誌では、米倉氏が安倍姓金氏の分かれとする先の記録に着目して同一人としている。さらに岩尻村風土誌による本館跡築城年代と米倉系譜による人物との対応から、津谷米倉氏の傍系にあたり、天正年間(1573～92)頃在住した玄蕃久持であるとしている。しかし一方では津谷城主とされる前述の玄蕃持村にあてはめる説もあり（紫桃：1973）、現在のところその一致をみていない。なお岩尻村風土識には「天正 18 年葛西滅亡ノ時玄蕃之子岩尻対馬戦死　同 19 年家僕館ニ火ヲ放テ逃ルト云」とあり、本館跡の下限年代に関係する可能性も考えられ注目される。

（米倉系譜）

持村（玄蕃允）－重村－村持－清村－義持－時持－重持－元持－持長

長持－久持（玄蕃允）

－本吉町誌（1982）より

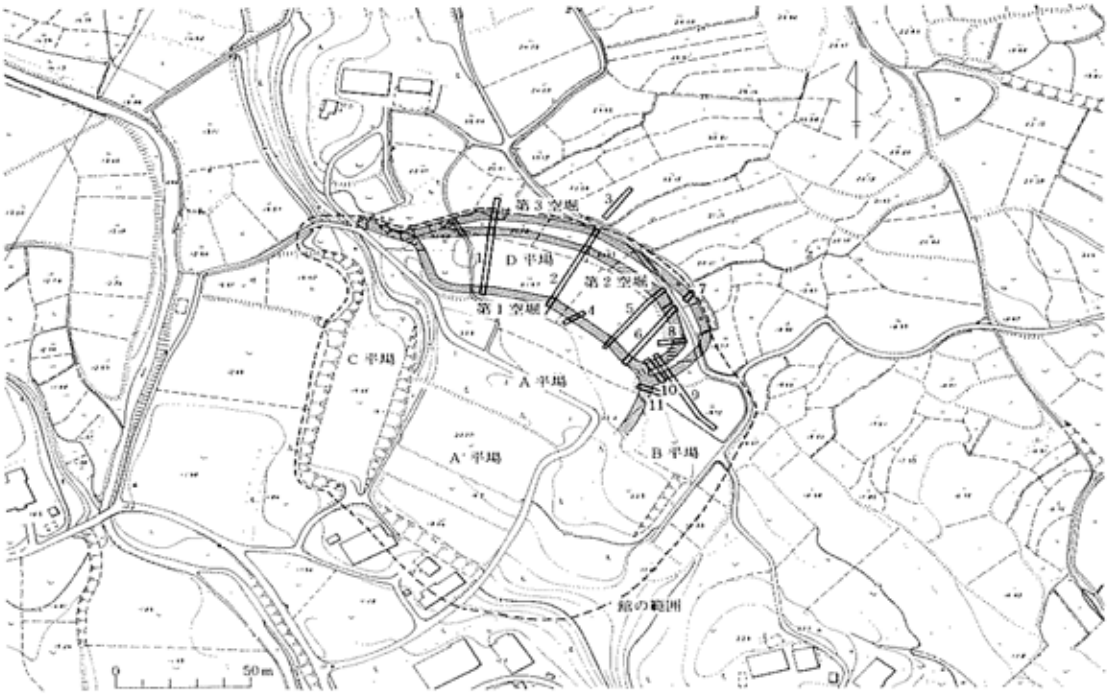
３．調査の内容

本調査は県営圃場整備事業が遺跡と係りをもつため、平成２年９月10日～12日にかけて実施することになったもので、その目的は工事予定地内における遺構の有無を調べるための確認調査である。

（１）遺跡の現状

館跡は起伏の少ない段丘の末端を利用したものである。その構造についてみると、表面観察ではおおよそ館跡の中心と考えられる平場（A）とその東側にある平場（B）および西側の平場（C）を確認することができる。

A平場は標高が18～22mで、東西50～70m、南北約100mの規模である。中央から南にかけては近年の開墾によって旧状が変化しており明確ではないが、北部と南部の高低差からみて、南半は一段低い平場（A´）であった可能性も考えられる。その南は比高差６ｍほどの急崖が形成され、館の南縁となっている。また浅い沢を隔てたB平場は、標高が20～22m、規模は東西約30m、南北約100mと細長く、緩やかに南へ傾斜している。その東側は南北に切れ込んだ沢によって外部と明瞭に区画される。C平場はA平場より一段低い位置にあり、現況では標高約16m、規模は東西約20m、南北約70mであるが、大部分は開墾を受け、旧状を失っている。西縁は恐らく段によって画されていたものと推定される。



第２図　館跡の現状とトレンチ配図

以上のように館の東・西・南の三辺は、沢や急崖をもって境としていることがほぼ明らかになっているが、しかし北方については緩やかな沢に面した変化に乏しい地形となっており、さらに開田によって改変されていることもあって、地表観察による区画施設や範囲の確定はできなかった。

（２）発掘調査

圃場整備事業はこの北辺地域にかかる計画になっていたため、同地域約600㎡を対象に発掘調査を実施することになった。発掘に際しては遺構およびその範囲確認作業を行うことを目的として、幅約２ｍのトレンチを調査の必要に応じて設定し遺構の検出を行った。

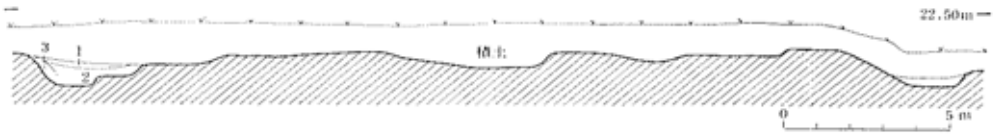
その結果、発掘対象地の全面がかなり削平・土盛をうけていたが、かろうじてＡ平場の北縁を画する空堀１本（１号）と、さらに北側の地点で互いに近接並行しながら延びる２本の空堀（２・３号）および両者に囲まれた現場（Ｄ平場）が検出され、館の北辺が明らかになった。また最も北にある３号空堀の外側は沢地となって下方に傾斜しており、自然の地形を利用しているのが確認された。以下検出された遺構について若干の説明を加えることにする。

【１号空堀】

Ａ平場の北縁を東西に走るのが確認された。その延びは、東側では第１トレンチでの検出状況から、Ａ平場北東部において南に折れ、Ａ・Ｂ両平場の間を南に下るのがほぼ明らかになっており、また西側は調査区外のため発掘による確認はできなかったものの、地形状況から西斜面の沢地に抜けてゆくものと推定された（第２図）。空堀の断面形は逆台形を基調とするが、北壁には底面より30ｃｍほど立ち上がった部分にテラス状の段がつく。規模は幅約3.5mで、深さ約１ｍを測るが、かなり削平されているため本来の大きさとはいえない。堆積土は黒味を帯びたオリーブ色を呈するシルトで、３枚の層に分かれる。いずれもグライ化が激しい。２層中からは漆器の椀のほか自然遺物としてアワビ貝が出土している。

【２・３号空堀】

２・３号空堀は本館跡の北端を面する施設である。それらは１号空堀の北側約20mの地点を２号空堀を内側にして３～５ｍの間隔で並行しながら東西に延び、東側で南に折れ１



第	層No.	土色	土性	備考	第	層No.	土色	土性	備考
1	1	オリーブ黒（5y3/1）	シルト	地山ブロックを含む、グライ層	2	1	オリーブ黒（5y3/1）	シルト	グライ層
空	2	オリーブ黒（5y3/1）	シルト	グライ層	空				
堀	3	暗オリーブ(7.5y4/3)	シルト	黄褐色(10yR5/6) 地山崩壊土がグライ化	堀				

第３図　第５トレンチ内空堀（１・２号）断面図

第４図　第１号空堀出土漆器

号空堀に合流するのが明らかになっている。また西側においても地形状況から１号空堀と同様西斜面の沢地に到ると推定される。２号空堀の断面形は逆台形で、規模は残存幅約４m、残存の深さ約1.3m、堆積土は黒味を帯びたオリーブ色で、グライ化している。３号空堀は湧水のため断面図作成はできなかったが、２号空堀と同様形態は逆台形、堆積土は黒味を帯びたオリーブ色のシルトが主体である。

【Ｄ平場】

Ａ平場の北側にあり館の最も北寄りに位置する平場である。Ａ平場より１段低く、１号および２・３号空堀によって囲まれており、東西約100m、南北約20mの規模をもつ。建物跡など予想された平場内の遺構については、全面が削平を受け失われたためか、確認することはできなかった。

４．まとめ

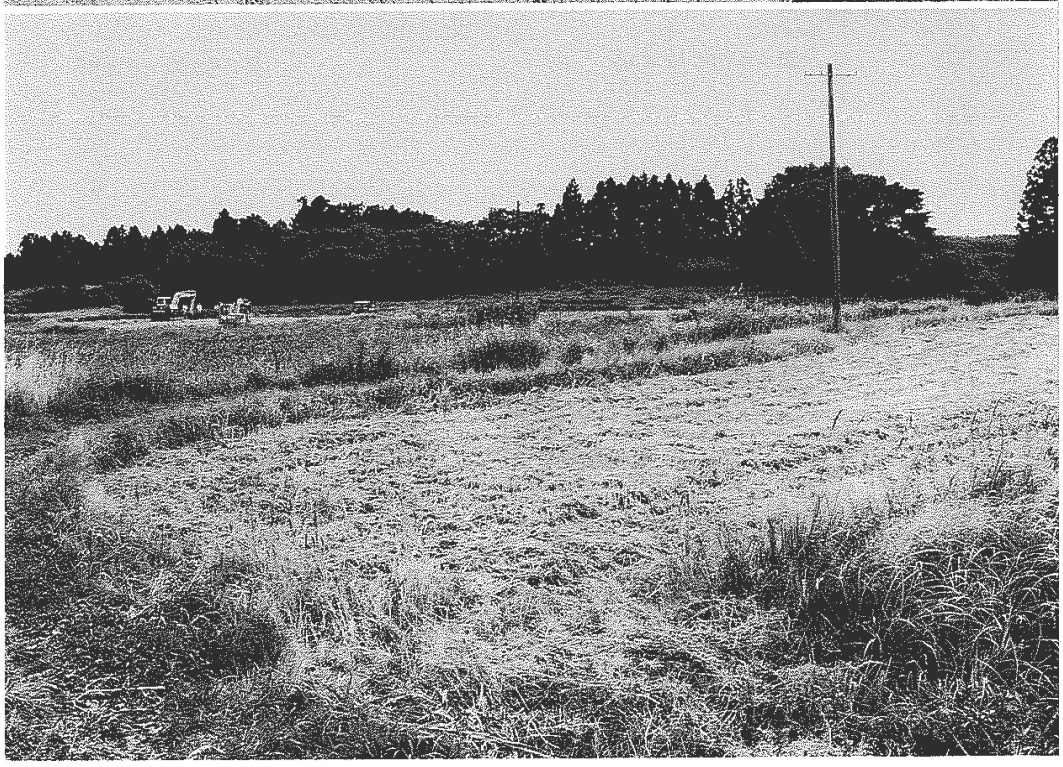
堀合館跡は本吉町の北部に位置し、北上山地南部の東麓に形成された標高約20mの海岸段丘上に立地している。

発掘調査の結果、平場１ヶ所(Ｄ平場)、空堀３本が検出され、それまで不明であった館跡の北端部が確認された。したがって地表観察による結果を併せまとめると、本館跡はＡ平場を中心としてその東・西・北の三方にそれぞれ平場を配する構造をもっており、外部とは段や空堀、沢などによって画されていることが明らかになった。

一方館主とされる米倉玄蕃については、応安５年（1372）に本吉に来住した支蕃允持村とするものと、その末裔で天正年間（1573～1592）に記録に登場する玄蕃允久持とするものとがあるが、いずれも具体的な根拠をもつものではない。しかし本吉町誌にいうように岩尻村風土誌にある延徳年間に安倍（米倉）玄蕃の先祖がこれを築いたとする記述に注目すれば、年代上持村であるはずはなく、久持ということになるであろうし、したがって本館跡の構築時期は南北朝時代ということになる。

＜引用・参考文献＞

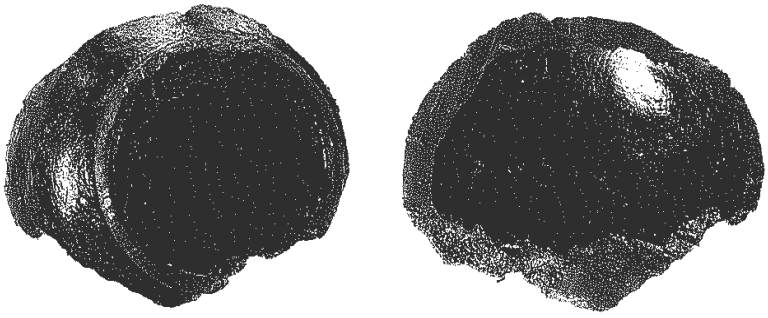
「風土記御用藩出」『宮城県史』第26巻
「仙台領古城書上」『仙台叢書』
紫桃正隆（1973）:「仙台領内古城館」第２巻
本 吉 町（1982）:「本吉町誌」Ⅱ



図版１　上：遺跡遠景 南より
下：遺跡遠景 北より

第１号空堀（北より）

第２号空堀（北より）



漆器椀

図版２　空堀と出土漆器

都遺跡（みやこいせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：都　遺　跡
遺跡記号：ＮＲ
所 在 地：刈田郡蔵王町大字平沢字都・窪田
発掘面積：約720㎡
発掘期間：平成２年11月19日～22日
調査主体：宮城県教育委員会・蔵王町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課・蔵王町教育委員会社会教育課
調 査 員：小井川和夫・森　　貢喜・芦立　敏彦

都　遺　跡（みやこ　い　せき）

都遺跡は、刈田郡蔵王町大字平沢字都・窪田に所在し、蔵王町役場の北東方約 3.5ｋｍの地点、円田盆地内のほぼ中央部に位置している。盆地内には藪川が流れ、付近に沖積地が形成されている。遺跡はこの沖積地内の微高地上、標高約 83～85mの所に立地している。この微高地は、以前、畑地として利用されていたが、昭和 37～38 年の藪川堤防構築工事の際の土砂採取地となり削平された。その時、多量の縄文時代後期～平安時代頃までの土器等遺物類が出土したが、その中に瓦が含まれていたことから地名「都」とともに苅田郡と密接な関係がある地域として注目されている。ただし削平後は水田化したために、現在は遺跡の範囲は不明確である。

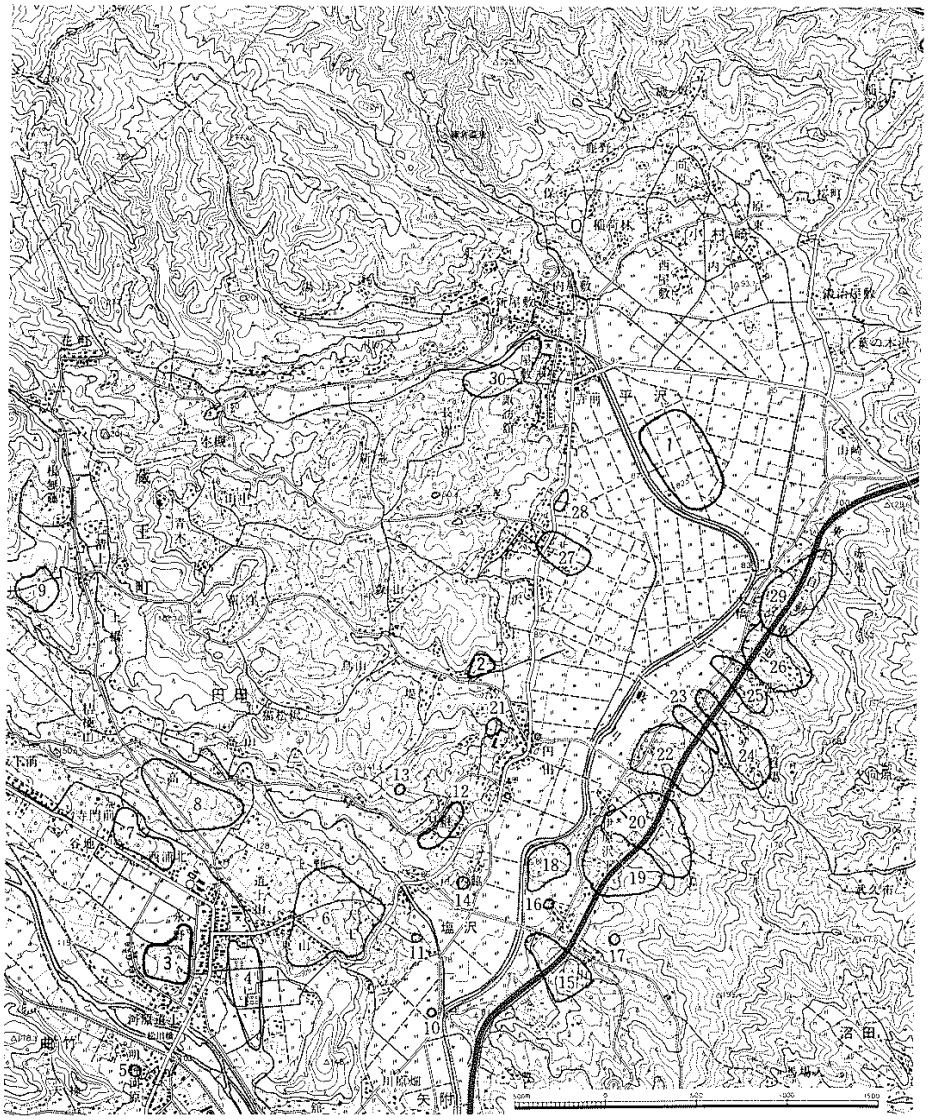
今回の調査は、遺跡周辺に開発が予想されることから、その範囲、遺構の存在等を確認するために実施したものである。

調査区の設定は昭和 22・23 年ごろに撮影された当地域の航空写真を手掛かりに・当時の畑地周辺に調査区を計10ヶ所のトレンチを設定した。その結果地表下約20～25ｃｍで地山（ローム層）があらわれるトレンチと湿地部分になるトレンチがあり、地山の広がりには限りがあることが判明した。

発見された遺構として、第１トレンチで土壙５基、第５トレンチでピット２、第10トレンチで土壙２基、竪穴遺構(？)、ピットがある。これらの遺構はいずれも地山面で確認され、しかも湿地部分に近い所に位置している。

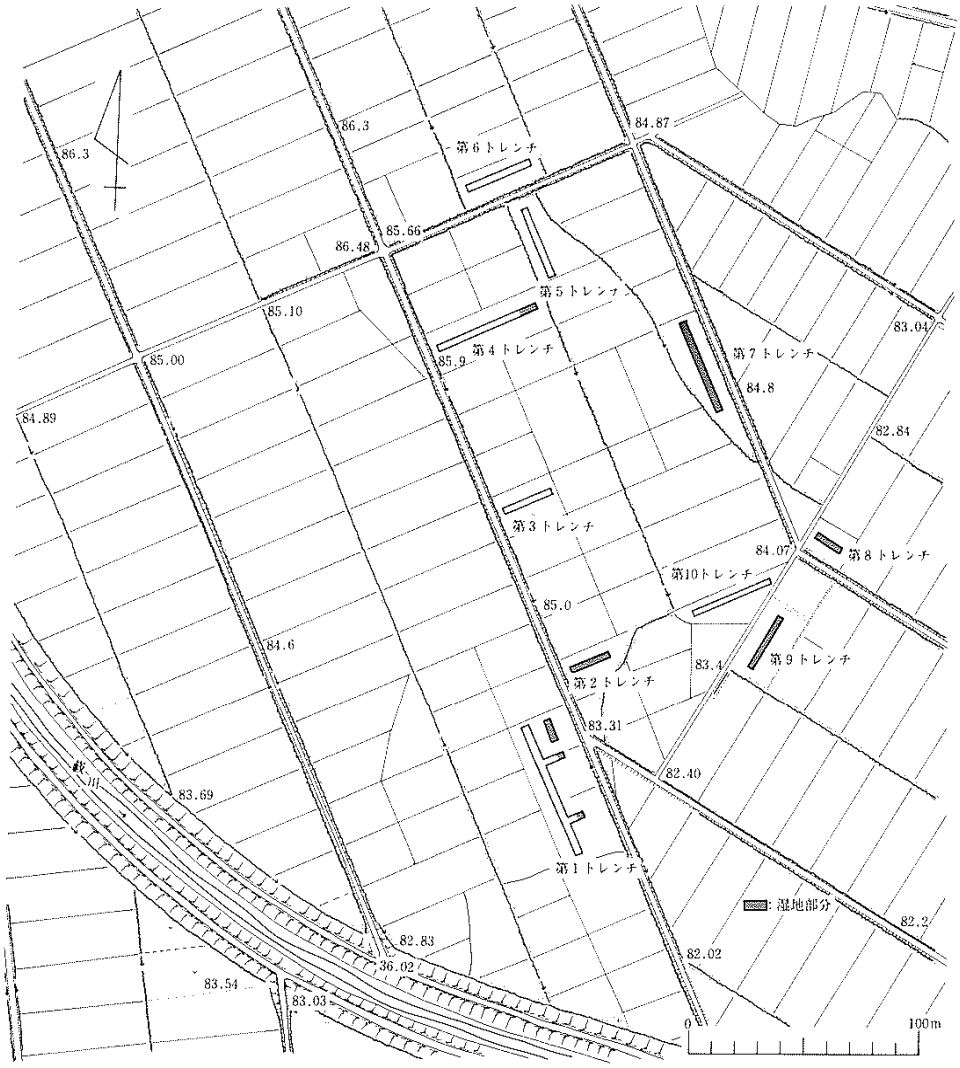
出土遺物は、第１トレンチ土壙５内・表土、第 10 トレンチ土壙２・表土から弥生土器・土師器坏・高坏・壷・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器・瓦（１点のみ）が出土しており、破片が多く図示できるものは少ない。その中で土師器の出土が主体を占める。第１トレンチ土壙 5 内出土土師器高坏（脚部のみ）、第 10 トレンチ土壙 2 内出土土師器壷（口縁～　部欠損）は形態・器面調整等の特徴により、古墳時代中期南小泉式期の土器と思われる。

今回の調査では、調査区設定の制約により全体的な範囲は性格に把握できなかったが、遺跡は沖積地内の残丘状の高まりに立地していることが明らかになった。今回発見された遺構は、湿地と接する部分近くの残丘上で確認されている。この残丘自体はかなり削手されているがその周縁部には遺構が残存していると思われる。今後、正確な遺跡の広がり・微地形の調査、遺構のあり方等を継続して調査していかなければならない。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	都遺跡	包含地	縄文後期、弥生、古墳、古代	16	西脇古墳	円墳	古墳
2	清水遺跡	包含地	弥生、平安	17	中屋敷古墳	円墳	古墳
3	西浦遺跡	包含地	縄文早～後期、弥生、古代	18	台遺跡	包含地	弥生、古墳、古代
4	東浦遺跡	包含地	縄文中・後期、弥生、古墳	19	塩沢北遺跡	集落跡	弥生、古墳、平安
5	白九頭竜古墳	円墳	古墳	20	伊原沢下遺跡	集落跡	古墳
6	上野遺跡	包含地	縄文、弥生、古代	21	堀ノ内遺跡	集落跡	縄文、弥生、奈良、平安
7	西浦B遺跡	包含地	縄文後・晩期、平安	22	中沢A遺跡	包含地	弥生、古代
8	高木遺跡	包含地	縄文中期	23	中沢B遺跡	包含地	弥生
9	湯坂山B遺跡	集落跡	縄文中期	24	立目場遺跡	包含地	弥生、古墳
10	鉾附神社古墳	円墳	古墳	25	屋木戸内遺跡	包含地	弥生、古代
11	天王古墳群	円墳	古墳	26	大橋遺跡	集落跡	縄文後期、弥生、古墳、平安
12	土ヶ市遺跡	包含地	弥生、古代	27	中組遺跡	包含地	縄文、平安
13	八幡山古墳群	円墳	古墳	28	堂の入遺跡	包含地	弥生、古代
14	宗勝堂古墳	円墳	古墳	29	赤鬼上遺跡	集落跡	弥生、平安、中世
15	大山遺跡	集落跡	縄文早期、弥生、古墳	30	諏訪神前遺跡	包含地	弥生、古墳、平安

第1図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡



第２図　周辺の地形とトレンチ配置図

写真図版１　遺跡周辺の航空写真（昭和20・23年撮影，矢印の白い部分が畑地）

遺跡遠景（南川薮川より）

第10トレンチ土壙２

同上土師器壺出土状況

写真図版２

西浦遺跡（にしうらいせき）

目　　次

１．はじめに 331
２．調査の成果 332
３．まとめ 333
引用参考文献
写真図版

調　査　要　項

遺 跡 名：西　浦　遺　跡
遺跡記号：ＮＳ
所 在 地：刈田郡蔵王町大字円田字西浦39－2
発掘面積：約559㎡
発掘期間：平成２年５月22・23日
調査主体：蔵王町教育委員会
調査担当：蔵王町教育委員会社会教育課
調査協力：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：齋藤　吉弘・森　　貢喜

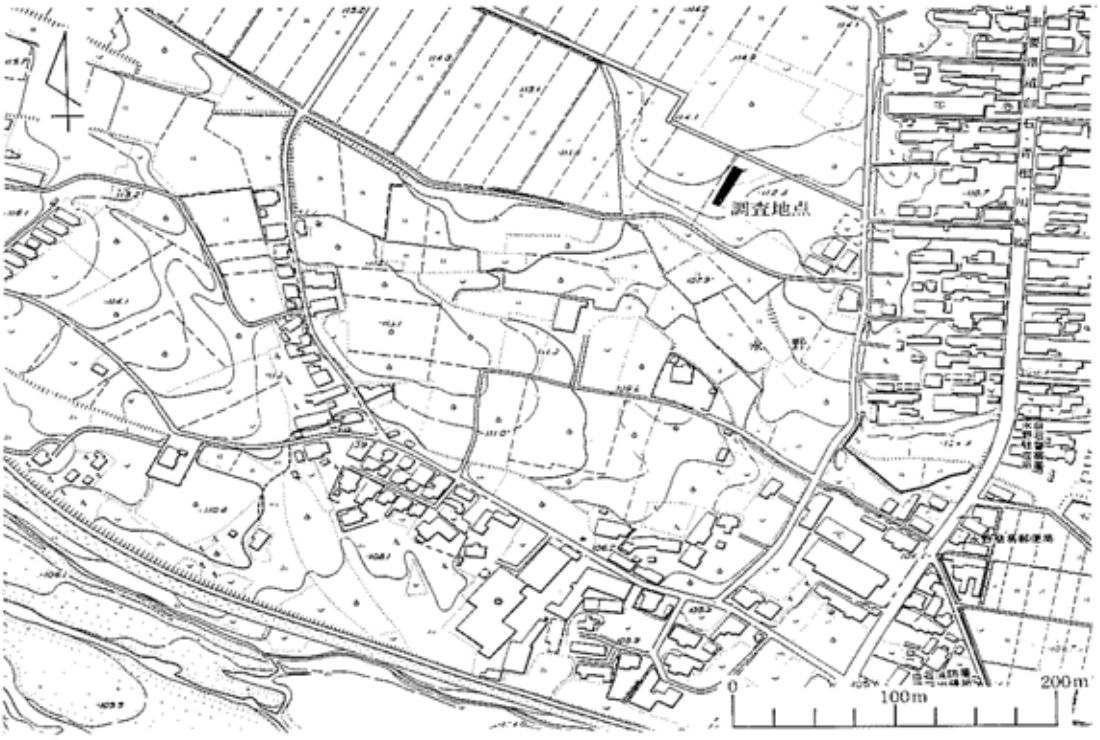
西浦遺跡（にしうらいせき）

１．はじめに

西浦遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦39－2に所在し、蔵王町役場の南方約280mに位置している。周辺一帯は松川流域の河岸段丘になっており、標高約122mの所に遺跡は立地している。遺跡のほぼ中央部には東西方向に沢状の低地が入り、遺跡を南北に分断している。今回の調査区は遺跡の北側に位置し、南側の沢に向かう緩やかな斜面になっている。現状は果樹園になっている。

調査区の西方約30mには弥生時代円田式土器の標式資料となった長頸壷が出土した地点がある（伊東：1957）。また、以前周辺一帯から縄文時代早～後期の土器等も採集されており（白石市：1976、蔵王町：1987）、当該時代の遺構等の存在が予想された。

発掘調査は、牛舎建築用地内の遺構の確認から開始した。その結果、調査区の北端西壁に約２／３程かかって住居跡（平安時代）１軒発見された。その後、地権者との話し合いで住居跡は保存することで協議が整ったので、確認調査のみに留め調査は終了した。



第１図　周辺の地形と調査地点

２．調査の成果

地表から地山面まで３層認められた。各層ともほぼ水平に堆積しており、遺物は殆ど含んでおらず、自然堆積土と思われる。地表から地山面までの深さは約 80ｃｍである。

(1)　発見された遺構

前述したように調査区の北側で住居跡１軒が確認された。確認のみで住居内の詳細については不明な点が多い。

【確認】地表下約 80ｃｍの地山面で確認された。確認面（住居内堆積土１層）には炭化材、焼土がみられる。

【平面形・規模】５ｍ×６ｍの隅丸方形を呈する。

【出土遺物】確認の際、堆積土１層から弥生土器、土師器坏、甕の破片が出土した。弥生土器は壷の胴部破片と思われる。単節縄文（ＬＲ）が施され、櫛状工具による沈線が一本みられる。円田式期の土器と思われる。土師器坏はロクロ使用で内面黒色処理されている。甕もロクロ使用である。

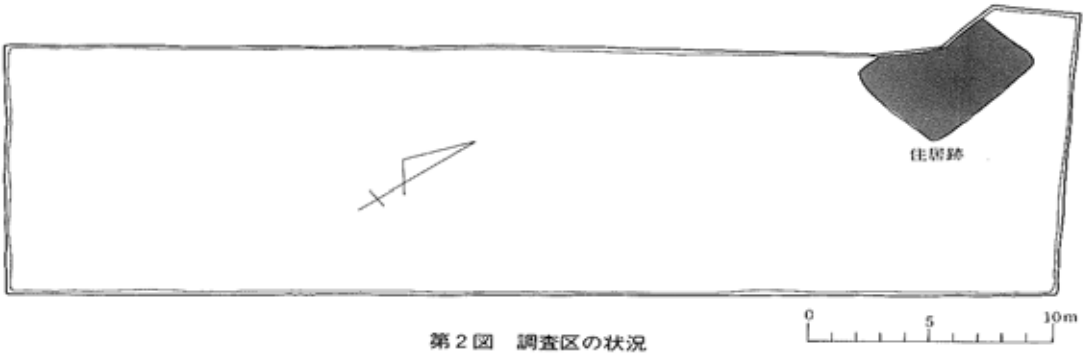
【年代・その他】堆積土１層の出土遺物の主体を占めるのは土師器である。しかもロクロ使用のものであることから平安時代の頃のものと考えられる。また、炭化材や焼土が比較的多くみられたことから焼失住居の可能性がある。

(2)　調査区の出土遺物

調査区内で住居跡堆積土１層として取り上げた土器以外の土器について説明していく。縄文土器、土師器甕の破片が出土している。

縄文土器（第３図１～７）

いずれも貝殻腹縁による条痕文が施されているものである。破片であり全体の器形は不明である。しかも磨滅が激しい。条痕は器内外面にみられるが、特に内面は判然としないものが多い。２、７の胎土には繊維が混入されている。１、２は口縁部資料であり、その



第２図　調査区の状況

第３図　出土遺物（縄文土器）

他は胴部破片である。１は波状口縁になり、口唇部には円形の刺突文が施されている。口縁部から頚部にかけて横位の刻目をもつ縦位の隆帯がみられる。条痕文は隆帯に沿った縦位の条痕と斜位の条痕とがみられる。２はやや外反して立ち上がるもので、口唇部には刻目がみられる。３には縦位の隆帯があり、横位の条痕文、または爪形の刻目がみられる。４には刺突文がみられ、横位の条痕文が施されている。５の外面には横方向の波状の沈線（条痕？）と横位の条痕文がみられる。

これらの土器と類似するものは七ヶ浜町吉田浜貝塚下層土器（後藤：1968）、名取市宇賀崎貝塚Ａ群土器（阿部：1980）等にみられ、縄文時代早期後葉の土器とされている。

３．まとめ

(1) 西浦遺跡は刈田郡蔵王町大字円田字西浦39－2に所在し、松川が形成した河岸段丘上に立地している。

(2) 今回の調査では平安時代頃の住居跡が一軒発見された。この時代の集落の中心は、調査区の北側にあると予想される。

〈引用・参考文献〉

阿部　　恵（1980）：「宇賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集
宮城県教育委員会

伊東　信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第１巻、宮城県

後藤　勝彦（1968）：「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚（Ⅰ）」『仙台湾周辺の考古学的研究』

蔵　王　町（1987）：『蔵王町史－資料編１－』

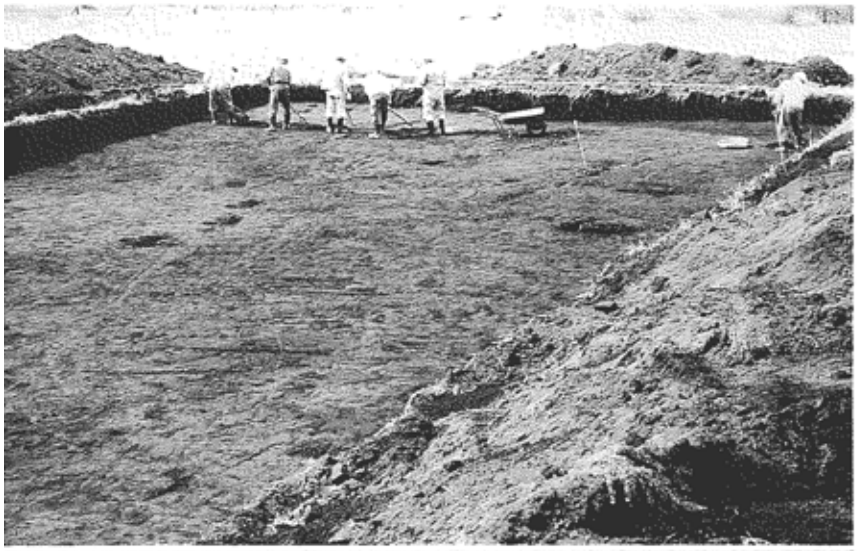
白　石　市（1976）：「考古資料編」『白石市史』別巻

遺跡遠景（東側より）

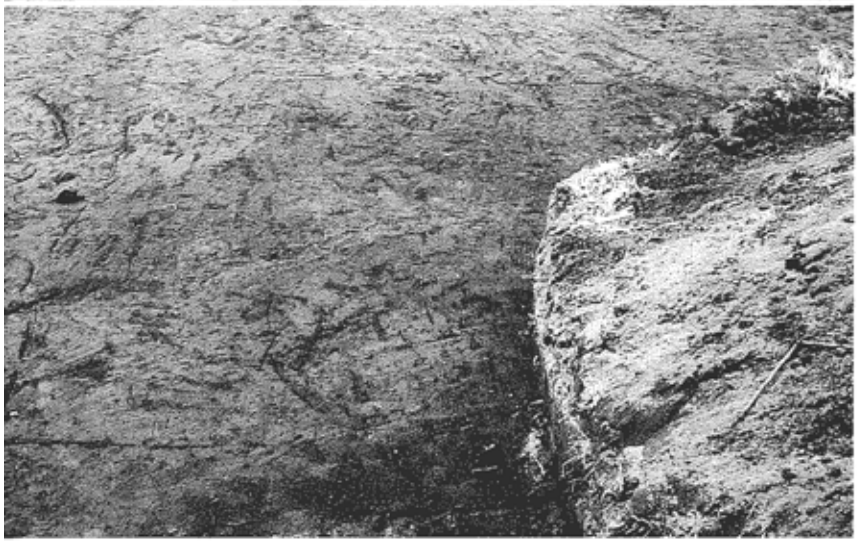
遺跡近景（果樹園部分）

調査地点より西側部分
（円田式長頸壺出土地点周辺）

写真図版 1



調査区の状況



住居跡確認状況

1

2

出土遺物（縄文土器）

3

4

写真図版 2

清水遺跡（しみずいせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：清　水　遺　跡
遺跡記号：ＮＴ
所 在 地：刈田郡蔵王町大字円田字清水上６－１
発掘面積：約100㎡
発掘期間：平成２年11月６日
調査主体：蔵王町教育委員会
調査担当：蔵王町教育委員会社会教育課
調 査 員：森　　貢喜・芦立　敏彦・高橋　典士

清水遺跡（しみずいせき）

1.はじめに

清水遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字円田清水上６－１に所在し、蔵王町役場の北東方約2.0ｋｍの丘陵南側斜面に立地している。この丘陵の東側では樹枝状に延び、末端では円田盆地に接している。遺跡は、南側の沢に向かって緩やかに傾斜していく標高90mの斜面上に立地している。現状は畑地になっているが、現地形は畑地造成の際改変している部分がある。

今回の発掘調査は、遺跡の北側部分が宅地造成予定地になったため、造成地内の確認調査を実施した。

2.調査の成果

造成予定地内の斜面に沿って、三本のトレンチを設定し調査を実施した。調査区全域には、削平の際の地山の土が覆い、その下に南側部分だけに旧表土が残っていた。地表から地山面までの深さは、北側部分で約18ｃｍ、南側部分で約63ｃｍである。特に北側部分は、地山まで削られている。

(1)　発見された遺構（第２図）

地山面でピット６個、溝状の土壙１基が発見された。ピットはいずれも柱痕跡は不明であり、径約30ｃｍ、深さ30ｃｍのものである。これらのピットは、東側トレンチでは確認できず、さらに西側部分に広がるものと思われる。配置関係については、調査区内では不明な点が多い。また、ピットからは遺物は出土していない。

溝状土壙は、西側トレンチの南側で確認され、傾斜面に直行する。規模は、長さ200ｃｍ

第１図　周辺の地形と調査地点

幅20ｃｍ、深さ30ｃｍである。土壙内の出土遺物はない。この土壙は、いわゆるおとし穴といわれている「Ｔピット」の一種と思われる。

(2)　出土遺物

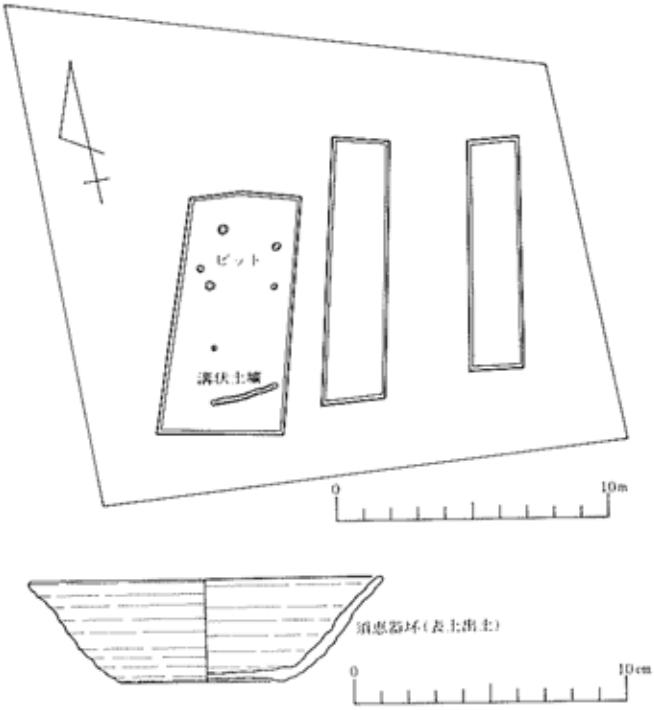
地山面の凹地に堆積していた旧表土中から、土師器坏、須恵器坏が出土した。量は少なく、いずれも破片である。

土師器坏は、ロクロ使用で内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理されている。第２図は須恵器坏である。低部から口縁部にかけて約１／３残存しているものである。体部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり、口縁部付近でやや外反気味となる。低部には回転糸取り痕がみられ、再調整はない。口径13.0ｃｍ、低径6.0ｃｍ、器高4.2ｃｍである。

3.まとめ

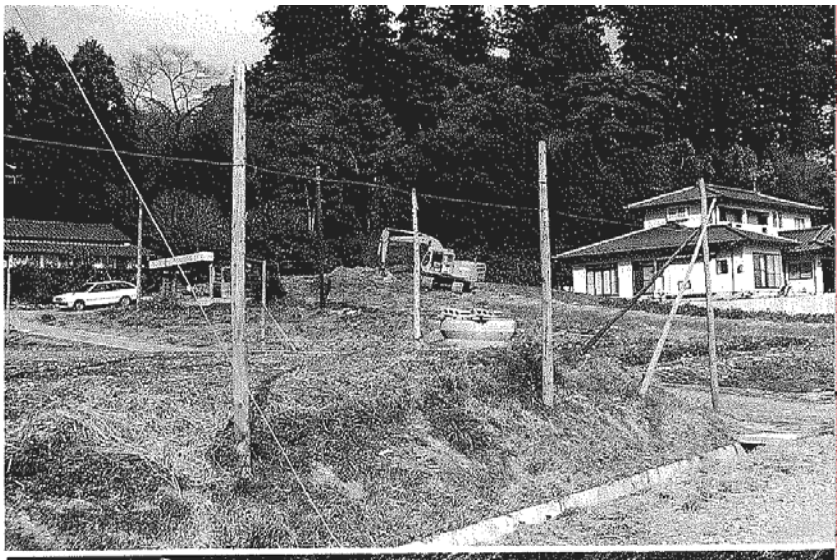
(1) 清水遺跡は、刈田郡蔵王町大字円田字清水上６－１に所在し、丘陵の南側斜面に立地している。現状は畑地になっているが、調査区付近はかなり削平され改変されている。

(2) 今回の調査では、ピット、溝状土壙が発見された。これらはいずれも調査区西側のトレンチからである。ピットは配置関係が不明であるが、掘立柱建物跡に伴う可能性がある。溝状土壙は、「Ｔピット」の一種と思われる。東側のトレンチからは、遺物、遺構等は発見されず、遺跡の中心は西側部分あるいは南側にあると考えられる。



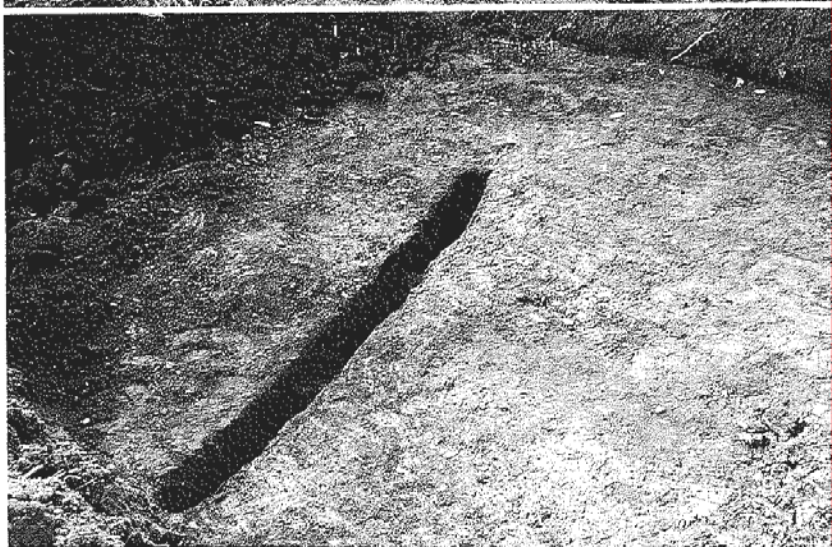
第２図　遺構配置図と出土遺物

遺跡近景（南側より）



調査区内ピット

同上溝状土壙



写真図版１

中屋敷前遺跡（なかやしきまえいせき）

調　査　要　項

遺 跡 名：中屋敷前遺跡（宮城県遺跡土地名表登載番号06036）
遺跡記号：ＦＺ
所 在 地：宮城県柴田郡大河原町字広瀬町
発掘面積：354 ㎡（第１地点 142 ㎡、第２地点 213 ㎡）
調査期間：平成２年 12 月 21 日～27 日
　　平成３年１月７日～10 日
調査主体：宮城県教育委員会・大河原町教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会・大河原町教育委員会
調査員　：佐々木安彦
調査協力：庄子睦夫・小野豊吉・森　貢喜・佐藤圭一

中屋敷前遺跡（なかやしきまえいせき）

１、遺跡の位置

中屋敷前遺跡は、阿武隈川の支流である白石川右岸に形成された標高約17mの自然堤防上に立地する。東北本線大河原駅から南東約0.5ｋｍの位置にあることもあって、昭和47年には周辺一帯に区画整理事業が実施され、旧状をとどめている場所は少ない。

区画整理事業に伴う側溝掘削の際、多量の瓦・土器が出土したことによって遺跡として周知され、昭和54・55年の保育所建設・住宅建設に伴う発掘調査の際には、礎石、柱穴も検出されている。

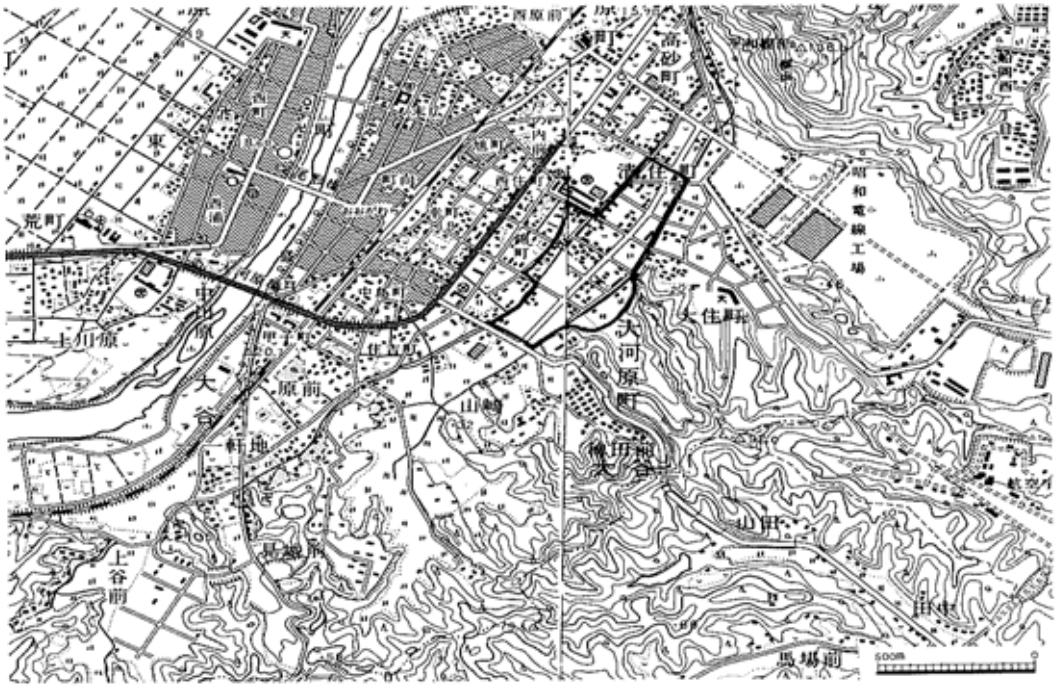
２、調査の概要

今回の調査も住宅建設に伴うものである。調査地点はかつて遺物・遺構が検出された地点に近接しており、本遺跡の中心域と考えられる地域である。

調査は、２地点において実施した（第２図）。

第１地点

現状において周囲より約１m低く、水田として利用されている。調査の結果、砂層、礫層が厚く堆積しており、自然堤防から外れた沖積地であることが明らかとなった。堆積層



第１図　遺跡の位置（建設省国土地理院発行１／2,5000 大河原・亘理を複製）

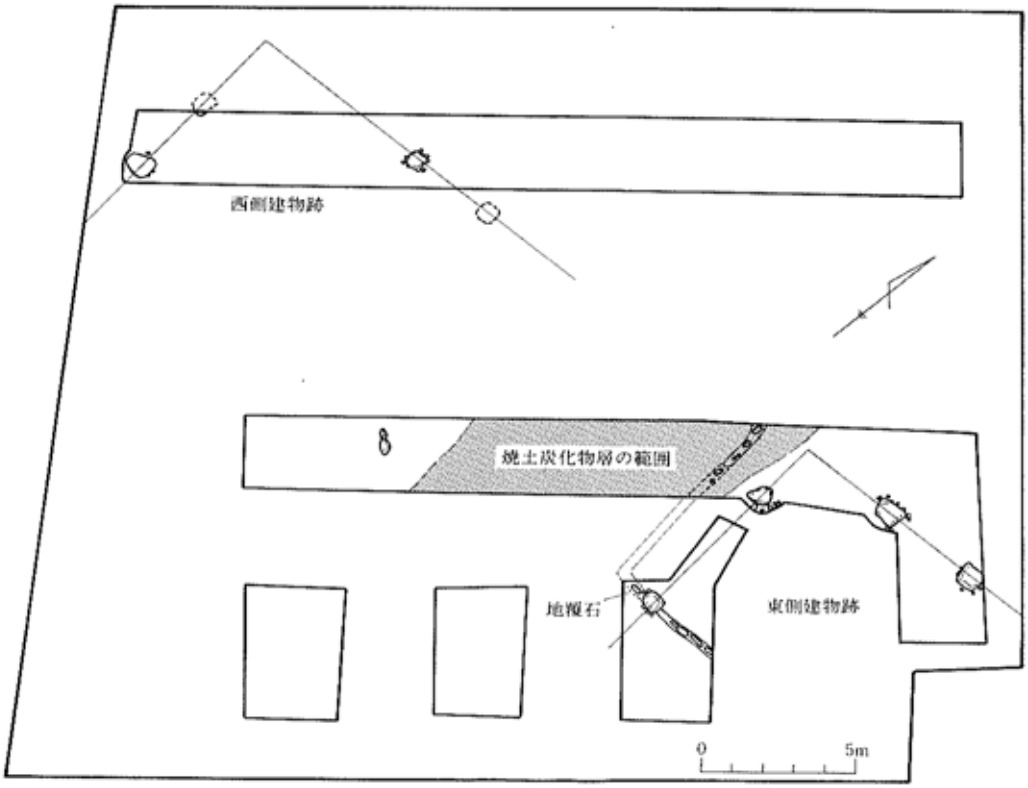
中から若干の土師器・須恵器が出土したが遺構はない。

第２地点

以前に礎石・柱穴が検出された地区の隣接地である。敷地内にはビニールハウス等の農業用施設が残存しており、調査部分は限定されたが、表土下70～80ｃｍで径80ｃｍ程の礎石が７個検出された。礎石には原位置から移動しているとみられるものもあり、なお不明な点が多いが以前の調査で明らかになっている礎石等も考慮すると４間×３間の柱筋をそろえて並列する東西棟２棟の存在が予想される。梁方向はほぼ磁北に一致する。

東側建物跡の南東には炭化物と焼土が混じる層が広く分布しており、ある時期の火災の痕跡とも考えられる。また、東側建物跡の礎石の下を通り直角に折れ曲がってのびる凝灰岩切石列も検出された。この切石列の延びは北側延長部では炭化物と焼土が混じる層に覆われており、古段階の地覆石とも考えられる。

出土遺物は土師器・須恵器・瓦等で、土師器は回転糸切り技法で切り離されたロクロ土師器坏が主体を占め、軒丸瓦の瓦当文様は宝相蓮華文の変形とみられる文様と理解されるものであることから、遺構の所属時期は平安時代中頃を中心とした年代が考えられる。



第２図　調査区

中屋敷前遺跡
遠景（東より）

第１地点
（手前の水田部分）
第２地点
（右上ビニール
ハウス畑地）

第２地点
東側建物跡

写真図版１

第２地点
西側建物跡

第２地点
東側建物跡下の地覆石

第２地点
出土遺物

写真図版２